

50周年記念誌「JADR のあゆみ」

目 次

巻頭言 「JADR のあゆみ」発刊にあたり	大谷 啓一	2
-----------------------	-------	---

歴代会長からのメッセージ

JADR 50周年を記念して—今日までのあゆみを振り返って—	河村洋二郎	3
回想の JADR	田熊庄三郎	5
JADR “こぼしてはならない話”	三浦不二夫	7
JADR の思い出	佐々木 哲	9
JADR と IADR	作田 守	11
JADR の将来	山田 正	28
思い出すままに	黒田 敬之	30
JADR の思い出	岡田 宏	36
節目での思い出	奥田 克爾	37
思い出と感謝	安孫子宜光	39

JADR への期待

IADR から JADR へ期待すること	黒田 敬之	41
PAPF の設立と JADR への期待	安孫子宜光	42

記念式典報告

JADR 第 50 回大会記念式典報告	大浦 清	44
---------------------	------	----

JADR 各種記録

総会・学術大会開催一覧	45
歴代学術奨励賞受賞者	46
歴代役員	46
歴代会長	47
歴代評議員	48
歴代名誉会員	48
歴代終身会員	48
歴代 KADR 派遣者	48

IADR 各種記録

Past IADR Unilever Division Travel Awards Recipients	49
Past IADR Science Awards Recipients	49
Past IADR Board of Directors & Committees Members	50
Past IADR Scientific Group Officers	52

JADR 年表	53
50周年記念誌「JADR のあゆみ」編集後記	奥田 克爾 54

「JADR のあゆみ」発刊にあたり

JADR 会長 大谷 啓一
 (東京医科歯科大学医歯学総合研究科硬組織薬理学分野教授)

このたび国際歯科研究学会日本部会 (JADR)50 周年記念誌「JADR のあゆみ」を発刊することができました。JADR は 1954 年 11 月 6 日に高橋新次郎先生を会長にわずか 16 人のメンバーで IADR の section として発足しました。現在の会員数約 2,200 名を考えると今昔の感があります。歯科医学の進歩に伴い JADR は目覚ましい発展を遂げ今日で 50 有余年の歴史を誇る学術団体となりました。

2002 年 11 月に開催された第 50 回 JADR 総会・学術大会(東北大歯・渡辺誠教授会長)において、JADR 第 50 回大会記念式典が壮厳に行われました。その式典では歴代会長の河村洋二郎、三浦不二夫、作田守諸先生方から記念講演をいただき、さらに山田正先生からは学会功労者表彰の際に代表して御挨拶をいただきました。会長職を経験された先生方のお話はどれも素晴らしく、JADR 創設の話から始まり、現在までの JADR の推移、また脈々と流れている基礎分野から臨床各分野までを含む歯科医学の学術集団としての誇りが語られました。歴代会長の方々のお話に出てくるエピソードは、JADR News Letter にも一部記事として掲載されることはありましたが、記録としてまとめたものはこれまでに存在しませんでした。2004 年 11 月に開催された第 4 回理事会において、当時の監事であられた亀山洋一郎先生が、JADR の創立から現在までの記録がないことを危惧され、「JADR のあゆみ」のような記録誌を編さんして残してはどうかとのご発案がありました。幸い予算をやりくりすれば発刊可能であることが分かり、安孫子会長をはじめ理事全員の賛成をいただいて「JADR のあゆみ」を作成することが決まりました。そこで奥田克爾監事を編集委員長にお願いし、鋭意作業を進めて今回無事発刊された次第です。

本書には過去に JADR を代表された先生方により JADR 発足の経緯やその後の発展の様子が詳細に記されており JADR の歴史を辿ることができます。また歴代の役員リスト、総会・学術大会リスト、Hatton 賞受賞者、JADR 会員が就任した IADR 役員リストなど記録として残すことが必要な事項も最大限掲載されています。内容をお目通しいただければ、日本の歯科医学発展のために JADR 創立を意図された先生方の熱気と情熱が素晴しかったこと、その後の発展を支えた会員の努力、2 回にわたる IADR 総会開催の経緯と準備の様子、そして会員の歯科医学発展に対する真摯な姿勢、これらを会員の方々に感じ取っていただけたと思います。それが本書発刊の最大の目的です。どうか親しく手に取っていただき、先達の方々の熱意と情熱を知っていただき、今後の JADR 発展の糧にしていいただければ幸いです。

最後にお忙しい中、本書に御寄稿いただいた先生方に深謝いたします。

2006 年 1 月

歴代会長からのメッセージ

JADR 50 周年を記念して
— 今日までのあゆみを振り返って —

JADR 名誉会員(1973～1974 年会長)
大阪大学名誉教授
河村洋二郎



はじめに

国際歯科研究学会(International Association for Dental Research, IADR)は1919年(大正8年)にDr. W. Giesによって米国、ニューヨークで設立された。

大正8年当時IADRでは正式に入会するための資格審査がきびしく、英文学術論文の少なかった日本の研究者は入会を希望しても資格審査に必ずしも合格するとは限らなかった。

IADRの中に日本部会がアメリカ本部によって承認されたのは1954年(昭和29年)のことであって今から約52年も昔の話である。しかし、ほとんど積極的な活動はできなかった。

I. IADR と私

筆者は正式にアメリカ本部に入会申請を行って現在か

ら44年前の1959年(昭和34年)1月1日付でIADRの正会員に承認された(図1)。現在IADRの終身会員(life member)であり、日本部会の名誉会員でもあるので、約46年近くIADRに関係してきたことになる。

IADR 日本部会の歩み

先に示したようにIADR日本部会が発足したのは1954年(昭和29年)のことであるが、初代会長は東京医科歯科大学・高橋新次郎教授、事務局長は日本歯科大学・榎恵教授、counselorは京大の美濃口 玄教授であった。この体制で同年11月6日に第1回IADR日本部会が東京医科歯科大学で開催されている。東京歯科大学の松宮誠一教授、日本大学歯学部の栖原六郎教授、および東京医歯大の大西正男教授などの諸先生がたいへん積極的に日本部会初期10年余にわたって会の発展に尽力された。次の10年は、大西正男教授が事務局長、私がcounselorで、部会長は任期2年で栖原六郎、中沢 勇、山本 徹、松宮誠一、榎恵の諸先生が順次就任され、IADR日本部会が急速に充実発展した時代といえよう。

さらに次の10年は日本部会が、国際的に発展し、日本の歯科医学研究が世界的に高く評価され、国際交流が急速に進んだ時期だと言える。欧米の大学や研究所に留学する先生方が多くなっただけでなく、アメリカでのIADR総会で日本からの研究発表が多くなった。

前記のように私は日本部会のcounselorであり、1964年以來アメリカでのIADR総会の理事会に出席するとともに、毎回研究発表もした。そのおかげで、討論を介して親しく話し合える友人がアメリカの大学にたくさんできた。これらの友人の暖かい配慮によってIADR総会に出席した機会にNIDR(National Institute of Dental Research)や各大学に招かれて学術講演をする機会にめぐまれた。おかげで日本側からの補助のない場合でも渡航費や滞在費をなんとか賄うことができた。当時は1ドルが360円であったので、今考えてみると同じ学問領域の研究で結ばれた友人たちの暖かい友情と支援に感謝の言葉もなく、たいへん私は幸運であった。

前記のような歯科医学研究を介しての国際交流が、1980年(昭和55年)6月に大阪ロイヤルホテル(現在のリーガル・ロイヤルホテル)での第58回IADR世界大会につながったのだと言える。私が編集し出版した第58回IADR総会記録集(Chronicle of the 58th IADR General Session)にIADR日本部会開設の経緯や、日本部会の歴史的歩み(1980年までの)などが詳細に紹介されているので参考にしていただきたい。この記録集は図2にその表紙を示したが、英文・和文で240頁にわたる大部のものである。ここでは紙面に限度があつてIADR日本部会について詳細な解説はできなかった。関心のある方はこの記録集を是非ご活用ください。歯科大学の図書館には保存されているはずだ。

マイアミビーチで開催された第54回IADR総会の理事会で1980年(昭和55年)第58回総会を日本で開催することが協議された。



図1. IADR 会員として認証されたことの通知



図2. 第58回 IADR 総会記録集の表紙

余談になるが、このマイアミビーチでの IADR 総会で図3に示したように、私は1976年度 IADR 歯科補綴学賞を受賞する光栄に浴した。

II. IADR 神経科学研究グループについて

Dr. Dubner (USA) および Dr. Sessle (Canada) らの尽力により、その結成が企画されていた IADR 中の神経科学グループ (Neuroscience Group) の結成が1976年(昭和51年)3月23日 Miami Beach での IADR 理事会で正式に承認された。

研究グループの結成は、15名以上のメンバーの同意と正式認可手続(グループの目的、発起人メンバーの署名、グループの規約・会則などを IADR 理事会へ提出する)が必要であるが、この神経科学グループは約60名の IADR メンバーと20名の会以外協力者によって支持され、理事会で正式に承認された。3月25日には第1回の神経科学研究グループ会議が開催され、規約が設定された。その詳細を紹介する余裕はないので、重要な項目を2~3示しておく。

(1) 口腔・顎・顔面の機能に対する神経系の役割、および顎・顔面の神経疾患の診断と治療についての研究などに関心のある IADR 会員によって結成されたグループ。

(2) IADR の目的に沿う以外に次の事項を目的としている。

神経科学研究に関する科学的情報の交換、神経科学に関して研究会、シンポジウムを開催して情報交換につとめる。口腔・顔面の神経科学研究成果についての出版、若手研究者にこの部門の研究に関心を持たせる活動。以上などが目的に含まれている。

また、規約に従って役員選挙の結果、次の役員が決定した。

会長 Dr. R. Dubner (任期1年、USA)、次期会長 Dr. D. J. Anderson (任期1年、England)、事務局長 Dr. B. J. Sessle (任期3年、Canada)、counsellor Dr. Y. Kawamura (任期2年、Japan)。

以上は現在より30年以前昔の話であるが、IADR 活動についての理解に役立てば幸である。なお詳細は「歯科展望」48巻4号、1976年(昭和51年)10月号に掲載されている。



図3. IADR の1976年度国際歯科補綴学賞の受賞を祝ってマイアミのホテルに日本人参加者が集まったときの写真

おわりに

いずれにしても、年の経過とともに各国の IADR また各地区の IADR 部会は Division または Section としての自治が尊重されるようになり日本部会も1983年(昭和58年)以来 Japanese Division であるとともに、JADR (Japanese Association for Dental Research 日本歯科医学研究学会)としても発足した。とにかく、世界の歯科医学研究に IADR が果たしてきた貢献と役割は偉大であり、



図4. IADR 会長 Dr. Scott より日本部会へのお礼状

IADR 日本部会が、わが国の歯科医学研究・教育につくしてきた貢献をも無視することはできない。

本誌に主として紹介してきた 1959 年(昭和 34 年)頃までの IADR の解説は、当時の日本には、まだ新幹線はなく、フライトもアメリカへの直行便がなくてハワイのホノルル空港でアメリカ国内線に乗りかえなければならなかった時代である。このような時代の変化によって当時の社会情勢について若い世代の IADR メンバーにはなかなか理解しにくいことも多いと思う。

第 58 回国際歯科学会(IADR)総会は 1980 年(昭和 55 年)6 月 5 日～7 日の 3 日間盛況にかつ順調に運営され多大の成果をあげて好評裡に終ることができた。この学会に種々御支援いただいた各位や各機関に衷心より感謝御礼申し上げます。

6 月 5 日の開会式には常陸宮、同妃両殿下のご臨席を仰ぎ、殿下からありがたいお言葉をいただき、まことに荣誉なことであった。これらの詳細は、先に図 4 に示された IADR 会長 Dr. David B. Scott により書簡にも示されている。このような事情でここでは第 58 回国際歯科学会総会についてはあまり述べなかった。

今後も我が国の歯科医学研究者や歯科・口腔疾患診療従事者が IADR の場を介して国際的に、また国内においても交流を密にして順調に充実発展をつづけられることを祈念して止まない。



回想の JADR

JADR 名誉会員(1979～1980 年会長)
東京歯科大学名誉教授
田熊庄三郎



JADR がわずか 16 名の会員をもって発足したのは、1954 年 11 月のことである。そこに至る経緯は、本会ニューズレター 1998-1 に、三浦不二夫先生が書いておられる。そこには親学会である IADR の生い立ちや Journal of Dental Research の成り立ち、戦後間もない頃の日本歯科界についても述べられているのでたいへん参考になる。そのほかに JADR に関する資料がいま手許にないので、正確なことは書くことができない。ただ「IADR 出席記」という私の報告文(東歯同窓会報 1959 年 60 号)と、1983 年恩師松宮誠一先生の退職記念に出された東京歯科病理学教室業績集、および 1990 年に私の退職時に出していただいた論文集があるので、それを参考にしながら JADR との関係を思い出してみることにする。

16 人の JADR 発足会員は、三浦先生によると「国際的に業績顕著な研究者でなければならない」という観点から細心の注意のもとに選ばれたというだけあって、どなたもみ

な立派な方々で、初代会長には高橋新次郎先生が選ばれてこれに当たられた。そのようにしてできた JADR は若輩にはとても近付けない高嶺の花であったが、幸いに恩師松宮誠一先生が発足会員に入っておられたので、その模様は薄々漏れ伺うことがあった。ただ記憶にあるのは、英語ではじまった某先生の講演が途中いつの間にやら日本語に変わっていたというようなお話しばかりで、具体的にそれがどんな会であったか私は知らない。

JADR が出発した 1954 年の私は、東京歯科医専卒後 7 年経てようやく講師になったばかり、松宮誠一先生の教室で歯の電子顕微鏡観察に熱中していた。手製のミクロトームを用い、苦心の末ようやく象牙質の超薄切に成功したのがこの年であった。歯の観察にはまだレプリカ法が通法とされていた頃と書けば、その頃の研究室の様子も想像されよう。たまたま同年 7 月、第 11 回 FDI がロンドンで開催され、そこに私どもの電子顕微鏡写真が 100 枚ほど展示されたことがあった。その時ぶんから少しずつ海外との情報交換の道が開け、松宮先生がローマの第 12 回 FDI に日本代表として出席されることになり、私はそのお供をつとめさせていただいた。まだプロペラ機の時代で、南まわりでローマまで約 32 時間かかった。その足で私はロンドン継由ワシントンに至り、同年 9 月から 1959 年の 7 月まで、ベセスダの NIH に招聘研究員として、D.B. スコット博士および M.U. ナイレ博士と仕事をすることができるようになった。そのおかげで、1958 年 3 月デトロイトで開かれた第 36 回 IADR 年次総会に誘われて出席した。その模様を書き送ったのが、母校の同窓会報に載った上記の報告である。それによると、会期は 3 月 20-22 日、会場は同市スタトラホテル。19 日午後の飛行機で行く予定のところ、思いがけずも 20 年ぶりという春の大雪で欠航となり、同日夕刻 6 時頃の夜行列車で出かけた。一等寝台であったが十数時間揺れどおしの上、JADR が高嶺の花なら親学会の IADR はさぞかしすごいだらうなどと想像して一睡もできなかつた。着いてみるともう学会は始まっていて、出番に間もない時刻となっていた。「Peritubular matrix in dentin」というのがその時の私の演題で、これが象牙質管周基質の存在を国際学会席上で公にした最初であり、また IADR と私の関係の始まりであった。二百数十の演題のうち日本人のものはこれ一つ。その他に外国からの出題はドイツ、デンマーク、イギリス、フィンランド、プエルトリコなどのものがあつた。電子顕微鏡の他に、組織化学、マイクロラジオグラフィ、陰極線ルミノグラムなどの新手法が私の興味を引いた。臨床関係では高速エンジンの研究が話題のようであった。発表形式は日本と大差なかったが、ロビーや廊下での交流が盛んで相互に討論に華を咲かせている光景が、会話もままならない自分には羨ましく見えた。それでもスコット博士の積極的な誘導のおかげで、多くの人にお会いすることができた。その中にはボーデッカー、ペーペランダー、クーリッジ、ビビー、トーマ、アームストロング、ロビンソン、ポイル、フィッシャーというような人々がいた。クーリッジは西村豊治

先生の珉瑯質の構造とう蝕の業績を詳しく知っていて、私を吃驚させたり喜ばせたりした。しかし花沢鼎先生のことはご存じなかったので、デンタルコスモスに掲載された先生の象牙質の構造とう蝕の論文をお伝えした。バンケットは食事と儀式が同時並行的に進み、次期会長にはロビンソン博士が指名されサウダー賞はパッフエンバーガー博士に授与された。急に灯りが消えて可愛い赤ちゃんがスクリーンに映し出され、成長してパブリックスクールに入り、やがてデンタルスクール時代の写真になるあたりから、どうやらあれは彼らしいぞといった私語があちこち聞かれたりし、最後に白髪赤ネクタイのご本人パッフエンバーガー博士に至るといふ、ユーモアとウイットに溢れた演出で、それはたいへん楽しかった。最終日には口演を聞くのに夢中で、つい帰りの飛行機に乗り遅れる失敗をしてしまった。

翌1959年私の帰国した年に、松宮先生が高橋新次郎先生を継いでJADR第2代会長の座につかれた。このころもJADRが高嶺の花であることに変わりはない。その時代のJADR開催の手伝いみたいなことをしたときには、予定時間を大幅に過ぎていて何時まで経っても、会場である東歯新館会議室に煌々とあかりが灯っていたのを覚えている。まだJADRが選ばれた会員の小組織に止まっていたのでそんな光景も見られたのであろう。そのJADRが、他の学会と同じように演題を公募し、口演時間や討論時間を決めたとした形を取ようになったのはいつの頃であったのか、私の記憶はすでに薄れてしまっている。

松宮先生はその後1969-70年にも再度会長に就かれた。その1970年、ニューヨークでIADR50周年記念総会があり、これに出席して祝辞を述べておられる。IADR総会を日本でという声が聞かれるようになったのはその頃からのことではなかろうか。発足後すでに15年も経っていたので、会員も増えていたとは思いますが、しかしIADR総会を引き受けるにはまだまだ弱体というのが本当のところであった。私の場合は滞米中に本部会員となっていたので、そのままJADR会員として迎え入れられたのであろうが、そうでもない限り、「業績顕著な研究者」という縛りが何となくはたらいており、これが良い意味にも悪い意味にも、会員数の増加を抑制していたようである。研究者はいても業績を上げるには年月がかかるし、それをどのように判断するかということを考えるとそれも止むを得なかったであろう。それでも1970年代にはどうやら少しずつ会員も増え、本部総会への参加者も追々みられるようになった。1972年ラスヴェガスの年次総会席上で、JADR会員として私は初めて生物石灰化部門の科学賞を戴いた。あの際にも、日本から参加された二人の方が私と夕食をともにして祝って下さった。このことは今もなおありがたく、はっきりと覚えている。

上のようなしだいで、IADR総会を日本でとは最初まるで夢のような話であった。それがその後榎恵会長、河村洋二郎会長、大西正男会長を経て1980年に正に実現したのである。あのときは同時にICOBの大会も日本でというこ

とになり、それではその方を大西先生が担当し、IADRの方は河村先生がもっぱら担当するということになった。言うまでもなく二つとも名だたる大きな国際学会である。同時にこれを遂行するのは全くたいへんなことであった。とくに心配なのは、JADR会員数が年々増えてはきていても、しかしその程度の増え方ではとても追いつかないことであった。思い切って門戸を大きく開き、会員数の大幅増加をはかること、そして日本中の歯学研究者が一致してこの壮大な行事の実現に熱意をもって協力してくれること、それが当時のJADRとしては切実な問題であった。早速会員倍増のキャンペーンがはじまった。

幸いに河村先生と大西先生の超人的なお力とご努力により、第58回IADR総会が1980年6月4日から7日にわたって大阪ロイヤルホテルにおいて開かれた。これに先んじる6月1日に第8回ICOBも東京ニューオータニホテルで立派に開催することができた。私はちょうどその時期のJADR会長をつとめるという光栄に浴した。河村先生が編纂された立派なクロニクルに、その発端から実現までの経過が細大漏らさず余すことなく記載されているはずである。その間の河村先生のお働きには今も頭の下がる思いである。華やかに開会式を終えることができたとき、先生は小躍りして喜ばれたが、先生の思いを拝察して私も胸を熱くした。それに対して私は一体どれ程のことをJADRのためにしてきたのであろうか。今になってそんなことを反省するのである。

帰国間もない頃、医科歯科大学荒谷真平先生の教室のセミナーにお招きいただいたことがある。その時から先生および門下の方々とたいへん仲良くなったが、前後して日本歯科の須賀昭一先生もこれに加わって、お互い熱っぽく話し合うグループが自然にでき上がった。話題の中心は硬組織とう蝕である。荒谷先生と須賀先生はオルガナイザーとして抜群の力を発揮され、このグループを核にこれぞと思われる研究者をまとめて大小のシンポジウムやセミナーが頻りに開かれた。これが研究者間交流のたいへん良い場となった。大きなものとしては1966・68年箱根・小田原、1972年京都、1977年賢島での会等があったが、中小の会は各地でひっきりなしにあった。この交流は国を越えて海外にも広がり、IADRやICOBはもちろん、エナメルシンポジウム、アーテファクトミーティングなど欧米の学会や集会とも毎年のように互いに研究発表をしあうようになった。日本でのICOBとIADR総会には、これら内外の研究者がそれぞれの研究成果を携えて多数参加して下さったのである。その成功にはそのことがエネルギー源ともなった、そう私は思うのである。そうとすればそのことで、私もJADRに対する役割を少しは果たすことができたようである。

アメリカから帰国した1959年に考えたことがある。それは自分の研究室の場所すなわち東京神田水道橋ということである。省線水道橋駅の東隣りはお茶の水で西隣りは飯田橋、医科歯科にも日大にも日本歯科にも直ぐ行ける。そのこの研究施設が一体化すれば、ベセスダのNIH歯学部門

ぐらいの規模の研究はできるのではないか、そう考えたのである。その後母校は千葉県に移転し、間もなく私も定年退職を迎えた。かくてその考えも夢に終わった。退職後は、余りの人生を自ら楽しむことに忙しく、学会とか大学にはすべて足が遠のいた。JADRにも同様に過ぎてが、何時か都市センターホールでIADR会長歓迎の席に案内を受けて出席した。あのときは、ご無沙汰していた須賀先生に会いたいという切なる望みがあったのである。あれが一度だけの終わりで、須賀先生とお会いできたのもそれが最後となった。

それにしても、在職中の内外研究者との上に述べたような交流は、思うだに心躍る喜びである。そんな喜びの時を与えてくれたJADRに、今は心から感謝するばかりである。これからのますますのご発展を祈って止まない。



JADR “こぼしてはならない話”

JADR 名誉会員(1985～1986年会長)
東京医科歯科大学名誉教授
三浦不二夫



平成14年(2002年)の仙台におけるJADR第50回大会記念式典で私はJADR“こぼれ話”と題して話をした。それは本会の初代会長で、私の恩師でもある東京医科歯科大学名誉教授の高橋新次郎先生が古稀を迎えられた時点で、教科書に書けない秘話とか裏話を矯正“こぼれ話”という小冊子にまとめて出版して下さった。

そこで、私は先生に似てJADR“こぼれ話”と題してJADRあるいはIADRにまつわることもどもを紹介したわけである。

しかし、今になって思い返すと、内容によっては秘話とか裏話として葬ってはならないこともあるのに気づき、ここに“こぼしてはならない話”として「本会50年のあゆみ」に残すことにした。

第1話 “JDRに投稿した最初の日本人”

周知のように歯学研究に関して最も権威ある雑誌は本学会の機関誌Journal of Dental Research (JDR)である。この雑誌に日本人として最初に投稿した方は、東京医科歯科大学の初代学長 長尾 優先生である。

先生は大正2年(1913年)、東京大学医学部を卒業後、同



写真1. 長尾 優先生

大学医学部附属病院の歯科学教室へ副手として入局し、歯学研鑽の道を歩み始めた。しかし、教室の主任、石原教授の歯学に対する姿勢に疑問を抱き、自ら教室を辞して大正15年(1916年)、米国ペンシルバニア大学歯学部で最先端の歯学を学ぶこととした。当時、日本からの留学生は歯科医専を卒業してから米国の歯科大学の3学年に編入できる規約になっていたが、先生の場合は既に大学教育によって医者となり、さらに2年の歯学研鑽の履歴を持つことから、留学当初から大学院生扱いの特別留学生として受け入れられたのである。先生は歯科補綴学の権威者、Kirk教授のもとで2年の研鑽を行い、その証として“Comparative Studies on the Curve of Spee in Mammals with a Discussion of its Relation to the Form of the Fossa Mandibularis”という論文をまとめられた。この年、1918年はニューヨークのコロンビア大学歯学部のGies教授とWilliam教授が歯学分野には最先端の研究論文を発表する雑誌がないことからJDRの発刊へと踏み切った時でもあった。いち早くこの情報を得た先生は、まとめた論文を同誌へ投稿して帰国し、現在の東京医科歯科大学の前身、文部省歯科病院へ勤務されたのである。もちろん、投稿した論文は文句なく受理され、1919年の同誌、第1巻2号に目出たく発表された。いわば長尾先生はJDRに投稿した最初の日本人であり、我々会員一同の誇りでもあるのである。

第2話 “JADR生い立ちの記”

平成10年(1998年)当時のJADR黒田会長から“JADRの生い立ち”と題してNewsletterに投稿して欲しいと依頼された。したがって、ここでは、その概略に多少の説明を加えて記すことにする。

昭和20年(1945年)、戦いに破れた日本は進駐軍の統治下に置かれた。当時マッカーサー司令部は日本の歯科医療の立ち後れを指摘し、いくつかの改善を日本政府に要求した。その1つに、それまで4年制の専門学校による歯科教育を医学のそれと同じく6年制の大学教育に改めるよう勧告があった。それにより、1949年には歯科医学専門学校は歯科大学または大学歯学部へと昇格した。ちょうどこの年、第25代目のIADR会長、イリノイ大学矯正の教授、Dr. Brodieが在日米軍歯科軍医の年次セミナーに特別講師として来日したので、司令部は日本側の接待役として矯正の高橋教授を指名したのである。

そんな因縁から、昭和28年(1953年)に高橋教授がフルブライト交換教授として“米国における歯科医学教育と研究の現状視察”というテーマで訪米された折には、Dr. Brodieは先生との再会を喜び、何かと貴重なアドバイスをしてくれたのである。就中“日本の歯科教育が



写真2. Dr. Brodie

歴代会長からの メッセージ

米国と同じレベルとなったからには、研究の場も同等であるので、日本にも IADR の支部を創設すべきである”としてその時の 31 代 IADR 会長、ワシントン D.C. の National Bureau of Standard の Dr. Paffenbarger へ紹介状を書いてくれた。Dr. Paffenbarger といえば—これも不思議な因縁で—高橋教授が渡米するちょっと前に米国歯科使節団の一員として東京医科歯科大学を訪問されていた。早速、同氏を訪問した高橋教授を快く迎え入れてくれ、IADR 日本支部創設案に対して会長として積極的に支援することを約束してくれたのである。

約 10 ヶ月の滞米生活を終えて帰国された教授は直ちに IADR 日本支部創設案を長尾学長に報告した。第 1 話で述べたように IADR の創設の意図をよく理解していた学長だけに“これこそ留学の最大の成果であり、我国の歯学研究が世界に繋がる快挙である”と評価し、大学を挙げて創設案を支援することにしてくれた。意を強くした教授は、早速、日本歯科大学の榎教授を補佐役にして創設に着手した。学会の性格から、会員は国際的に業績顕著な研究者でなければならない。全国の歯科大学の研究者に入会を勧誘するにも細心の注意を払ったそうである。

その甲斐あって、昭和 29 年(1954 年)11 月 6 日、東京医科歯科大学において IADR 日本支部の結成式が挙行されたのである。すなわち、榎教授からこれまでの経過報告がなされた後、高橋教授から“アメリカにおける歯科大学の性格について”と題した講演が行われた。次いで、榎教授より日本から推薦した研究者 16 名が会員として本部に登録された旨発表があり、既に登録されている会員を含めて支部結成の会員数に達したとの報告の後に、会員全員の推挙により初代会長として高橋教授が、また初代事務局長に榎教授が選ばれ、ここに日本支部(JADR)が目出たく誕生したのである。式典には IADR Paffenbarger 会長のメッセージが U. S. Army Hospital の歯科主任 Dr. Oartal によって読まれ、長尾学長が祝辞を述べられた。かくして我国の歯学研究が世界の歯学研究に仲間入りしたのである。なお、本会が JADR の結成のための会合で、年末にも近かったために、会員の研究発表は翌年の春、京都大学歯科口腔



写真 3. Dr. Paffenbarger



写真 4. 高橋新次郎教授



写真 5. 榎 恵教授



写真 6. IADR “ハーグ大会” (1986 年)の懇親会にて。日本テーブルにゴールドヘーバー会長を迎えて“さくら”を合唱した。前列左から；須賀 JADR 14 代会長、眞泉日本歯科医学会会長、ゴールドヘーバー IADR 会長、不詳、関教授(神奈川歯大)、青木(日本歯科)、後列左から；花田教授(新潟大学)、小生、木下教授(大歯大)、西連寺教授(日大)、不詳。

外科の美濃口教授によって開かれることとなった。また、余談ではあるが、この会合の時、私は卒業後 7 年目の矯正学教室助手で、式典会場の入り口に置かれた机で受付係をしていた次第である。

第 3 話 “故眞泉先生の提言”

私は、昭和 60、61 年(1985、86 年)の 2 年間、JADR の会長を務めさせていただいたが、その後半の 1986 年には IADR 総会がオランダのハーグで開催されることになっていた。そこで、私は当時の日本歯科医学会の眞泉会長(日本歯科大学薬理学教授)に是非この総会に我国の各専門歯科学会を統合した、いわば日本の歯学に関する研究を統括する立場にある学会であるからには、その会長である眞泉先生にも世界中の歯学研究者が一堂に集って最新の研究成果を発表し合う IADR 総会の様相を是非見てほしいと思ったからである。

また、他の 1 つは、いうまでもなく日本歯科医学会と日本歯科医師会との関係は、前者が研究によって得た最新の知識と技術を後者に提供し、後者はそれらを歯科医療に組み入れて先進医療として患者に還元するという相互支援の間柄にある。その後者の日本歯科医師会は FDI の 1 員として世界各国の歯科医師会と手を繋いでいるにもかかわらず、前者は世界各国の研究者の集団、IADR と何らの関係を持っていないのである。誠に残念なことで、片手落ちといわれても仕方ないだろう。

幸い、ハーグの IADR 会長、Dr. Goldhaber は以上のことを理解して下さり、眞泉会長を総会のゲストとして、また私の出席する各種委員会のオブザーバーと出席できるように計らってくれた。お陰で先生は、時には私と共に、また時には同僚の須賀教授(JADR 14 代会長・日本歯科大学病理学)と共に、IADR の活動状況を具さに観察して下さった。そして帰国されるや、直ちに私へ電話を寄せて曰く“ハーグの学会は大変、自分にとっても有意義だった。国際的視野に立って日本歯科医学会の在り方を考えてみると、JADR を本会の分科会の 1 つに加えて、JADR を通じて IADR と手を繋ぐのが最も妥当なように思う。かくすれば日本歯科医

師会における FDI の関係と同じように本会における IADR の関係として国際的に手を結ぶことができるから、早速、本会の役員や日本歯科医師会の方々に提言する積り”とのこと。我意を得たりとほくそ笑んだものだった。

急転直下、青天の霹靂とはこのことか、その3ヵ月後に先生はガンに侵され急逝されてしまったのである。ハーグへの出張をお願いした時には、既に先生自身はガンを承知の上、一言もそれを他言せず、快く学会に出席して下さった眞泉先生を偲ぶ時、誠に慚愧に耐えない。唯唯、先生の御霊、天上にて安らかなることを念ずる次第である。

昨年の10月、第20回日本歯科医学会総会が『健康な心と身体は口腔から……発ヨコハマ2004』というテーマで盛大に開催され、参集した歯科医師約2万と聞く。誠にもって喜ばしいことではあるが、この学会を構成する各専門分科会の歯学研究者の最近の研究成果も“発ヨコハマ2004”として世界の歯学研究者に流して欲しかった。眞泉先生の提言が活かされていれば学会は更に有意義なものとなつたろう。

以上の3話は“こぼしてならない話”と考え、この機会に若き JADR の会員に伝える次第である。



JADR の思い出

JADR 名誉会員(1991～1992年会長)
東京医科歯科大学名誉教授
佐々木 哲



1. 入会のころ

私が JADR の会員になったのは正確には記憶しないが、1960年代の中頃ではなかったかと思う。JADR (始めは IADR の Japanese Division) は戦前、あるいは戦後の早い時期にアメリカに留学されて、向こうで IADR の会員になられた先生方が組織されたものではなかったかと想像している。

そんなわけで、発足当時はこの学会は会員数も少なく(数十人?)、私のような若輩からすると、「高踏的サロン」、あるいは「エリート集団」といった感じで、近寄り難く、また会員になるための資格審査も厳しかったのかもしれない。こうした雰囲気は、今では想像もつかないが、そんな理由で、入会の申請をためらったように記憶する。

会員として年次学会に出席するようになって、私も発表させてもらえるようになった。演題数は少なく、1会場のみで、1日か2日で終わってしまっていた。またポスター発表はなかったと思う。臨床を含む歯科のすべての領域の最新の研究内容を聞ける機会は、この学会だけだったので、私のような歯科の素人にとっては大いに有難いことだった。討論の時間もゆっくりあったし、どの演題にも落ち着いて耳を傾けることができた。おぼろげな記憶では、

当時日歯大矯正の榎恵先生、東歯大病理の松宮誠一先生らが活躍されていた。

最も鮮明に覚えているのは、1973年に宝塚ホテルで開催された第21回総会であった。戦後しばらくはすべてが不自由で、どの学会も大学の講堂や会議室を借りて開催するのが当たり前であったのに、ホテルを使うとはさすがに「エリート学会」だと感心して、忘れられなかったのだろう。

2. JADR の役員になって

私が JADR の役員になったのはずっと後の1987年のことである。何人かの先生に薦められて、阪大の常光旭会長のもとで事務局長を勤めることになった、当時の「慣習」で、事務局長の任期は4年間、その後は会長(2年)になると決まっていると後になって知らされた。そんなに長期間も雑用をやらされるのはかなわない。とんでもないものを押しつけられたというのが、いつわりない当時の感想であった。

そうはいっても、会長の補佐役として真面目に勤めなければ、大変な迷惑になってしまう。事務局長としての業務は決して手を抜かないようつとめた。そして会計担当理事には歯大補綴の長尾正憲教授にお願いした。長尾先生はじめ補綴の教室員の方々には本当にお世話になったことを感謝している。とくに、後述するように、2001年の IADR 総会の東京誘致の件が話題になってくると、長尾先生は経費の節約に努められて、基金を設立された。今になって回顧すると、これが誘致にとっては最大の貢献であったと感じている。

さて、そういうことで、常光会長と大橋正敏(日大歯理工)会長の4年間(1987年～90年)事務局長を勤めた。JADR の年次総会のほか、IADR 本部との通信文書など、かなり忙しかったと思うが、当時やっとなり覚えたパソコンのお陰でなんとかやりくりしたように記憶する。お世話になった常光先生も大橋先生も、ともに御逝去されてしまったことは、淋しい限りである。

そして、1991年、92年の2年間、JADR の会長を勤めた。副会長には阪大の作田守教授、事務局長には東歯大の高江洲義矩教授にお願いした。両先生はじめ多くの先生方にご迷惑をおかけしたのではないかと、今にして恥入っている次第である。

1987年からの6年間は IADR 総会の前日に行なわれるビジネスセッションにすべて出席したわけである。この会議で最も困ったのは日本との時差で、議事の最中に眠ってしまったらなくなることだった。突然発言を求められ、「いま東京では午前2時、私の脳はいびきをかいているので、明確な発言はできません」と逃げてしまったことがあった。この機会を利用して、学会の方にも必ず演題を出して、研究発表を行なうように努めた。

3. IADR 総会の東京誘致

日本がはじめて IADR 総会を誘致したのは、1980年の第58回のときで、阪大の河村洋二郎先生が大変なご苦勞をされて立派に開催された。その後かなり時間もたつたので、東京でも開催するべきだという声が大きくなり、いつの間にか「IADR 総会の東京誘致」というのが私の事務局長

の頃からの最大の任務ということになってしまった。

1989年、ダブリンでの第67回 IADR の頃から、東京への総会誘致を提案しはじめたと思う。当時の難題は、治安や人種差別などいろいろあって、外務省に知恵を借りにいたり、候補地を探して、方々の大きな会議場や宿泊施設などにも足を運んだりした。

東京開催を正式に提案したのは、第69回総会(アカブルコ、1991年)のときで、ほぼ内諾を得ることができた。そしてこの年の9月に、IADRの新事務局長のジョン・クラークソン夫妻らが視察のため東京にやってきた。高江洲教授にも助けていただき、幕張メッセその他の関連施設を案内し、受け入れ状況を説明した。いろいろなハードルをどうやらクリアできて、クラークソンさんを成田空港で見送り、ほっと緊張が解けたのを鮮明に記憶している。

そして、翌年の1992年にグラスゴーで開催された第70回の IADR で、9年先の2001年に東京での総会開催(第79回)が正式に決定された。21世紀の初頭に日本でこの学会を開くことができるのは、喜ばしいことだと外国の方々からも祝福された。

しかし、IADR 東京開催についての私の最大の悩みは、誘致に成功しても、その時点では私自身はもはや会長ではなく、また大学も退官してしまうので、実際の運営に携わるのは無理である。どなたかにお願いしなければならぬ。とんでもないお荷物を背負いこんで後は無責任に消えてしまうことにもなりかねないということであった。また当時の気持ちとしては、「2001年宇宙の旅」というSF映画もあったくらいに遙か先のことで、本当にその日を無事迎えられるのか、心配でもあった。

幸いにもこの東京大会は、医歯大の黒田敬之教授が運営してくださり、大成功裡に終了したことは、ご存じの通りである。

4. 韓国支部との交流

ほかに私の記憶に残っているのは、韓国支部との協同事業である。私が事務局長になる数年前から、JADR と KADR との間で、それぞれの総会に1名または2名を交換招待して講演してもらうという協力態勢がつくられていた。1989年1月にソウルで開催された第7回 IADR 韓国支部総会には、大橋正敏教授と私が招待されて講演を行った。この時の会長はソウル大学の梁源植(ヤン・ウォンシク)教授で、その他多くの韓国の研究者に親しく温かくもてなされ、友好の絆を強めることができたのは嬉しいことだった。私が会長をつとめた1992年の第40回 JADR 総会ときには、韓国から招待して講演していただいたのは延世大学口腔外科のユン・ジュン教授であった。

5. 第40回 JADR 総会

第40回の大会は麹町の都市センターで開催したが、このほかの招待講演者としては、当時BMP研究の第一人者であったウォズニー博士のほか2名のアメリカの研究者と、IADR 会長ジョン・グリーン教授であった。演題数もポスターを含めて約120題、11月30日から2日間行なわれたが、これが私の JADR での最後の仕事となった。

この学会についての思い出はいろいろとあるが、もっとも印象に残ったのは、懇親会でのグリーン会長の挨拶だった。その中で、宇宙旅行を終えて帰還した飛行士の言葉として「宇宙から見た地球は極めて美しく、何より不思議に感じたのは、地図にあるような{国境線}がまったく見られなかったことだ」、という感想を引用されたことだった。

彼が強調したかったのは、国境とは恣意的な境界であって、これからの地球規模での活動では、こうした障壁をこえた新しい理念のもとに進められるべきだ、という内容だったと理解している。

6. 若い会員の方々へ

JADR の会員数は2千を越えたそうで、また作田教授や黒田教授が IADR の会長に就任されたことなど、日本部会の発展には目を見張るものがある。これからはさらに若い人たちの活躍に大いに期待しているのであるが、私個人のつたない経験を含めてアドバイスを述べてみたい。

当然のことながら、すぐれた業績を国際的ジャーナルに発表するよう努めるのが第一であるが、同時に国際学会でも口頭発表するのが望ましい。それには IADR がもっともふさわしい場であろう。そして、討論でも十分に通用するような語学力を普段から養っておくことである。さらに、学会のみならず、ビジネス部門での交流も大切である。

国際社会において、日本人についてよく言われていたことは、「閉鎖的で社交性に乏しい」、「真面目で勤勉だが、面白みがない」などであった。私は、JADR のメンバーとして国際学会に参加する際には、こうしたマイナスイメージを払拭したいという希望をもっていた。

研究発表でも、会議でも、ユーモアやジョークを交えて喋るように心がけた。しかし、冗談も時と場合により、かなり難しいものである。また、とっさに返答に窮してしまったことも多かった。あとで、「しまった、こういうジョークで切り返してやればよかった」と気づくことが多かった。いわゆる間抜けの「後知恵」であった。

それでも、私の冗談に会場が笑ってくれたときは、雰囲気や和らぎ、自分でもリラックスできたと思っている。

7. おわりに

私の専門分野は石灰化組織(Biological Mineralization)であったが、この方面の研究の先輩としては東歯大の田熊庄三郎先生と日歯大の須賀昭一先生がおられた。お二人ともあまり年上でなかったので、かしまらずに気楽にお話ができ、硬組織研究に関して多くの助言をいただいたが、JADR の会長としても先輩だったので(田熊、1979-80、須賀、83-84)、学会の運営など多方面についてのアドバイスをいただくことができた。

日本の研究者で、はじめて IADR の学会賞を授与されたのは田熊先生(1972)で須賀先生も1990に受賞された。残念なことに須賀先生はこの数年後に亡くなられてしまった。私もこのあと1992年に、同じ榮譽を受けることができたのは、まったくお二人の先達の多大の恩恵によるものだったと強く感じている次第である。両先生に心からの謝辞を捧げてしめくりとしたい。

JADR と IADR

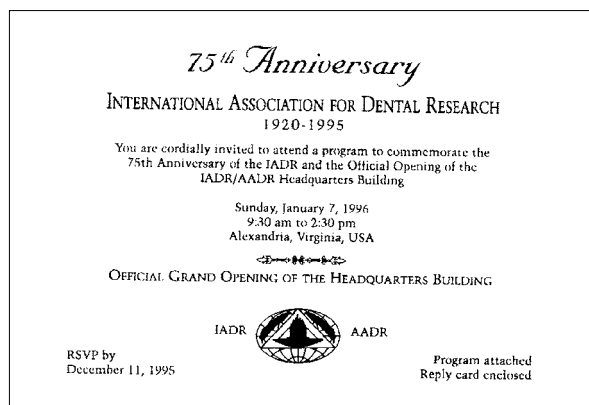
JADR 名誉会員 (1993 ~ 1994 年会長)
大阪大学名誉教授
作田 守



I. はじめに

JADR の 50 周年を記念して回顧録が発刊されることは、JADR にとって極めて有意義なことであり、その歴史が今後の発展のエネルギー源となることが期待される。50 周年記念といえば、JADR の母体である IADR が発行した "The First Fifty-Year History of the IADR" を思い出す。この本は、1920 年に創立された IADR を記念して、1971-1972 年に IADR の会長を務められた Dr. Frank J. Orland が委員長となり、7 名の委員からなる IADR History Ad Hoc Committee が編纂して 1973 年に出版されたが、その委員の 1 人に東京医科歯科大学の大西正男教授が入っておられ、ここにも JADR の IADR に対する貢献が見られる。私は、大阪大学の河村洋二郎教授が 1980 年に大阪で第 58 回 IADR 総会を開催されたとき、Local Organizing Committee の一人として会場係を担当し、1993-1994 年にかけては JADR の会長を務め、また、母体の IADR の会長も 1998-99 年にかけて務める機会に恵まれたので、この学会は私の人生に貴重な経験を与えて下さったと感謝している。そこで JADR に対する御礼の気持ちを込めて会長時代の思い出を中心に書かせていただきたいと思うが、JADR は IADR と密接な関係にあり、私にとっては IADR との関係なしには語れないところが多い。そこで、それらを含めて書かせていただいたのでご理解を頂ければ幸いである。今後の JADR に何か役立つものがあれば、望外の幸せである。

なお、本文や写真の説明文中の氏名の次に記載されているポジションはその当時のものであり、学会のさまざまな activities との関係を理解しやすくするため JADR および IADR の会長の任期も併記した。



資料 1. IADR 創立 75 周年を記念して IADR 本部ビルの Official Opening が行われたときの招待状。

II. JADR 会長時代 (1993 ~ 1994)

1993 年に東京医科歯科大学の佐々木 哲教授から会長を引き継いだ、その前年 1992 年 7 月に Glasgow, Scotland で開かれた第 70 回 IADR 総会に参加し、IADR の Council に佐々木会長、東京歯科大学の高江洲義矩教授(事務局長)とともに、初めて出席した。私は、以前から IADR の総会にたびたび参加して研究発表を行ってきたが、このときの参加は翌年から JADR の会長に就任する President-elect としての立場であったので学会の運営面で参考になるところが多かった。Glasgow での総会の IADR 会長は State University of New York at Buffalo の Dr. Robert J. Genco で、この総会後に University of California, San Francisco の Dr. John C. Greene が新会長に就任された。佐々木会長 (1991-1992) が東京で JADR の第 40 回 Annual Meeting を 1992 年 11 月に開催されたとき、Greene 会長は来日、参加され、JADR は IADR において充実・発展を大きく期待される部会であると述べられたことを記憶している。これは、千葉・幕張で IADR 総会を 2001 年に開催したいという JADR の提案が Glasgow での Council で承認され、また、佐々木会長が開会式で Basic Research in Biological Mineralization Award を受賞されたことなどによるものであろう。

1993 年に私は JADR 会長に就任したが、2 年間の任期

<i>75th Anniversary of the IADR</i>	
Official Opening of the IADR/AADR Headquarters Building	
PROGRAM	
JANUARY 7, 1996	
OLD TOWNE HOLIDAY INN HOTEL CARLYLE ROOM, 5TH FLOOR	
9:30 am Registration	11:15 am Introduction of the Chairman, Building Fund Committee John Keller, AADR Vice-president
10:00 am Welcome and Announcements John Clarkson, Executive Director	11:20 am "Investing in Bricks and Mortar—An Appreciation of Sponsors" Jack Hein, Chairman
Introduction of the IADR President Barry Sessie, IADR Immediate Past President	11:35 am The Next 75 Years—Open Discussion
10:05 am "75 Years of the IADR" Richard Ranney, IADR President	12:05 pm Luncheon—Presiding: John Greenspan, IADR President-elect
10:20 am Introduction of the AADR President, John Rugh, AADR Immediate Past President	"The Future is Now" Harold Slavkin, Director, NIDR
10:25 am "Dental Research Comes of Age" Marjorie Jeffcoat, AADR President	1:15 pm Buses Depart from the Old Towne Holiday Inn Hotel for the IADR Headquarters Building
10:40 am Introduction of the Keynote Speaker Barbara Boyan, AADR President-elect	1:30 pm IADR Headquarters Ribbon-cutting Ceremony
10:45 am Keynote Address: "Impact of Dental Research on Practice, Education, Industry, and Public Health Worldwide" Per-Olof Glantz, IADR Vice-president	1:45 pm Tour of Building (coffee and dessert provided)
	2:30 pm Adjourn (Transportation back to the hotel will be provided.)

資料 2. IADR 創立 75 周年記念として行われた IADR 本部ビルの Official Opening のプログラム。Alexandria, VA にある Old Towne Holiday Inn Hotel で 1996 年 1 月 7 日に開催された。



資料3. IDARのニューズレター IADReports Vol.17. No.5, December 1995 発行。IADR 本部ビルの Official Opening の記録が収録されている。筆者注)1996年1月の記事が1995年12月号に掲載されたのは、発行時期がずれ込んだことによる。

中の思い出を記述するにあたって、まず、役員・理事の先生方には JADR の運営に関してさまざまなご協力いただいたことに対し、改めて厚く御礼申し上げる次第である。

1. IADR 関係

この時期は、IADR が世界の oral health research を推進する professional association であるという認識を強く持ってさらに大きく発展する時期であったと思う。1990年7月から IADR および AADR の Executive Director として Ireland の Trinity College から着任した Dr. John J. Clarkson が、IADR を発展させるべくいくつもの企画に取り組んだ。つまり会員を増強するとともに会員の学会活動、研究推進の便宜を図り、IADR の運営の効率を良くするための企画である。その主なものは以下の 1)~3) の項目に挙げられるようなものであったと思う。

IADR の事務局を担う Executive Director —事務総長と訳す— のポジションには学位を持つ教授クラスの適任者が世界から選ばれている。Deputy Executive Director —事務次長と訳す— も Executive Director を補佐するポジ

ションとして置かれてあり、同様の資格を持つ適任者がこれに当たっている。ちなみに、Executive Director というポジションは Secretary General よりも積極的に創造性に富んだ役割を担うポジションのようである。

1) IADR 本部ビルの購入

会員の学会活動に便利なきさまざまな情報提供を円滑にするため、また、機関誌である Journal of Dental Research の発行を本部で desktop publishing によりスムーズに行うことができるようにするため、また、本部ビルを自前で所有すれば学会の運営経費を従来よりも年間約4万ドル節約できるため、Washington, D.C. の近くに本部ビルを1995年秋に購入する計画が立てられた。この計画を具体化するため IADR Headquarters Fund Campaign が行われ、1994年6月に JADR 会長であった私宛に協力の依頼状が Dr. Clarkson から届いた。目標額は125万ドルであるが、75万ドルをこのキャンペーンで集め、残りを reserve fund から充当するというものであった。早速 JADR 理事会に諮って日本部会で寄付を取りまとめて本部に寄付することになり、会員各位に事情を説明して協力を求めた。この集金には当時会計担当理事であった東京歯科大学の柳沢孝彰教授に大変お世話になった。ご寄付を頂いた会員の皆様はじめお世話頂いた柳沢教授にもう一度御礼を申し上げたい。1995年6月に Singapore で開催された IADR の Council の席上、時の IADR 会長の Dr. Barry J. Sessle (1994-1995) に寄付金をドルの小切手にして寄贈した。当時は偶然近年で最も円高の時期であったので、寄付金に円高効果があり、1万4千ドルを超える金額になった。また、企業の G.C. や LION から多額の寄付を頂き、企業名がビル内の部屋の入口それぞれにつけられている。私も会長ということで別に寄付した思い出がある。1996年1月7日に本部ビルの Official Opening が IADR の 75 周年を記念して行われ、これに参加する機会を得た。招待状とプログラムは資料1,2のとおりである。この日は 1996 blizzard と呼ばれた猛烈な積雪に見舞われた翌日であったが盛大に開催され、そのときの記録はすべて IADR のニューズレターである IADReports 17 巻 5 号



写真1. IADR 本部ビルの Official Opening での講演風景。(左→右)公演中の Graham Embery British Division 会長・後に IADR 会長(2001-2002)、head table の Richard R. Ranney IADR 会長(1995-1996)、Per-Olof Glantz IADR 副会長、John J. Clarkson IADR/AADR 事務総長・後に IADR 会長(2002-2003)、Marjorie Jeffcoat AADR 会長・後に IADR 会長(2000-2001)。Alexandria, VA のホテルにて。1996年1月



写真2. Luncheon の様子。(左→右)John J. Clarkson, IADR/AADR 事務総長(後ろ姿)、Michael L. Barnett AADR 理事、筆者 IADR Vice-president-elect、Harold C. Slavkin, Director of National Institute of Dental Research、Dr. Slavkin のご子息。Alexandria, VA のホテルにて。1996年1月



写真3. シャンペンで Official Opening を祝う。
(左→右)Harald Løe IADR 元会長(1979-1981)、
Graham Embery British Division 会長・後に IADR 会
長(2001-2002)、Richard R. Ranney IADR 会長(1995-
1996)。Alexandria, VA の本部ビルにて。1996年1月。

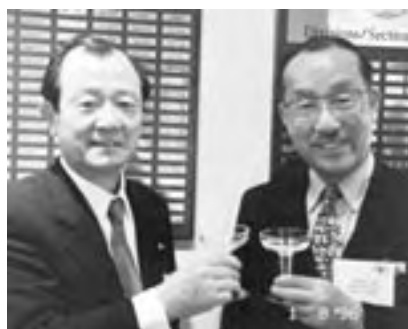


写真4. 谷 嘉明教授 Dental Material
Group President (右)と乾杯する筆者(左)。
Alexandria, VA の本部ビルにて。1996年
1月。



写真5. 本部ビル玄関で
の筆者。1996年1月。

に収録されている(資料3)。その中に、キャンペーンの委員長であった Dr. John W. Hein の“Investing in Bricks and Mortar-An Appreciation of Sponsors”と題する講演も掲載されているが、JADR に対して特に御礼の言葉が述べられている。また、本部の壁面に掲げられている寄付団体名の plaque には Japanese Division の名前が刻まれている。シャンペンを開けての祝賀会もあり、その時の模様は写真1～5でご覧頂きたい。写真に見られるように、時の IADR の会長、元会長、後年会長に就任された方々が出席されている。Luncheon の写真には、時の National Institute of Dental Research (NIDR) の Director である Dr. Harold C. Slavkin や Warner-Lambert Company の Dental Affairs の Senior Director であり AADR 理事の Dr. Michael L. Barnett らの姿が見られる。Dr. Slavkin は任期中に NIDR での研究対象を広げて National Institute of Dental and Craniofacial Research に改名された。日本からは、京都大学の谷 嘉明教授が Dental Material Group の President として参加されたが、東京医科歯科大学の黒田敬之教授は雪のため Chicago で足止めとなり東京に引き返さざるを得なかったということである。このと

きは道路を車が走れず、また、空港には飛行機が来ず、日ごろ多忙な参加者全員が3日間ほどホテルに閉じ込められる状態となった。

本部ビルは地下1階地上3階建てで、効率よく使われている。場所は 1619 Duke Street, Alexandria, VA で、old town の閑静なところにある。訪れるには、Potomac 川沿いにある Washington, D.C. の Ronald Reagan Airport から車や電車(メトロ)で30分位の便利な場所にある。機会があれば、あらかじめ連絡をした上で、一度は訪問されても良い場所だと思う。写真6,7 は理事会が本部ビルで行われたときのものである。

2) IADR の見直し

JADR の多くの会員が IADR の常置委員会の委員として、また、Research Group の役員・理事として IADR に貢献されていることを明記した上で、ここではこの時期に設置された特別委員会について言及したいと思う。

Dr. Clarkson は、Strategic Plan の設定に関連して、IADR の総会や組織などを見直すため2つの task force を立ち上げ、1994年に特別委員会での検討を提案した。ひとつは“to examine the General Session and IADR Meetings”、



写真6. 本部ビルで役員会開催時。
(左→右)John S. Greenspan IADR 会長
(1996-1997)、Per-Olof Glantz IADR
次期会長、筆者 IADR 副会長。1996年
5月。



写真7. 本部ビルで役員会開催時。
John J. Clarkson IADR/AADR 事務総
長・後に IADR 会長(2002-2003)と筆
者 IADR 副会長。1996年5月。



写真8. 歯学生の研究を奨励し
て David Scott 賞を創設され
た David B. Scott IADR 元会長
(1975-1976)。Alexandria, VA
のホテルにて。1997年1月。

もう一つは“to examine the structure and organization of IADR”である。前者の委員会は“Meeting Content”を検討する Subcommittee A と“Organization of Meeting”を検討する Subcommittee B に分けられ、当時 JADR の President-elect であった東北大学の山田 正教授が Subcommittee B の委員になられた。Subcommittee B の委員長は Dr. Chris Squier で、委員は山田教授を含む 6 名から構成された。私は後者の structure and organization の方の委員となった。委員長は、Ivar A. Mjör IADR 元会長(1986-1987)で委員数は私を含めて 10 名であった。

各委員と委員長との間のやりとりで検討された内容が Board Members のコメントにより修正され、IADR の Council に提出する案が出来上がった。Meeting の方は 15 項目、Structure の方は 9 項目について検討されたものである。1995 年 6 月に Singapore で開催された Council で、Meeting の方は Subcommittee A の委員長であった Dr. Sally J. Marshall (1999-2000 の IADR 会長) から Subcommittee B の方も含めて報告があり、Structure の方は Dr. Mjör から報告されて了承された。詳細については、紙面の都合上省略するが、このときの Council Manual に記載されている。この task force で検討された内容の一部は、IADR を取り巻く環境の急激な変化に対応するため、現在さらに変更されて IADR が運営されている。

3) IADR の Strategic Plan の設定

Dr. Clarkson が中心になって作り上げた Strategic Plan は 1994 年 3 月に Seattle で開催された Council で示され、1995 年の Singapore での Council で概要が承認され、1996 年の San Francisco の Council で決定し実施されている。Strategic Plan を設定するという発想は、国内学会ではほとんどなかったと思われるが、initiative をとって oral health research を推進する国際学会ではその vision が必要である。Dr. Clarkson は Strategic Plan を必要とする背景として、IADR は 1920 年に創立され、はじめはゆっくりとした速さで発展してきたが、1980 年代から 90 年代にかけてドラマチックな発展を遂げ、国際会議の開催や国際雑誌の発行を行い、財務も健全ではあるが、我々の進む道が明確に示されていない、などを挙げた。そこで



写真 9. Seattle で開催された第 72 回 IADR 総会の Council Dinner にて。
(左→右)筆者 JADR 会長(1993-1994)、Stephen H.Y. Wei IADR 会長(1993-1994)、Wei 会長夫人、山田 正 JADR 副会長。1994 年 3 月。

IADR の使命や目標を具体的に示すためにこの Plan が作られた。JADR に対してもこれを周知するための資料が会長であった私のところに送付されてきたので、理事会でも報告したが、その内容説明および Strategic Plan は 1994 年の J Dent Res 73 巻 7 号: 1319-1323 に、また、Strategic Plan そのものは資料 3 の IADR Reports 17 巻 5 号の 12 ページに掲載されているので参考にさせていただきたい。

4) David Scott 賞

歯学生の研究活動を奨励するために設けられた David Scott 賞がある。各部会名のアルファベット順に 1 名を選出する順番が回ってくるが、1994 年に Japanese Division から選出するチャンスが巡ってきた。JADR 理事会に諮り候補者を募ったところ、大阪大学歯学部の高北祥子氏が選ばれ、1995 年の Singapore での第 73 回 IADR 総会の開会式で受賞が公表された。高北氏は口腔解剖学第 1 講座の栗栖浩二郎教授の下で、学部学生のときから研究に取り組んでいた。写真 8 は IADR 本部近くのホテルで偶然お目にかかった Dr. David B. Scott である。高北氏は歯学部卒業後、法医学の研究に進んだと聞いている。

余談かもしれないが、IADR の Council などの会議の進行や意思決定の方法について触れておきたい。その方法は、他の米国の会議でも同様と思われるが、日本での会議の進行方法とは全く異なり、Robert's Rules of Order に則って行われている。Council に出席する場合は Robert's Rules of Order の概要を知っておくと便利である。初版は General Henry M. Robert により 1876 年に出されたが、現在では改訂が加えられ、第 10 版が Perseus Publishing から 2000 年に出版されている。

2. JADR 関係

JADR の会長として 1994 年 3 月に Seattle で開催された第 72 回 IADR 総会に出席したが、山田 正 JADR 副会長も出席された。写真 9 は Council Dinner のときの Wei IADR 会長夫妻とのスナップである。

国内では、JADR の運営は通常の年次計画に沿って行われた。その中では主に年次大会について取り上げたいと思う。

1993 年は岡山大学の村山洋二教授に第 41 回 Annual



写真 10. 第 41 回 JADR Annual Meeting 開催時(岡山)の特別講演者とともに。
(左→右)村山洋二 大会長、Michael J. Levine 教授、Cheol-We Kim 教授、筆者 JADR 会長(1993-1994)。1993 年 12 月。



写真11. 第42回 JADR Annual Meeting 開催時(大阪)の Friendship Party にて。(左→右)大森郁朗教授、Jea Seung Ko 教授、山田 正 JADR 次期会長、佐々木 哲 JADR 前会長(1991-1992)、常光 旭 JADR 元会長(1987-1988)、Colin Dawes 教授 JDR 前編集長、Dawes 教授夫人。1994 年 12 月。



写真12. 第42回 JADR Annual Meeting 開催時(大阪)のヨーロッパからの演者。(左→右)筆者 JADR 会長(1993-1994)・大会長 Dr. Hans U. Paulsen, Irma Thesleff 教授。1994 年 12 月。

Meeting の大会長をお願いした。University of Hong Kong の Stephen H.Y. Wei IADR 会長(1993-1994)も来日、参加され、Headquarters Fund Campaign について協力依頼があったことを記憶している。特別講演には State University of New York at Buffalo の Michael J. Levine 教授が招かれ、人工唾液の開発について講演された。韓国からは、ソウル国立大学の金 哲偉(Cheol-We Kim)教授が招かれ、Dental Biomaterial に関する講演をされた(写真10)。この学会では、150もの一般演題の発表があり、JADR としては比較的多い演題数の学会であった。

1994 年は私が第42回 Annual Meeting の大会長を勤め、大阪で開催した。歯科医学に関する研究で重要な分野の1つは、歯の発生あるいは保存に関する研究であろうとの考えから、特別講演に Finland から University of Helsinki の Irma Thesleff 教授を招き、歯の発生の molecular regulation に関する講演をしていただいた。この分野は現在の歯の再生に関する tissue engineering の分野につながっている。韓国からは、ソウル国立大学の Jea Seung Ko 教授を招待し、破骨細胞形成に関する講

演を拝聴した。また、歯の自家移植と組織修復に関するシンポジウムを開催し、北海道大学の久保木教授、東京歯科大学の下野教授、大阪大学の三木助教授、愛知県で開業の月星博士、Denmark から Peder Lykke School の Dr. Hans U. Paulsen らに発表をお願いして大変意義ある学会となった。最近、2005 年の Br J Oral Maxillofac Surg 43 巻 2 月号に発表された Akkocaoglu, M. らの Autotransplanted Teeth の長期観察での成功率に関する論文を見る機会があった。Endodontic treatment が 25% くらいは必要になるが、80%以上の成功例が報告されているのを見ると、この方面の進歩も見逃せないと思われる。さらに、Journal of Dental Research (JDR) の編集長であった Canada の Colin Dawes 教授が唾液の flow rate に関する発表をして、この学会を盛り上げてくれた。写真11,12 は Friendship Party のときのものである。また、IADR の South-East Asian Division の President として参加した National University of Singapore の Dr. Yeo Jinn-Fei は、1995 年に Singapore で開催される IADR 総会への参加呼びかけを行った。一般演題発表も 135 題にのぼり、私にとって思い出深い学会となった。

2000-2 August

Newsletter for JADR

I. IADR 役員の新任期を終えて

IADR 元会長 佐々木 哲

2000年8月のIADR総会では、1999年10月のIADR総会以来、約1年と10ヶ月にわたる任期を終え、IADRの役員として活動することができ、大変な経験と学びを得ることができた。この間に、IADRの発展と国際的な交流を促進するために尽力することができたことに感謝している。また、IADRの役員として活動する中で、多くの仲間と出会い、協力し、IADRの発展に貢献することができたことに感謝している。IADRの役員として活動する中で、多くの仲間と出会い、協力し、IADRの発展に貢献することができたことに感謝している。IADRの役員として活動する中で、多くの仲間と出会い、協力し、IADRの発展に貢献することができたことに感謝している。

III. IADR の役員(副会長、次期会長、会長、前会長)時代(1996～2000)

教授室が私の部屋の真上にあった岡田 宏教授は1994年にはIADRのNominating Committeeの委員長をしておられ、私の部屋にしばしば立ち寄り、IADRのVice-presidentの候補に出ないかと口説かれた。とてもその任ではないと思ってはじめは辞退していたが、熱心に口説かれるので応募することに腹を決めた。その結果、1995年にSingaporeで開催されたCouncilで3人の候補の一人として選出され、IADR会員全員に投票用紙が本部から送られることになった。JADRからは45%の投票率を頂いて、1996年初めには、Vice-president-electに選出されたことが判明した。投票していただいたJADR会員に対して、また、選出されたニュースを聞かれた河村洋二郎先生はじめ多くの方々からお祝いと激励の言葉をい

資料4. JADR のニューズレター 2000-2 August 発行。



資料5. IADRのニューズレター IADReports Vol. 20, No. 2, July/August, 1998 発行。筆者が IADR 会長時に発行されたもの。

ただいたことに対して、厚く御礼を申し上げたい。日本人で初めてのことで大変名誉なことであるが、大役を無事果たさなければ JADR に申し訳ないという気持ちが先に立った。1996年3月は、私にとって大学を去る定年の時である。IADR では、Vice President, President-elect, President, Immediate Past President と1年ごとに役員としてのポジションが変わる。JADR のニューズレターに掲載された「IADR 役員時代の任期を終えて」(資料4)と題する原稿の中で既に述べたように、それぞれに duties and responsibilities がある。それを見ると、それぞれの責務は、関係者に相談することはあっても、私自身が準備しないと果たせないことが分かった。つまり、通訳なしの英語のみの会議では、人に頼って準備してもらったのでは役に立たないことがわかったので、退官しても任務を遂行することが可能であろうと思われた。幸いなことに、このころから e-mail が使用されるようになってきたので、退官時に教授会から贈られたコンピュータが本部と直接連絡する上で大変役に立ち有難かった。大阪大学歯学部教授会に厚く御礼を申し上げたい。



写真13. 第74回 IADR 総会での記念写真。(左→右)筆者夫妻、Greene 教授夫人、John C. Greene IADR 元会長(1992-1993)。San Francisco にて。1996年3月。

1. JADR のニューズレター

IADR は JADR の母体といえども、その運営方法は JADR とは大変異なるので、私の経験したことを思い出としてここに書き留めるべきかと思われるが、JADR のニューズレターに既に記載されているので、ここではそれらを紹介することにとどめたい。

1) 2000年に発行されたニューズレター (資料4)

ニューズレター 2000-2 August の1~3ページに、次の内容が「IADR 役員時代の任期を終えて」と題して記載されている。

- | | |
|-------------|---|
| (1) 役員の仕事 | (2) 学会運営について |
| i) 会長の責務 | i) 基本方針 |
| ii) 次期会長の責務 | ii) 本部 |
| iii) 副会長の責務 | iii) 学術大会について |
| iv) 直前会長の責務 | iv) 予算について |
| | v) 学術雑誌について |
| | vi) 途上国での歯科医学研究の推進について |
| | vii) Memorandum of Understanding (MOU) について |
| | viii) 2001年に日本で行われる IADR General Session について |

2) 2003年に発行されたニューズレター

ニューズレター 2003-1 February の3-5ページに JADR 50周年記念講演「JADR に期待するもの」が掲載されている。その中には IADR 役員時代の体験を踏まえて次の内容が記載されている。それらは、体制について、Task Force on Developing Regions について、学会の開催方法、財務委員会と投資委員会、学会としての研究費獲得活動、歯科医学会としての研究の方向性などについてである。

2. IADR のニューズレター

筆者が役員をしていた頃は年4回の IADR ニューズレター “IADReports” が発行されていたが、会長の年から1回は on-line で配信されるようになった。会長の期間に発行された “IADReports” は、20巻2-4号の3回であるが次の21巻1号には筆者が1999年3月に Vancouver で会長



写真14. John J. Clarkson 事務総長のお別れ会にて。(左→右) John W. Stamm IADR 会計理事、Per-Olof Glantz IADR 会長(1997-1998)、John J. Clarkson IADR/AADR 事務総長・後に IADR 会長(2002-2003)、Michael L. Barnett AADR 理事。Washington, D.C. にて。1997年11月。

として開催した学会での写真が多く掲載されている。このうち Vol.20, November 2 のみを資料5として示した。

3. 写真で綴る記録

JADR、IADRのニューズレターに記載されている内容との重複を避けて、ここでは、写真、その他の資料を提出し、JADR会員の活躍の足跡を留めたいと思う。

1) 1996年の記録

1996年3月にSan Franciscoで開催された第74回IADR総会にはIADR Vice-president-electとして出席した。日本部会の活躍を期待して下さったJohn C. Greene元IADR会長もJADRからの多数の参加を喜んでくれた(写真13)。Dr. Greeneは日本でも広く使用されているOral Hygiene Index (OHIとOHI-S)の提唱者としてもよく知られている。さらに禁煙運動に指導的役割を果たしておられ、IADRにad hoc Tobacco Committeeを作り、JADRからは福岡歯科大学の埴岡 隆教授が委員として活躍されている。この委員会は現在も活発に活躍しており、これまでに次のテーマで3回のシンポジウムを開催したそうである。そのテーマは、世界のさまざまな人々の口へのタバコの影響について、禁煙と防煙への歯科の貢献について、政策への貢献についてである。

国内では、1996年11月に東北大学教授の山田 正 JADR会長(1995-1996)が大会長となってJADRの第44回Annual Meetingを福島県の裏磐梯で開催された。筆者はIADR副会長としてこの学会に出席した。特別講演者にはUniversity of ZürichのB. Guggenheim教授と韓国 Dankook UniversityのKichuel K. Park教授が招聘され、予防的見地からう蝕の原因論に関する誤った考え方についての講演とう蝕の原因となる食事の試験的モデルに関する講演をそれぞれされた。この開催場所は交通の便が良いとは言えない所であったが、温泉に分かりながらお互いに研究発表に関して議論を戦わすには絶好の開催地であった。

2) 1997年の記録

IADRおよびAADRの事務総長として活躍されたDr. Clarksonは、Trinity Collegeの歯学部長としてIrelandへ帰国することになり、1997年11月にお別れの会が本部ビルでJoint IADR/AADR Finance Committee Meetingが開催された機会に、場所をWashington, D.C.に移して行われた(写真14)。IADRの会計理事でUniversity of North Carolina at Chapel HillのDr. John W. Stamm, IADR会長でUniversity of LundのDr. Per-Olof Glantz, Warner-Lambert CompanyのDr. Michael L. Barnettらの姿が見える。Dr. Clarksonはその後IADRの役員として選出され、東京歯科大学の奥田克爾教授がJADR会長(2001-2002)として第50回の記念式典を年次大会中に開催されたとき、IADR会長(2002-2003)としてのメッセージを寄せてくれており、JADRのニューズレター2003-1 Februaryの3ページに掲載されている。第50回Annual Meetingは渡辺 誠大会長のもと仙台で行われた。

1997年12月に徳島で開催された第45回JADR Annual Meetingには、Per-Olof Glantz IADR会長、Sally J. Marshall IADR副会長らが参加された。特別講演者にはカナダのLaval大学のDenis Mayrand教授と韓国からKADR副会長でソウル国立大学の南 東錫(Dong-Seok Nahm)教授を迎え、黒田敬之 JADR会長のもと、中村 亮 JADR副会長が大会長を務められて開催された。特別講演では*P. gingivalis*の病因因子に関する講演とMultiloop Edgewise Arch Wireの作用機構に関する講演をそれぞれされた。このときの招待者およびJADR役員・理事の集合写真を写真15に示した。河村洋二郎先生、三浦不二夫先生のお顔も見える思い出の写真の1枚である。徳島は阿波踊りが有名で、見る阿呆に踊らされて踊るIADR会長、次期会長の写真は一興であろう(写真16)。なお、この学会での記録はJADR Newsletter 1998-1 Februaryに詳しく掲載されている。この頃から、JADRのAnnual Meetingの報告が



写真15、第45回JADR Annual Meeting開催時(徳島)の招待者およびJADR役員・理事。
(前列着席 左→右)三浦不二夫 JADR元会長(1985-1986)・名誉会員、河村洋二郎 JADR元会長(1973-1974)・名誉会員・第58回IADR総会(1980大阪)での名誉会長、南 東錫教授、Per-Olof Glantz IADR会長(1997-1998)、Glantz会長夫人、Sally J. Marshall IADR副会長、Mayrand教授夫人、Denis Mayrand教授。(後列 左→右)奥田克爾 JADR理事・後に会長(2001-2002)、栗栖浩二郎 JADR監事、南雲正男 JADR理事、伊集院直邦 JADR会計理事、須田英明 JADR理事、山田 正 JADR前会長(1995-1996)、黒田敬之 JADR会長(1997-1998)・後に IADR会長(2005-2006)、筆者 JADR元会長(1993-1994)・IADR次期会長、中村 亮 JADR副会長・大会長、堤 定美 JADR監事、Grayson W. Marshall AADR理事、岡田宏 JADR事務局長・後に会長(1999-2000)、坂東永一 JADR理事。1997年12月。



写真 16. 法被を着て蜂須賀連主催の阿波踊りを踊る Glantz IADR 会長夫妻と筆者ら。徳島にて。1997 年 12 月。



写真 17. Joint IADR/AADR Board of Directors Meeting での記念写真。
(前列着席 左→右) John Keller AADR 会長、Per-Olof Glantz IADR 会長
(1997-1998)、Eli Schwarz IADR/AADR 次期事務総長。
(後列 左→右) John W. Stamm IADR 会計理事、Michel Goldberg IADR 理事、Paul
Robertson AADR 次期会長・後に IADR 会長(2004-2005)、Susan Reisine AADR 会
計理事、Michael L. Barnett AADR 理事、Barbara Boyan AADR 前会長、W. Mike
Edgar IADR 理事、Grayson W. Marshall AADR 理事、John S. Greenspan IADR 前会
長(1996-1997)、Stephen Bayne AADR 副会長、Maria Fidela de Lima Navarro IADR
理事、Sally J. Marshall IADR 副会長、筆者 IADR 次期会長、Mark Herzberg JDR 編集
長、Robert (Skip) Collins IADR/AADR 事務次長。Oakland, CA にて。1998 年 1 月。

Newsletter に掲載されるようになったようである。

3) 1998 年の記録

IADR の理事会は通常 AADR の理事会と共催の形で
行なわれる。そのときのメンバーは IADR/AADR とも
に会長、次期会長、副会長、前会長、会計理事、無任所
理事(IADR は 3 名、AADR は 2 名であったが、現在の
IADR 理事は地域を代表する理事となり人数が増えている)、
編集長、事務総長、事務次長である。本部ビルのある
Alexandria, VA は冬季には厳しい気候になるので会議
の開催を温暖な場所で開催することがある。1998 年 1 月
に行なわれた IADR と AADR の合同理事会は California
の Oakland で開催され、写真 17 はそのときのものである。
Oakland は Greenspan IADR 前会長のご自宅がある
Tiburon から近いので、このときの関係者をご自宅のパー
ティに招待して下さった。丁度還暦を迎えられるというこ
とだったので、日本から赤い帽子とちゃんちゃんこを持参
してお祝いした。写真 18 はそのときのものである。

JADR はいつの頃からか毎年開かれる年次大会のときに
韓国部会(KADR)と特別講演者の交流を行っている。筆者

はこのとき IADR President-elect であったが、1998 年 1
月に Seoul で開催された韓国の第 16 回学術大会と第 14
回 KADR の年次大会に、Per-Olof Glantz 会長の要請で
IADR を代表して出席した。このとき JADR からは大阪大
学の栗栖浩二郎教授が特別講演者として招待された。写真
19 は Seoul National University 構内の学会場玄関でのもの
である。

1998 年 6 月の Nice, France で行われた第 76 回 IADR 総
会で私は会長に就任することになっている。そのとき日本
から鶴巻克雄 FDI 会長も Council や開会式に出席してくだ
さった。写真 20 は Council Dinner 前のパーティで Glantz
会長と話をされる鶴巻会長のスナップである。開会式では
President-elect address を行う義務がある。写真 21 はその
時のものであり、その原稿は J Dent Res 77(9): 1668-1669,
1998 に掲載されている。この開会式で、JADR 次期会長の
岡田 宏大阪大学教授は IADR の Distinguished Scientist
Award である Basic Research in Periodontal Disease Award
を受賞された。まことにめでたいことである。学会の終
わり近くに開催される President's Reception で会長の



写真 18. Greenspan IADR 前会長の還暦を
祝って。
(左→右) Sally J. Marshall IADR 副会長、John S.
Greenspan IADR 前会長(1996-1997)、Stephen
Bayne AADR 副会長、Charles N. Bertolami カ
リフォルニア大学サンフランシスコ校歯学部長。
Greenspan 教授のご自宅にて。1998 年 1 月。



写真 19. IADR の韓国部会(KADR)の学会に参加。
(左→右)南 東錫 KADR 副会長、金 哲偉 KADR 会長、
筆者 IADR 次期会長、栗栖浩二郎教授 JADR 監事、劉
東洙教授 KADR の創立メンバー。国立ソウル大学構内に
て。1998 年 1 月。



写真 20. Per-Olof Glantz IADR
会長と話される鶴巻克雄 FDI 会
長。Nice, France にて。1998 年
6 月。



写真21. 第76回IADR総会の開会式でPresident-elect addressを行う筆者。Nice, Franceにて。1998年6月。



写真22. IADR会長のメダリオンを伝達された筆者。(左→右)Eli Schwarz事務総長、筆者、Per-Olof Glantz前会長。Nice, Franceにて。1998年6月。



写真23. IADR会長のメダリオン。

メダリオンが次の会長に伝達される。写真22は新会長の私にメダリオンが伝達されたときのものである。このとき、Glantz会長からすばらしいメッセージをいただいた。JADR事務局長であり次期会長の岡田 宏教授はこのメッセージをJADRのニューズレター1998-2 Augustの4ページに収録して下さっている。この会長のメダリオンは1972年にSouth African DivisionからIADRに寄贈されたものだそうである(写真23)。チェーンには歴代会長

の名前が彫りこまれている。

さて、会長に就任してから最初の仕事は、NiceでのIADR総会の直後に6月28日夕刻の開会式から4日間にわたってBaveno, Italyで開催された第15回International Conference on Oral Biology (ICOB)に会長として出席することであった。このICOBは“Oral Biology and Dental Implants”というテーマで、AADR前会長でUniversity of IowaのDr. John C. Kellerが15th ICOB Scientific Advisory CommitteeのChairとして開催された。JADRの会員も多く参加され57演題のうち11題が日本から提出された。写真24は、このICOB



資料6. 鶴巻克雄 FDI 会長からいただいた書状。



写真24. ICOBに参加されたJADR理事 恵比須繁之教授ご夫妻。後ろの湖はLogo Maggiore。Baveno, ItalyのGrand Hotel Dinoにて。1998年6月。



写真25. South-East Asian Division (SEA Div.)訪問時。(左→右)筆者夫妻、Noor Hayaty Abu Kasim SEA Div. 会計理事、Toh Chooi Gait SEA Div. 会長、Dr. Said of Ministry of Education、Teo Choo Soo SEAADAE 会長・IADR理事。Kuala Lumpur, Malaysiaにて。1998年10月。



写真26. 座長のWei IADR 元会長 (1993-1994) から、講演後感謝状の plaque を受け取る筆者。Kuala Lumpur, Malaysia にて。1998年10月。



写真27. Argentine Division 訪問時。(前列着席 左→右) Osvaldo R. Costa Argentine Div. 次期会長、筆者、Raquel Doño Argentine Div. 会長、Angela M. Ubios Argentine Div. 国際関係および会計理事。(後列)二人目から Argentine Div. の役員・理事の先生方。San Luis, Argentina にて。1998年10月。



写真28. IADR 会長のメダリオンをつけた筆者。大阪にて。1998年10月。

に参加された JADR 理事の恵比須繁之大阪大学教授ご夫妻が筆者夫妻の部屋を訪れてくれたときのものである。帰国すると鶴巻克雄 FDI 会長からご丁寧な書状をいただいていた。FDI との関係を示す意義ある書類と思われるので資料6に加えた。

IADR 会長の任務の一つとして、少なくとも1つの Division を訪問しなくてはならないということがある。Division での dental research の振興を促すことが主な目的である。私が訪れたのは、South-East Asian Division, Argentine Division, Japanese Division および Egyptian Division であった。

South-East Asian Division では教育学会と研究学会が併催されるのが慣わしのようである。1998年9月30日～10月3日にかけて Kuala Lumpur で開催された学会は、South-East Asia Association for Dental Education (SEAADE) の 9th Annual Scientific and General Meeting および IADR の South-East Asian Division (SEA Div.) の 13th Annual Scientific Meeting が “Working Together for Advancement of Dental Education and Research” と銘打って開催された。写真25は開会式前の記念写真である。開会式には、Dr. Said of Ministry of Education が来賓として出席された。写真26は講演後、座長の Wei IADR 元会長から感謝状の plaque を受け取る筆者である。学会はすべて英語で行われ、若い研究者の熱心な多数の参加があり盛会であった。

1998年10月22-24日にかけて行われた Argentine Division の学会は Sociedad Argentina de Investigacion Odontologica の XXXI Reunión Anual として San Luis で開催された。San Luis は Buenos Aires から 730 km ほど東に位置する閑静な保養地にあり、国内線の飛行機で Buenos Aires から移動した。学会の開会式には、Dr. Carlos Marshof, General Director of the Fund of Science and Technology from the National Agency of Promotion of Science and Technology が来賓として出席された。また、IADR 理事である Brazil の São Paulo 大学の

Prof.^a Dr^a Maria Fidela de Lima Navarro も開会式に参加された。学会はスペイン語で行われ、筆者の英語での講演はスペイン語に通訳された。スペイン語は日本語よりも英語に近いと思われるが、英語とは大変違うとの事で、日本語で発表される JADR の学会と類似のご苦労があると思



資料7. IADR 会長の期間に使用された公式のレター用紙、ご協力頂いた役員・理事の氏名と役割が下方に記されている。

われた。写真27は、そのときのものであるが、女性の研究者が多かった。

1998年11月28～29日にかけて行われたJADRの第46回年次大会は東京歯科大学の高江洲義矩教授が大会長で、千葉の幕張メッセ・国際会議場を会場に選ばれた。JADR会長の黒田敬之東京医科歯科大学教授が2001年にIADR総会を幕張メッセ・国際会議場で開催する準備をLocal Organizing CommitteeのChairの立場のIADR理事として進められている時期であり、適切な会場の選択であると感謝した。この会の特別講演にはBostonのForsyth Dental CenterのDr. Martin A. Taubmanと韓国から釜山国立大学のDr. J.B.Kimが招待され、それぞれdental cariesのワクチン研究の見通しおよび韓国におけるフッ素の水道水への応用に関する講演をされた。これらの特別講演を初め例年のJADRの学会の様式に則って活発な学会が開催されたことは、大いに誇りとするところである。なお、この学会での記録はJADR Newsletter 1999-1 Januaryに詳しく掲載されている。

1998年12月17-18日にかけて、米国在住であるがEgyptian DivisionのIADR CouncilorであったDr. Aida A. Chohayebから、“Collaborative International Dental Research”という目標を掲げてCairo, EgyptのNational Research Centerで開催されるIADRのEgyptian Divisionの学会に参加を要請されて出席した。この学会には、National Institute of Dental and Craniofacial Research (NIDCR)のAssociate Director for International HealthであるDr. Lois K. Cohen, Israeli Division選出のCouncilorでHebrew University-Hadassah School of Dental MedicineのDr. Harold Sgan-Cohen, IADRのBasic Research in Biological Mineralization Awardの受賞者である米国Columbia UniversityのProf. Raquel Z. LeGerosらがEgypt以外から参加され、EgyptからはNational Research CenterのProf. Dr. Aly El-Nofelyが参加された。しかし、Israelからの一般参加者の入場を拒むという事態が発生し、2日目は会場をMarriott Hotelに急遽移して学会を継続するという異例の事態を初めて経験した。このような事態の発生は、複雑な政治的背景の影響と無関係ではないと考えるが、JADRではこの種の心配な

しに学会の運営ができ、また、研究に邁進できる環境にあるという幸運を会員は認識するべきであろう。

IADRの会長として各Divisionの訪問など公式の役割を果たすとき、メダリオンを着用するのが取り決めになっている。それゆえ旅行中にメダリオンを紛失しないように配慮する必要があった。写真28は旅先ではないが、記念として撮ったものである。資料7はIADRから公式文書発送時に用いられた手紙の用紙である。ご協力頂いた役員・理事の氏名と役割が下方に記されている。東京医科歯科大学の黒田敬之教授も理事のお一人で、2001年の千葉・幕張で開催されるIADR総会のLocal Organizing Committee (LOC)のChairとして活躍された。

4) 1999年の記録

1999年に入ってから3月にVancouver, Canadaで行われる第77回IADR総会の会長としての役割を果たさねばならないのでさまざまな準備をした。このときのJADR会長は大阪大学の岡田 宏教授であった。IADR総会の開催時期はNorth Americaでは3月または4月に、それ以外の国では6月に定められてきたので、第77回総会も3月10～13日に開催された。この時期は日本では学年末の忙しいときであるので、何かとご不便をかけたと思うが、岡田会長を始めとするJADRの役員・理事の先生方にご協力いただいたことを感謝している。

学会は第28回American Association for Dental Research (AADR)総会、第23回Canadian Association for Dental Research (CADR)総会と共催で、University of British Columbia歯学部長のDr. Edwin Yenが19名からなるLocal Organizing CommitteeのChairとなって開催された。学会では16のGroup-sponsored symposia、3つのIADR/AADRとAmerican Association of Dental Schools (AADS)のjointly sponsored symposia、3つのHands-on Workshopsなどを含む3,605の演題の発表およびDr. Joseph VacantiのTissue Engineering and Biochemistryと題するW. J. Gies Distinguished Scientist Lectureをはじめ2つの特別講演、37のLunch & Learningなどが行われ、6,003名の参加登録があり活発で意義ある学会となった。この登録会員数は、これ



写真29, 第77回IADR総会時のCouncilの一場面。議長を務める筆者。Vancouver, Canadaにて。1999年3月。



写真30, 第77回IADR総会時のCouncilでの3名のJADR選出のCouncilorとKADR会長。(左→右)一人おいて大浦 清JADR副会長、奥田克爾JADR次期会長、Boo-Byung Choi KADR会長、岡田 宏JADR会長(1999-2000)。Vancouver, Canadaにて。1999年3月。



写真31, Council Dinnerに出席されたJADR関係者。(左→右)黒田敬之IADR理事・後に会長(2005-2006)・JADR前会長(1997-1998)、奥田克爾JADR事務局長・次期会長、黒田敬之教授夫人、山田 正教授夫人、岡田 宏教授夫人、岡田 宏JADR会長(1999-2000)、大浦 清JADR副会長、齊藤 毅 日本歯科医学会会長。Vancouver, Canadaにて。1999年3月。



写真 32. Council Dinner で挨拶する筆者。右端は Council Dinner の進行役を勤めてくれた Eli Schwarz IADR/AADR 事務総長。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。



写真 33. 開会式での司会進行をする筆者とそのときの背景スクリーン。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。



写真 34. 開会式修了後に演壇を背景にした IADR 会長、AADR 会長と事務総長。(左→右)筆者、Paul Robertson AADR 会長、Eli Schwarz IADR/AADR 事務総長。Vancouver, Canada にて 1999 年 3 月



写真 35. Private Reception に招いた JADR 関係者。(後列左→右)岡田 宏会長(1999-2000)、黒田敬之前会長(1997-1998)・後に IADR 会長(2005-2006)、山田 正元会長(1995-1996)、黒田敬之教授夫人、山田 正教授夫人、岡田 宏教授夫人、前列は筆者夫妻。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。



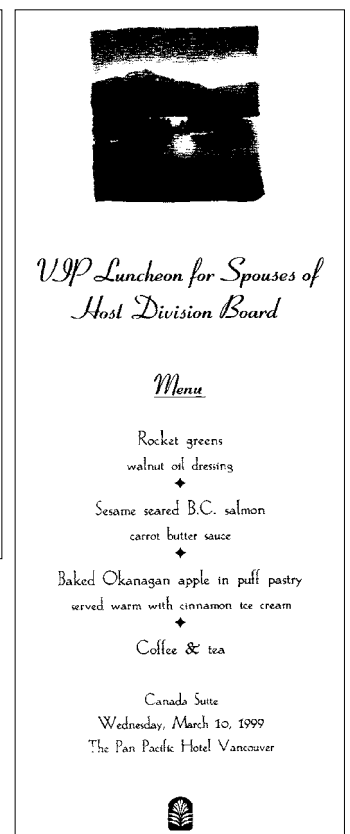
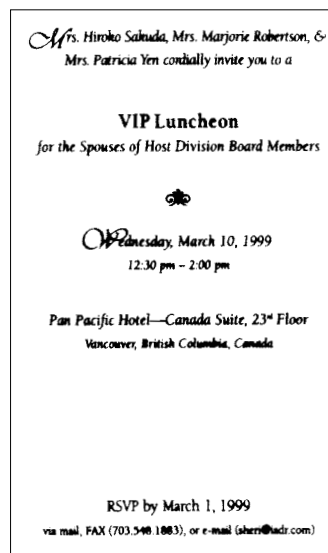
写真 36. Private Reception に招いた JADR 関係者(2001 年の IADR 総会の LOC メンバー)。(左→右)二人目から大谷敬一現会長(2005-2007)、筆者、須田英明教授。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。



写真 37. Private Reception でのスナップ。(左→右)山田 正 JADR 元会長(1995-1996)、Stephen Bayne AADR 次期会長、John J. Clarkson 前事務総長・後に IADR 会長(2002-2003)、Clarkson 教授夫人、筆者、Bayne AADR 次期会長夫人。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。



写真 38. Private Reception でのスナップ。Greenspan 教授ご夫妻と筆者夫妻。(左→右)John S. Greenspan IADR 元会長(1996-1997)、Deborah Greenspan 教授・2005 年に IADR 副会長に選出された。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。



資料 8. 会長夫人の昼食会への招待状(左)とそのメニュー(右)。



資料9. IADR, AADR 両会長が関係者を招いて共催で行う Reception の招待状。この Reception で会長のメダリオンが次の会長に伝達される。

まで開催された IADR 総会の中で3番目に多い参加者であった。この学会の盛会は、AADR 会長の Dr. Paul Robertson、CADR 会長の Dr. Hardy Limeback のご協力のもとより、関係者各位および本部事務職員の暖かく、かつ、熱心なご支援の賜物であったと感謝している。

さて、総会の期間中にはさまざまな公式の会合があり、会長はそれらに出席して役割を果たす責任がある。Council では議長を務めるが、写真29は Council の一場面である。写真30はその Council に出席された JADR 選出の3名の Councilor で、大阪歯科大学の大浦 清教授、東京歯科大学の奥田克爾教授、大阪大学の岡田 宏教授である。Council が終わった日の夕刻から Council Dinner が行われるのが恒例となっている。写真31は Council Dinner に出席された JADR 関係者である。日本歯科医学会から Council に observer として出席された斉藤 毅会長も参加して下さった。写真32は Council Dinner で本総会の開催にあたってお世話になった各位に御礼の挨拶をする筆者である。

Council が終わった後に果たさなければならない大きな会長の役割は開会式での進行役を務めることである。写

真33は開会式での司会進行をする筆者とそのときのスクリーンの背景である。写真34は開会式終了後のスナップである。

会期中には、2回の会長招宴のレセプションがある。

一つは会長が宿泊している suite に関係者を招いての Private Reception であり、他の一つは IADR, AADR 両会長が関係者を招いて共催で行う Reception である。このときには会長のメダリオンが次の会長に伝達される。筆者が開催した Private Reception には JADR から岡田 宏会長、山田 正元会長、黒田敬之前会長らを始め、2001年の IADR 総会の LOC のメンバーとして活躍された東京医科歯科大学の大谷啓一教授 現 JADR 会長 (2005-2007)、同須田英明教授らが参加して下さった。写真35-38はそのときの写真である。IADR, AADR 関係者が多数お越し下さり、楽しいひと時を過ごした。総会の開催中に会長夫人も VIP 夫人を招いて昼食会を開催するが、資料8-左は招待状で、資料8-右はそのときのメニューである。総会の終わりの夕方には、先に述べたように IADR, AADR 両会長が関係者を招いて共催で行う Reception がある。資料9はそのときの招待状である。その Reception 会場入り口での招待者への立礼の場面は山田先生の原稿(29頁)に掲載されている。写真39は筆者が会長の期間支えて下さった役員・理事を紹介しているところである。その後、メダリオンの伝達が行われ、写真40,41は伝達後のものである。AADR 会長であった Paul Robertson 教授とともに大役を果たした充実感を味わい、今後の本学会の発展を祈念した。同時に JADR についても地区学会としての特色を發揮して今後の研究内容の充実を期待した。

会長としての任務を修了した後、あと1年 Immediate Past President としての役割がある。Board of Directors Meeting, Officers' Meeting, Council Meeting などに出席し、新会長に必要なに応じて助言を与えるというものである。また、副会長候補者の人選にも預かるので、本部との連絡も割合頻繁に行われた。

この間、JADR では、1999年12月に大阪歯科大学の大浦 清副会長が大会長をつとめられて神戸で第47回



写真39. 筆者が会長の期間支えて下さった IADR 役員・理事の紹介 - Presidents' Reception - にて。(左→右) Marjorie K. Jeffcoat 副会長、筆者、Sally J. Marshall 次期会長、Eli Scharz 事務総長、Mark C. Herzberg JDR 編集長、John W. Stamm 会計理事、W. Mike Edgar 理事、Per-Olof Glanz 前会長、Paul Robertson AADR 会長・後に IADR 会長(2004-2005)、黒田敬之理事・後に IADR 会長(2005-2006)、Choo Soo Teo 理事。Vancouver, Canada にて。1999年3月。



写真40. IADR, AADR それぞれの会長がメダリオンを伝達し、更なる学会の発展を新会長に託す - Presidents' Reception - にて。(左→右) 筆者、Paul Robertson AADR 前会長・後に IADR 会長(2004-2005)、Sally J. Marshall IADR 新会長、Steve Bayne AADR 新会長。Vancouver, Canada にて。1999年3月。



写真41. メダリオンの伝達後 - Presidents' Reception - にて。(左→右) Paul Robertson AADR 前会長・後に IADR 会長(2004-2005)、Alan A. Lowe 本総会 LOC のメンバー、筆者、Barry J. Sessle 元 IADR 会長(1994-1995)。Vancouver, Canada にて。1999年3月。



写真 42. 第 47 回 JADR Annual Meeting 開催時(神戸)の招待者および JADR 役員・理事。
(前列着席 左→右)Lee 教授夫人、Jin-Yong Lee 教授、河村洋二郎 JADR 元会長(1973-1974)・名誉会員・第 58 回 IADR 総会(1980 大阪)での名誉会長、Graham Embery IADR 副会長、Grayson W. Marshall 教授、Sally J. Marshall IADR 会長(1999-2000)、Bruce J. Baum NIDCR 研究主任、Baum 研究主任夫人
(後列左→右)筆者、大浦 清 JADR 副会長・大会長、黒田敬之 JADR 前会長(1997-1998)・ IADR 理事・現会長(2005-2006)、岡田 宏 JADR 会長(1999-2000)、山田正 JADR 監事・元会長(1995-1996)、川添 堯彬 JADR 監事、柴 芳樹 JADR 理事、奥田克爾 JADR 事務局長・次期会長、南雲正男 JADR 理事、中林宣男 JADR 理事、村上伸也 JADR 幹事・現会計理事。神戸にて。1999 年 11 月。



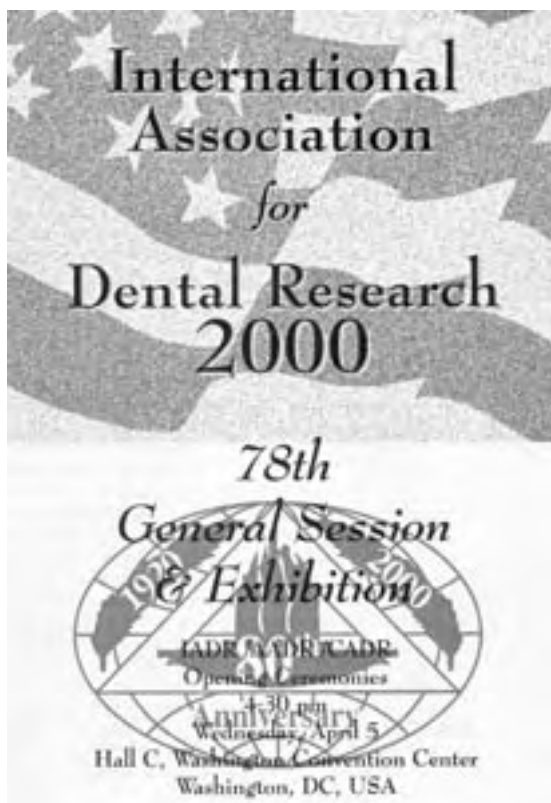
写真 43. IADR Board of Directors Meeting 後のひと時。
(左→右)黒田敬之 IADR 理事・現会長(2005-2006)、Graham Embery IADR 副会長、John W. Stamm IADR 会計理事、Eli Schwarz IADR/AADR 事務総長、Teo Choo Soo IADR 理事、筆者夫妻、Robert (Skip) Collins IADR/AADR 事務次長。San Diego, CA にて。2000 年 1 月。

Annual Meeting が行われた。この学会では NIH から National Institute of Dental and Craniofacial Research (NIDCR) の Gene Therapy and Therapeutics Branch の研究主任である Dr. Bruce J. Baum および韓国慶熙大学の Jin-Yong Lee 教授らを特別講演者として招き、Sally J. Marshall IADR 会長(1999-2000)、Graham Embery IADR

副会長らをはじめとする来賓各位の参加を得て、岡田 宏 会長のもとで盛大に開催された。写真 42 は理事懇親会の際の記念写真である。なお、この学会での記録は JADR Newsletter 2000-1 January に詳しく掲載されている。

5) 2000 年の記録

写真 43 は 2000 年 1 月に開かれた IADR Board of Directors



資料 10-1. 第 78 回 IADR 総会が 2000 年 4 月に Washington, D.C. で開催されたときの開会式のプログラム。1921 年の初代 IADR 会長から 2000 年の IADR 会長に至るまでの歴代会長が写真入りで示されている。



- ★ Opening Remarks
- ★ Introduction of the IADR Board of Directors
- ★ Introduction of the IADR Division/Section Representatives
- ★ Welcoming Remarks by the Deputy Director of FAHQ, WHO
- ★ Welcoming Remarks by Acting Director of the NIH
- ★ Introduction of the CADR Board of Directors
- ★ Acknowledgment of Past Presidents
- ★ Introduction of Special Guests and the Local Organizing Committee
- ★ IADR President-elect's Address "The World of Oral Research: How Do We Improve It?"
- ★ Presentation of the IADR Distinguished Scientist Awards
- ★ Presentation of the E.W. Borow Memorial Award
- ★ Announcement of IADR Fellowships and Awards
 - David B. Scott Fellowship
 - IADR Division Travel Awards
 - IADR/Colgate "Research in Prevention" Travel Award
- ★ Presentation of IADR Distinguished Service Award
- ★ Presentation of the IADR/Unilever Hatton Awards
- ★ Remarks by the AADR President
- ★ Introduction of the AADR Board of Directors
- ★ AADR President-elect's Address "DentalResearch2000.org"
- ★ Announcement of the AADR Student Research Fellowships
- ★ Presentation of the William J. Gies Award
- ★ Presentation of the AADR/Warner-Lambert Hatton Awards
- ★ Presentation of the AADR/AADS Harold Loe Scholars Program
- ★ Presentation of the Jack Hein Public Service Award
- ★ Presentation of the William B. Clark Fellowship in Clinical Research
- ★ Announcements and Adjournment
- ★ Welcome Reception

資料 10-2. 第 78 回 IADR 総会(Washington, D.C.)開会式プログラムの議事次第。

International Association for Dental Research Presidents 1921-1962



1921-1923
James Leon Williams



1923-1924
Paul Knew Johnson



1924-1925 & 1931-1932
Sidney Edmund Wilson



1925-1929
Andrew Taylor Soper



1929-1937
Graham Murray Wright



1937-1939
Leroy Marshall Stephens Nelson



1939-1941
Arthur Thompson Black



1941-1943
The Central Society



1943-1945
Russell Wilson Penning



1945-1946
Edward Percival Norton



1946-1950
Hugh Lutz Donald Applegate



1950-1956
Franklin Sherman Hunt



1956-1957
William Graham Quinn



1957-1958
Paul Edward Kasten



1958-1959
Thomas Joseph Hill



1959-1960
William John Gitt



1960-1962
Wilbur Smith



1962-1967
Louis Johnson



1967-1968
Charles Francis Brinkley



1968-1969
Philip Day



1969-1969
Henry Donald Thur



1969-1969
Walter David Armstrong



1969-1967
James Willard Dean



1967-1968
Harold Carpenter Bridge



1968-1969
Alan Gilbert Brink



1969-1967
James Roy Nugent



1969-1969
Paul Oliver Raby



1969-1962
Leonard Samuel Smith



1969-1968
Maynard Springer Howe



1968-1968
Francis Arthur Arnold, Jr.



1968-1968
George Emily Rydenberger



1968-1966
Paul Edmund Rege



1966-1967
Joseph Francis Sklar



1967-1968
Walter Joseph Szymanski



1968-1969
Paul Richard Williams



1969-1967
Norman Burton James Johnson



1967-1968
Nelson Gus Slighter



1967-1962
James Andrew English

資料 10-3. 第 78 回 IADR 総会(Washington, D.C.)開会式のプログラムより引用。

International Association for Dental Research Presidents 1962-2000



1962-1963
Seymour Scott Kohnert



1963-1964
Dan George Smith



1964-1967
Marvin Bruce Quisenberry



1967-1968
Simon Norman Levy



1968-1969
Richard Samuel Marley



1969-1969
Ralph William Phillips



1969-1969
John Herbert Macdonald



1969-1972
E. J. Lee Chiu Thomas



1972-1973
Gordon Henry Krenzelok



1973-1972
Frank J. O'Neil



1972-1972
Gunnar Ege



1972-1974
Magnus Ege Almgren



1974-1975
James K. Berry



1975-1976
David B. Ayre



1976-1977
Harold P. Fisher



1977-1978
George Simpson Seagrave



1978-1979
Tom Brudvik



1979-1981
Donald Lee



1981
John B. Gray



1981-1982
Mary Young Aglin



1982-1983
Roscoe M. Mader



1983-1984
Robert Maurice Ford



1984-1987
J. Richard Van Cise



1987-1988
Paul Goldhaber



1988-1987
Joe B. Nye



1987-1989
Roy C. Page



1989-1989
William Dennis McHugh



1989-1989
Ernest Anderson



1989-1991
William H. Brown



1991-1992
Robert T. Grier



1992-1993
John C. Greene



1993-1994
Stephen M. C. Wu



1994-1995
Perry J. Scott



1995-1996
Richard B. Ramsey



1996-1997
John J. Zimmerman



1997-1998
Peter G. Jensen



1998-1999
Marnett Selbach



1999-2000
Judy J. Marshall

資料 10-4. 第 78 回 IADR 総会 (Washington, D.C.) 開会式のプログラムより引用。



写真 44. Japan Night でのひとこま。
(左→右)筆者、岡田宏 JADR 会長(1999-2000)、岡田 宏会
長夫人、Graham Embury IADR 副会長。Washington, D.C. に
て。2000 年 3 月。



写真 45. JADR 会長のメダリオン



写真 46. 第 79 回 IADR 総会(第 49 回 JADR Annual Meeting)
開会式で岸本忠三大阪大学総長が名誉会員証を受け取られる遠景。
千葉・幕張にて。2001 年 6 月。

Meeting の後、夕食でくつろいだときのものである。4 月には、Washington, D.C. で第 78 回 IADR 総会が Sally J. Marshall IADR 会長のもと、Vancouver での総会より多数の参加者を得て盛大に開催された。JADR から多数の参加者があったと聞いている。資料 10-1,2 はそのときの開会式のプログラムである。開会式はおよそこのプログラムの様式に則って行われるので参考になると思って資料として添付した。JADR から選出された Hatton Awards Competitors の氏名もこのプログラムに見られるが、今回の大きな特色は 1921 年の IADR 初代会長から 2000 年の Sally J. Marshall 会長までの歴代会長が写真と共に掲載されていることである。歴史を紐解くときの参考になると思われる(資料 10-3,4)。ところで、IADR 総会では、株式会社 GC が Japan Night という Reception を開催し、関係者を招待しておられる。写真 44 はそのときの写真の 1 枚であるが、岡田 宏 JADR 会長の胸には、JADR 会長のメダリオンがかけられている。AADR をはじめ、各国部会

長もそれぞれ会長はメダリオンを持っていて、公式の会合にはそれを着けて参加するのが国際的な慣わしになっている。しかし JADR にはメダリオンがなかった。このことは、IADR 会長として公式行事に出席するとき、JADR の体面が他の部会に対して保てていないと感じ、大変肩身の狭い思いであった。筆者は IADR 会長の間メダリオンを所有していたから、JADR 会長のメダリオンを作ることを思いついた。そこで、大きさを小さくしてはいるが、IADR 会長のメダリオンと似たデザインのメダリオンを専門業者に作成してもらい、お世話になった JADR への恩返しのためで岡田宏教授が丁度 JADR 会長のときに寄贈した。写真 45 はそのメダリオンである。メダリオンをつけた JADR 会長の姿を見て大変うれしく思うとともに、JADR の今後の発展を強く期待するものである。

IV. IADR 役員任期後 JADR50 周年までの時代 (2000 ~ 2002)

2000 年 12 月には日本大学松戸歯学部安孫子宜光教授(2003-2004 に JADR 会長)が大会長として充実した第 48 回 Annual Meeting を松戸で開催された。このときは、Marjorie K. Jeffcoart IADR 会長(2000-2001)、John W. Stamm IADR 会計理事が来日、参加された。Jeffcoart 会長は、特別講演として、“患者のより良いケアのための新しい科学：研究室から臨床へ”と題する興味ある講演をされ、韓国からは、ソウル国立大学の Byung-Moo Min 教授が口腔癌の発現に関する分子レベルでのメカニズムについて特別講演をされた。なお、この学会での記録は JADR Newsletter 2001-1 January に詳しく掲載されている。この学会で、筆者が岡田 宏 JADR 会長(1999-2000)から JADR の名誉会員に推挙されたことは、文字どおり誠に名誉なことであり、この場を借りて JADR に感謝の意を表したい。

2001 年 6 月には JADR の第 49 回 Annual Meeting が第 79 回 IADR 総会に合体して行われた。

IADR は Jeffcoart 会長でのときであり、JADR は奥田克爾会長(2001-2002)のときである。黒田敬之組織委員長が努力が実って、日本の歯科医学研究の進歩に大きく貢献する学会となった。内容はもとより余剰金も出る学会となり、運営面でも成功であった。この学会で、大阪大学の岸本忠三総長が W. J. Gies Distinguished Scientist Lecture として“Cytokines in Health and Disease”と題して講演をされ、多くの参加者に深い感銘を与えていただいた。ご多忙のところ時間を割いていただき、大変感謝する次第である。この機会に、岸本総長を、元 IADR 会長の役割として IADR の名誉会員に推挙し、この学会の開会式でお受け頂いた。写真 46 は開会式で名誉会員証を受け取られたときのものである。岸本総長は 1998 年に文化勲章を受章しておられる世界的な科学者であり、わけても IL-6 に関する研究の第一人者である。IADR の名誉会員は、会員外で歯科医学の研究に大きな貢献をされた研究者に贈呈されることになっている。



資料 11-1. IADR Vice President および President-elect のときに使用したバッジ。



資料 11-2. President および Immediate Past President のときに使用したバッジ。

JADR の第 50 回 Annual Meeting を仙台で渡辺 誠大会長のもと 2002 年 11 月 30 日から 12 月 1 日にかけて開催された。この学会は 50 周年ということで、記念式典や市民フォーラムを併催するなど特別な企画が持たれ、活発な学会であった。この学会での記録は添付した JADR Newsletter 2003-1 January に詳しく掲載されている。奥田克爾会長が JADR の 50 年を締めくくり、2003 年からの新たな JADR の開幕を安孫子宜光新会長にゆだねるにふさわしい学会となった。

昨今の JADR 会員の活躍を見ていると、学会発表の参加は当然のことながら、委員会委員や研究グループの役員としての参加もこれまで以上に活発となったように思われる。また、Distinguished Scientist Award を初めとする種々の賞の受賞者を多く輩出しているのみならず、東京医科歯科大学の黒田敬之名誉教授が 2005 年現在 IADR の会長として活躍されていることはご同慶の至りである。

V. おわりに

JADR は、非営利団体である国際歯科研究学会 IADR の 1 分科会であり、専門分科会ではないが、専門分科会の高い研究レベルを統合した総合歯科学会としてますます発展することを希望している。他国部会の発展に肩を並べるといふよりも他をリードするような JADR の発展を期待したい。

謝 辞

いかなる組織でも、組織を立ち上げ発展させるには、大変なご苦労が伴うものです。JADR を発足させ、今日に至るまで並々ならぬ熱意と努力で発展させてくださった諸先輩に深甚なる敬意と謝意を表したいと思います。また、本稿を書く機会を頂いた大谷啓一 JADR 会長および奥田克爾編集委員長に厚く御礼を申し上げます。

さらに、本稿の写真には、JADR 元会長の山田 正東北大学名誉教授をはじめ多くの皆様からいただいたものが含まれています。どの写真をどなたからいただいたかの記録が定かでないで、誠に申し訳ありませんが写真ごとに撮影者に御礼を申し述べ

ることが出来ません。写真をいただいた皆様のご厚意に対して心から御礼を申し上げます。



JADR の将来

JADR 名誉会員(1995～1996 年会長)
東北大学名誉教授
山田 正



私が初めて国際歯科研究学会日本部会との接触を持ったのは、河村洋二郎先生が開催された宝塚での例会です。IADR 会員となるためには、それなりの業績が必要だということで、Archives of Oral Biology に 2 報ほど論文を載せた後に、会員資格を認められ、宝塚という独特の雰囲気を持った街で、日本歯科界の一級の研究者と膝を交えての討論をすることができました。田熊庄三郎、須賀昭一先生など硬組織の一級の研究者に大学院を出たばかりの私が愚問を発することができ、また、討論の時間も各発表ごとに 20 分くらいあるという独特の雰囲気を持った、学会と言うより、研究会的な集まりでした。その後、箱根の研修センターに缶詰状態で例会が行われたときは、河村先生が中心となって日本で初めての IADR 総会を開催するというので、寄付金が集められ、私も当時の薄給から、大枚をはたいて寄付したのを覚えております。しかし、日本で IADR 総会を開催するためには、多くの会員が必要だということで、会員を増やす努力がされ、また、米国で IADR 会員となって帰国する人も多く、これまでの資格限定的なサロン風の雰囲気は失われ、通常の学会とあまり変わらなくなってきたのは残念でした。後に、私が磐梯の山のなかで JADR 総会を主催した意図も、何とか昔の雰囲気の一部でも復活させたい意図がありました。

JADR の運営に関わり始めたのは、Newbrun IADR 会長の推薦で、私が Young Investigator Awards の選考委員に選ばれた頃です。当時の佐々木哲会長が、東京に IADR 総会を誘致しようとしており、IADR 本部役員に知り合いが多い私を JADR の運営に係わらせようとして、私を理事に推薦されたのではないかと、推察しております。国内の整備は、黒田敬之先生が色々努力されていましたが、私は、佐々木会長、作田守会長のもとで、IADR 総会の機をとらえては、IADR の運営に関わる友人達に接触してきました。もちろん、黒田先生も国外での努力もされていたようでした。

この頃、韓国部会と JADR の間で、二人の特別講演者を交換することにしており、二人という人数は、JADR としては、負担が大きいと感じていた状態でした。しかし、交換を一人にしたいと言いつくすのは、なかなか言いにくいことです。普段、ずけずけものを言う私ならばと、佐々木会長は考えたのでしょう、私に猫の首に鈴をつける役目を仰せつけられました。私が韓国へ招待された機に、佐々木会長の意を受けて、韓国部会の幹部と話し合い、二人の交換を一人にさせていただきました。韓国歯科界のボスである金周煥先生と私にトゥースフレンドリー協会の活動を通じて親交があったのも幸いでいた。

1995 年、予定外で、将に晴天のへきれきで JADR 会長に就任しました。規約の改正、シンガポールでの IADR 総会の共催(この総会は JADR 総会も兼ねて行われる形となり、この年は、日本での JADR 総会は開かれませんでした)、幕張での IADR 総会への準備など多くの問題がありましたが、何と言っても日本人で初めての IADR 会長となるべく、作田先生が副会長に当選されたことが最も印象に残っています。作田先生の当選には、事務局長として私を支えていただいていた岡田宏先生の努力によるところが大きかったのですが、私が作田先生を送り出したのには、理由があります。先生のお人柄、業績はもちろんですが、私は先生がいわゆる西欧かぶれの面が全くなく、極めて日本的な考えをされ、振る舞われておられたことです。IADR が真の国際学会であるためには、会がアメリカ的・西欧的な考えだけで主導されてはいけないと思っ



ご夫妻写真 1. 懇親会に会長としてゲストを迎える作田先生(Vancouver にて)

ていたからです。欧米的な考え方とのすりあわせはもちろん必要ですが、それぞれの国の人たちがそれぞれの国のアイデンティティーを失わずに協調してこそ初めて国際学会と言えると考えていたのです。私自身、IADR の種々の委員会に関わったとき、アメリカ主導を強引に押し進めようとする傾向に、ときにはヨーロッパなどの人たちと協同して、抵抗してきたことがあったからです。立候補を躊躇される先生には、「先生、こんなチャンスに恵まれる人は滅多にいません。大変かもしれませんが、こんなエキサイティングなことがこの年齢になってできることは、先生の一生にすばらしい 1 ページを加えることになるのではないのでしょうか」と勝手な理屈を言って口説き落としました。口説きは私、票集めは岡田先生という分担になっていたかもしれません。1996 年の新年早々、作田先生当選のニュースが入ったときは本当に嬉しく思いました。

現在の多くの学会は都市で開催され、発表が終わると街へ出かけてしまい、会員同士が親しく交流し、討論する機会が少なくなりました。JADR 総会が、私が参加した頃の宝塚、箱根のミーティングのような雰囲気をもつものになりたいと思い、私が大会長をお引き受けしたときに、教室員の反対を押し切って、裏磐梯の山の中のホテルで開催しました。外に出ても森林しがなく、否応なしにホテルの中での会員同士の交流が促進され、個人的な討論も多くなると考えました。交通不便のため、例年より参加者は少なく、予算もやっとゼロにこぎ着ける状態でした。しかし、心配していた天候も良好で、参加された方は露天風呂での月見を楽しみ、学会を楽しんだようでホッとしました。それ以来、このような試みのないのを残念に思っています。

また、これまで少なかった、本部委員会へ日本部会会員を委員として推薦することにも力を入れ、これは、かなり成果があり、その状態が続いていることに満足しています。ただ、私自身は、JADR 会長のとき、ハットン賞の選考委員を兼任して、総会では忙しく、かなり大変な思いをしました。

JADR を他の学会とは違う魅力を持たせるためには、国際学会としての特徴を生かさなければならないと思いました。そのため、何年かに 1 度は、韓国、中国、東南アジア、オーストラリア・ニュージーランド部会など西太平洋地区で、合同の部会をもつことを考えました。シンガポール総会で知り合った東南アジア部会の幹部、オーストラリア、香港や台湾の有力者とも接触し、中央に位置する沖縄あるいは台湾で合同部会を開催する話を進めてみましたが、沖縄などは地理的には近くとも、オーストラリア方面からの交通の便が悪く、結局、実は結びませんでした。しかし、中国、東南アジア地域などの歯科医療事情は欧米とは大きく異なります。その辺の問題点を主要テーマにした合同部会は、グローバルな歯科医学の発展には大きな意義があるのではないかと考えています。全世界から参加する IADR 総会では、なかなか焦点が絞られきれないこともあり、これからのこの地区での JADR の主導性が期待されるのではないのでしょうか。

歴代会長からの メッセージ

いずれにしろ、JADR をいかに魅力的な学会にするか、私の会長時代にも種々議論してきましたが、これからも真剣に取り組んで欲しいと思っています。

思い出すまに

名誉会員(1997～1998 年会長)
東京医科歯科大学名誉教授
黒田 敬之



大谷啓一会長ならびに、編集委員長奥田克爾先生から、小生にも JADR 50 周年記念誌に何か思い出を記させていただけるとのお話、誠に有り難いことと存じます。

IADR 日本部会に初めて参加させていただいたのは、1963 年 11 月の日本大学歯学部講義室で行われたその年の IADR 日本部会の年次大会でした。大学院での仕事の一部を発表させていただきました。日本大学の栖原六郎教授が JADR 会長で、会員は、当時の 7 歯科大学の教授、助教授、講師ぐらいのごく僅かな方だけで、20 人弱の先生方の前で、ふるえながら発表したことを昨日のこのように思い出します。演題申し込みも、会員の故高橋新次郎教授のお名前をお借りして、先生のお名前の後に付録? の様な形でつけさせていただいたものでした。IADR 日本部会の会員になることは大変難しく、会員になりたくてもなかなか出来ませんでした。とにかく権威のある学会であるという認識でした。1969 年にミシガン大学成

長発育研究所に Research Associate として出張したときに、1970 年の AADR の大会が、ニューヨークであると聞き、Craniofacial Biology Research Group に入会したいと思い、研究所の Director Dr. Moyers に「誰がいま CFB Group の会長ですか」と聞いたら、「自分だよ」と言われ、「入会できますか」と、恐る恐る聞いたら、「自分がサインすればよいから問題ない」ということで、すんなり IADR の Craniofacial Biology Research Group のメンバーになって、今日にいたっているところです。ニューヨークの Americana Hotel であった AADR の学会で口頭発表して、座長のシカゴ大学の Albert A. Dahlberg (故人、Dental Anthropology の教授で、高橋、三浦両教授と親交の深かった方)からの質問に答え、誉められたことは、未だに鮮明に脳裏に残っていて、学会発表を若いときにすることの意義を今更ながら深く考えさせられる今日この頃です。

さて、記念誌への寄稿であります。2001 年の第 79 回 IADR General Session の組織委員長として大会の準備、運営にあたった者として何かを書き残しておくことは責任上必要であると思ひ、準備経過を、可及的、精細に記してみることにいたしました。今だから話せると言うことも、含まれているかと思われかもしれませんが、ご容赦願いたいと思います。また、語調も記述的になってしまっていますが、お許してください。

2001 年日本開催への経緯

北米大陸外で、IADR の General Session が開催されたのは、1975 年のロンドン大会が最初である。その後、1980 年に大阪大学河村洋二郎先生が、組織委員長を務められて、大阪のロイヤルホテルで第 58 回の General Session が開催されたのが、2 回目で、大成功であった。日本部会の会長



写真 1



写真 2

は、田熊庄三郎先生であった。大阪大会開催にあたっては、日本部会の会員数を増やす必要があり、それまで比較的、closed な学会であったのに、急に会員数が約 600 人ぐらいに増加したのを思い出す。会員一人、一口 5,000 円の寄付を募って、会をサポートした。この年は、IADR の数日前に東京で、大西正男先生が、ICOB の会をホテルニューオータニで開催されている。いずれも JADR の会員数が少なく、いわゆる歯科界の国際学会が珍しかったところで、経済的には大変であったことと思われる。

2001 年東京大会誘致の始動は、遠く 1986 年、第 64 回 General Session がオランダのハーグで行われたときに、日本部会の会長だった三浦不二夫先生が日本で 2 回目にあたる General Session を東京でと話を持ち出されたことに端を発している。余談であるが、この時に初めて、日本歯科医学会会長であった日本歯科大学の真泉先生が、IADR の Council Meeting にオブザーバーとして出席された。また、JADR としても日本歯科医学会の一翼に名を連ねるために雑誌の発行をと考え、歯科評論社から出版されていた、歯科ジャーナルの数ページを割いてもらって、日本部会で発表した抄録を掲載していただいた。これらのことは、日本部会のステータス向上のため、将来への布石として考えられた三浦会長の慧眼といえよう。ただ諸事情が重なり機関誌の発行については日の目を見るにいたらなかった。

1987 年、シカゴでの大会に、常光 旭会長、佐々木哲事務局長が出席され、正式に東京での開催意志を表明した。その秋には、Central Office の事務局長 John Gray が来日し、会場候補のホテルニューオータニを視察、物価の高いことを指摘し、候補地として適性に難渋を示した。

1988 年、モントリオールでの大会で、1995 年の候補地であった、シンガポール、ソウル、東京のうち、東京は物価が高いという理由から候補からはずされる可能性が高

かった。翌年の理事会で決定するということになった。

1989 年、ダブリンで大会が開催される。大橋会長、佐々木事務局長ならびにオブザーバーとして砂田日本歯科医学会会長出席。1995 年はシンガポールで開催されることに決定される。この時に、南アフリカ国籍の入国に対する制限のあるなしが話題にのぼった。大橋会長、佐々木事務局長が再度、2001 年大会の開催に向けて立候補。イスラエルとソウルも立候補した。

IADR の Newbrun 会長から、どこの国籍の会員であっても入国が許されることが条件であり、公的な保証があることが望ましいと言われる。

このことが、JADR の理事会で検討され、1990 年 2 月 7 日付けで、外務省領事移住部外国人課に文書で外国人入国に関する保証の依頼をする。その結果、南ア国籍でもいくつかの項目について宣誓書を出せば、ビザを取得しうると言う文書入手した。この書類は、必ずしも、事態を保証するものではなかったが、一応公文書の形にして、体裁を整えてあった。

1990 年、General Session は、シンシナチで開催された。大橋会長、佐々木事務局長、砂田日本歯科医学会会長出席。ここで、イスラエルが急に、1998 年開催予定のニースの対抗馬として、鞍替えしてきたので、2001 年は、ソウルと東京だけとなった。ところが、韓国は、南アの入国の件で、保証文書が間に合わず東京が唯一の候補地となり、物価高のことが懸念されることとなった。

この時点で、JADR 理事会では、1991 年の大会時に必要なキャンペーンとして、プロモーションビデオの作成、割引パック旅行の可能性、歯科医師会その他関係団体からの支援文書の入手、事務局長 John Clarkson 招待、幕張メッセ、日本観光協会等との交渉、プロモーションパンフレット作成などをスタートした。



写真 3

歴代会長からの メッセージ

1991年、第69回大会は、アカプルコであった。佐々木会長、高江洲事務局長が東京大会誘致の資料を基に、Council Meetingで説明。事務局のSite visitを待って、1992年に決定することとなった。9月に、Central Officeから、事務局長 John Clarkson, Meeting Director Gwynn Breckenridgeが来日、施設設備などを視察する。

1992年 グラスゴー大会のCouncil Meeting (佐々木会長、作田副会長、高江洲事務局長出席)で2001年東京大会(千葉幕張メッセコンベンションセンター)が、満場一致で決定される。ただし、3年前に再度Site visitを行う旨通告される。11月IADR会長 Dr. John Greene 幕張コンベンションセンター視察。

1993年 シカゴ大会。東京大会の準備をスタートする。JADRとしての担当理事は、佐々木前会長があたることとなった。

1994年 第72回General Sessionが、シアトルで行われた。この会期中に、IADR会長 Stephen Wei、John Clarkson事務局長、Gwynn Breckenridge Meeting Director、佐々木理事との初会合がもたれる。佐々木理事から、黒田理事も陪席をするように要請があり参加する。

打ち合わせ事項メモ：

はじめに、日本側から、組織委員会の活動を開始するに当たり、2001年の東京大会開催に関して正式文書を送付して欲しい旨伝える。

日本組織委員会任務

1. 近隣部会(韓国部会、東南アジア部会、オーストラリア・ニュージーランド部会など)へのCo-hostを依頼する。
2. Social eventの計画(開会式アトラクション、Ladies programなど)
3. サテライト・ミーティング開催計画
4. Science transfer programの計画



写真4

5. スライドプロジェクター、マイクロフォン等の用意、スポンサーを捜す。
6. 業者展示計画
7. 旅行業者との連携
8. ホテルとの交渉
9. 当日の要員確保、アルバイトなど
10. Local account開設、本部事務局とは別の会計募金活動、スポンサーの確保
約3年前にCentral Officeから準備金として5,000ドルが渡されるはず。
LOCの会計は、Council Meetingで報告しなくてよい。
11. 本部事務局とはこまめに連絡を取ること

Central Officeの任務

1. 演題募集、参加者募集、登録など
2. 登録費は全てCentral Officeの会計
3. 演題選択、プログラム作成、プログラム、抄録集の印刷、発送
4. 余剰金ができれば、12%をLOCにくれる。
不足の場合；出さないように安全な予算を組んでいる。シンガポールでは、2,500名を期待しているが、予算は1,700名で組んでいる。
本部とLOCで、募金活動が重ならないようにすること。
5. 航空機については、Official Airlineを決める。

以上のような事項の打ち合わせを行った。これを持ち帰り、JADR理事会で検討し、以下の承認事項を得た。

JADR理事会の承認事項：

- 1)開催趣意書の作成(平成6年11月18日付)
- 2)作田会長が、文部省、厚生省、日本歯科医師会、日本歯科医学会へ趣意書を配布
- 3)協力業者、JTB、アイシーエス企画への交渉



写真5

- 4) JADR から 2001 年に向けて積立金(2,000 万円目標)
- 5) 事務処理は当面学会事務センターで行う
- 6) 広報活動、準備委員会の設立

1995 年 シンガポールでの General Session に John Clarkson, Gwynn Breckenridge と黒田副会長、アイシーエス企画、JTB でうち合わせ。シンガポール大会の LOC Chair Dr. Teo Choo Soo から Science Transfer Program について情報を得る。

平成 7 年 6 月 7 日付けで、山田正会長名で、日本歯科医師会、日本歯科医学会に準備委員の推薦を依頼する。

準備委員会発足。JADR から、山田 正、黒田敬之、岡田 宏、作田 守、佐々木 哲、奥田克爾、斉藤 毅、須田英明と日本歯科医師会から西村誠氏、日本歯科医学会から見明清氏により準備委員会が構成された。当面の準備委員会の位置付けは、JADR 理事会のもとに動き、連絡委員としては、黒田があたることとなる。

1996 年 サンフランシスコの IADR 会期中に、黒田とアイシーエス企画が、John Clarkson, Gwynn Breckenridge, Robert Collins と概算、学会規模、IADR からの要望について話し合いを持つ。JADR 理事会了承。準備委員には書面で報告。

1997 年 IADR オランダ。黒田、岡田、村上 JADR 事務局長幹事が、John Clarkson, Eli Schwarz, Robert Collins, Gwynn Breckenridge と Science Transfer Program のスポンサー、会場設営基本構想、業者展示の規模についてうち合わせ。黒田、須田準備委員がアイシーエス企画と共に幕張メッセ、プリンスホテル、ニューオータニホテルなど視察。

IADR 79 回大会組織委員会の立ち上げ。JADR 推薦組織委員、日本歯科医師会、日本歯科医学会推薦組織委員の

決定が、この年の先決課題であり、準備委員会の先生方にこれまでの経緯と共に、準備委員会を発展的に改組し、組織委員会を構成していただくと同時に委員長を決めていただくことをお願いした。また、以下の事項が、当面の検討課題であることを連絡して、準備委員会連絡委員としての仕事を終えた。

- (1) 組織委員会業務の明確化
- (2) ニース大会に向けてのポスター、First circular の作成
- (3) 実行委員会委員の人選、業務内容の明確化
- (4) 近隣 IADR Division への Co-host のお願い
- (5) 組織委員会の任務一予算案、寄付集め、スポンサー獲得、宣伝と勧誘
- (6) その他

1997 年 6 月 18 日付けで、JADR 会長、黒田名で、第 79 回 IADR 総会組織委員会委員長の互選の依頼を先に推薦されていた組織委員各位に郵送した。(藍 稔、梅田昭夫、大谷啓一、岡田 宏、奥田克爾、川添堯秋、黒田敬之、小林義典、佐々木一高、須田英明、中村 亮、茂呂 周)

7 月 8 日期限で、全委員より、互選書類が集まり、結果として、黒田が、組織委員長に選出された。

以上が、組織委員会立ち上げまでの経緯である。組織委員会の議事要旨の抜粋、1998 年ニース大会での Central Office との打合メモ、1999 年ヴァンクーバーでの打合メモ、1999 年 6 月 Central Office からの Site visit 時のメモの抜粋を以下に記しておく。

第 1 回 1997 年 10 月 13 日

1. 会議運営業務をアイシーエス企画に、旅行、宿泊業務を JTB に委託。
2. 副委員長岡田教授、財務担当須田教授、庶務担当大谷教授
3. 積立金管理 “2001 IADR” 銀行口座へ
4. A/NZ, SEA, KADR, Chinese Section へ Co-host 依頼
5. 経費概算、職務内容、Japan Night の性格 (Central Office-GC 発信)
6. Quitesence の第 4 回 国際大会 と IADR Science transfer program
7. 参加見込み数 国内 3,000、海外 2,000 名
8. 歯科医師会からの補助金交付申請
9. 募金受け皿を、国際観光振興会に依頼

第 2 回 1998 年 2 月 23 日

1. 本部への参加予定人数は 3,000 名に修正報告
2. 募金、広報、企画プログラム、会場運営、宿泊旅行、接遇、登録、展示の各小委員会を設置
3. ポスター、サーキュラー、日程の決定
4. 募金戦略、主催、後援団体、協賛団体
5. GC からの記念シンポ共催の申し入れ

第 3 回 1998 年 6 月 8 日

1. GC 記念シンポは、委員改案は Dental Material Group のシンポジウムを GC がスポンサーとなつて行う。本部は GC 案を前向きに受け入れる。



写真 6

2. ニース大会プロモーション
3. 国際観光振興会へ寄付募金募集要望書提出、審査中
ニース大会での本部との打ち合わせ

1. 収入、支出計画書の本部への提出
2. GC シンポについては、本部としては特別会費を設定して受け入れる。
3. 幕張再視察日程

第4回 1998年8月24日

1. IADR 会長、作田先生より Eli Schwarz 事務局長と LOC とのコミュニケーションが良くない、不信感を持っているようであるので、誤解を解くようにと助言
2. John Clarkson 時代の打ち合わせの書簡のやりとりを Eli Schwarz に送付。連絡無し
3. ニース大会の報告

第5回 1998年11月30日

1. Co-host Division からは、会期中にそれぞれの Council Meeting Room を用意して欲しいとか、15～20のポスターボードを用意して欲しいなどの注文があった。
2. GC の取り扱いについて、委員から LOC としては好ましくない(他の業者との兼ね合いから)との意見あり。本部任せとする。

第6回 1999年1月29日

1. 募金活動の行動計画
2. 本部の考え方のずれについてのすりあわせ。

ヴァンクーバー大会での本部との打ち合わせ

1. Schwarz より、業者展示は、日本歯科商工会の運営によるものとして欲しいと要請クインテッセンスからの1000万円の寄付はなくなることは承知一本部主催では赤字になるとの理由
2. GC は木曜日、土曜日に4 Session を行い、一日、2日券を発行。
3. 登録料は、230 \$? 300 \$? 未定
4. 下見は6月

第7回 1999年5月25日

1. 業者展示の方法
2. GC から1200万円の保証
3. LOC の責任業務の確認(開会式アトラクション、LOC 前夜祭、コンGRESバッグ、日本語ミニプログラム、大学ツアー、Ladies program)

本部 Site visit 6月8日～10日 報告

1. 幕張メッセ視察、JDTA、モリタ、クインテッセンスと会合、ICS と打ち合わせ、幕張プリンスホテル下見、ホテルニューオータニ下見
2. ホテル不亂櫓、ホテルグリーンタワー、マンハッタンプリングス下見、ライオンと打ち合わせ
3. ICS と打ち合わせ、LOC、IADR と ICS の契約書を作ることを指摘

JTB と打ち合わせ、GC と打ち合わせ(同時通訳等諸費用 GC 持ち)

第8回 1999年8月27日

1. 業者展示については、JDTA 側から拒否。ミニ展示の形で、スペース活用の程度で開催することにする。規模縮小
2. 本部では、近辺のホテルがの部屋数不足を指摘し、まだ、開催地の変更の可能性を言ってくる JTB をブッシュ
3. Site visit 中に本部よりの質問に対する返事
 1. JADR 2001 の Host として JADR のもとにあるのが LOC
 2. JADR の積立金の家1,500万を IADR に寄付、残金は、LOC と ICS の契約 JADR 独自のプログラムなどのための基金とする
 3. LOC も IADR 同様 ICS と独自の契約を結ぶ
 4. LOC と IADR はそれぞれの契約にもとずき ICS に支払う
 5. JNTO 経由募金は国内でのみ消費する

第9回 2000年1月31日

1. ポスターボードはライオンでスポンサー 300～350万
2. SEA、KADR、A/NZ Division へのキャンペーン活動
3. 経団連を通じ募金活動開始(目標1500万)
4. ワシントン大会プロモーション、国内プロモーション
ワシントン大会での本部との打ち合わせ

1. 業者ブース代一コマ(3.6 m × 3.6 m) 2,000 \$
2. 募金活動状況
3. ICS と IADR の契約の見積もり

第10回 2000年4月24日

1. 日本歯科医師会、日本歯科医学会役員交代があったが、藍、梅田委員の継続。日本歯科医師会財務理事の赤司先生を準備委員会財務担当に追認
2. 開会式アトラクションー和太鼓など
3. 千葉コンベンションビューローの企画協力

第11回 2000年9月11日

1. 日本歯科医師会から、赤司委員の後任に内田祐丈先生、日本歯科医学会から新に金子讓先生が組織委員に参加
2. 日本歯科商工会からの寄付200万円
3. シンポジウム14題、Hands-on Workshop 2題、Lunch & Learning 35題採用
4. Japan Night 招待者、GC と本部できめる
5. 大会中の大学訪問、東京歯科大学と東京医科歯科大学とする
6. Lion Award 設定第1回のためパーティ開催
7. JADR に会長 Marjorie Jeffcoat と財務理事 John Stam が来日、幕張視察
8. 千葉コンベンションビューローからのサポート：130万円寄付、海浜幕張駅前の電光掲示板広告、インフォメーションセンターに、職員2名配置、木更津太鼓開会式余興、着付け、見晴園茶会、折り紙などを Ladies Program として用意、謝礼スポンサー Lion
9. 日本歯科商工会員に個別寄付依頼

第12回 2001年2月6日

1. 商社展示用案内日本版作成
2. 本部の参加見込みは、予算上の1700名より多い4000名を期待している
3. JAL 100,000円寄付 + Official Airline としての契約 (無料航空券ビジネスクラス4枚、半額航空券4枚、割引券の提供)
4. 募金活動 21,050,000円(現在)
5. 喫煙対策
6. 国内プロモーション
7. 新聞クイント、Japan Times の利用
8. 商品のサンプル輸入の制限
9. 開会式に獅子舞追加

第13回 2001年5月14日

1. 最終募金予定 33,985,000円
2. 学会終了後、LOC宛の寄付の残金は、全額JADRへ
3. GCは本部へ15,000,000円寄付、LOCには、日本語プログラムへの広告代
4. 開会式、President Receptionへの日本側招待者リストを本部へ送る。招待者は開会式で前方の席へ座席を用意
5. Japan Times 掲載の費用は花王とサンスターに依頼

IADR 学会は、2001年6月26日から6月30日まで開催された。学会期間中6月28日(木)、30日(土)には、

GC株式会社80周年記念シンポジウムが、幕張メッセでIADRとの併催事業として行われた。また、6月27日には、IFDEA、JADEおよびSEAAD主催で、幕張プリンスホテルにおいてサテララトシンポジウムが開催された。さらに、7月1日から3日には、上総アカデミックパークにおいて、IADRのPulp Biology Group主催によるサテライトシンポジウムが開催された。

第14回 2001年8月15日

1. 会計決算報告
2. 本部への決算報告
(以上2件については、JADR保管の資料にあるので必要な方は参照されたい。)

組織委員会の会議は、この第14回をもって終了、委員会を解散した。

本学会開催にあたっては、アイシーエス企画の坂東さん、西野さん、千葉コンベンションセンター岩田さん、大川氏のご協力によるところが大であったことを特にここに付記しておきたい。

準備段階から終了までの間、いろいろなことがあった。なんと言っても最大の難事は、予算案では約4,500万円の赤字であったことである。

Board meetingでは、就任直後のExecutive DirectorのEli Schwarzが、「どうしてこんなに高い場所を選択し



2001年6月27日千葉幕張IADR開会式
太鼓のエキジビションがおこなわれた。



開会式 Dr. Marjorie Jeffcoat 会長による挨拶。



開会式 獅子舞・七福神と歓迎の横断幕



着物の着付けショー



折り紙ショー



お茶会

歴代会長からの メッセージ

たのだ。今からでも、変更して別の場所で開催すべきである。」と発言していた。LOCとしては、経団連を始め、多くの事業団体へ、寄付のお願いに奔走した。特に、財務担当の須田英明先生、庶務担当の大谷啓一先生には、お忙しいなか、足を棒にして挨拶回りにお付き合いいただいた。心から感謝申し上げたい。当時は、不況のまっただ中にあり、どの企業も大変厳しい状況であったので、なかなか募金活動は思うに任せない状態であった。大企業から、1,000円のご寄付をいただき、ありがとうございますと帰ってくる時のむなしさは忘れられない。Central Officeも予算を見直し、削れる出費をできるだけ節約してくれたお陰で、結果的には、IADRとしては、約2,600万円の黒字とすることができた。考えてみると、JADRからの毎年の積立金が、1,500万円あったことが、今大会を成功に導いた大きな要因であったと考えられる。JADR理事会、評議員会ならびに全会員の絶大なるサポートに、心から感謝の意を表したい。

Plenary lecturerとして、大阪大学総長岸本忠三先生、川崎医科大学教授梶谷文彦先生お二人の講演をいただくことができた。また、JADR岡田会長主導のもと、JADR主催の二つのシンポジウムが多くの参加者を国内からも吸引し、大成功であったことは、学会のあり方を示唆する意味でも重要なポイントであった。

文部省、厚生省、日本歯科医師会、日本歯科医学会、東京都歯科医師会、千葉県歯科医師会、日本学校歯科医会、日本歯科衛生士会、日本歯科技工士会、加えて、54におよぶ関連学会さらに、日本歯科商工会の協賛を得たことも有り難いことであった。

会期中に、大阪の入国管理局から電話があり、モンゴルから、数名の者がIADRの学会に参加するといつて入国しようとしているが、不法入国の疑いがあるので問い合わせがあったことにも驚かされた。モンゴルからの留学生に問い合わせたが、不明であり、強制送還されたものと思われる。

Ladies programも、着付け、折り紙、お茶会、書道、見浜園ツアー等会期中ほとんど満席の状態であった。

近隣大学見学ツアーも、東京歯科大学、東京医科歯科大学のご協力を得て、盛会裡に終了できた。

2001年IADR Reports Vol 23-1に載った、President Graham Emberyの挨拶の抜粋をもって、本記念誌への寄稿の筆を止めたい。

“A long with many IADR Members, I have now arrived back from Chiba invigorated by a high level of science and hospitality “par excellence”. From comments made to me and from my own perception of the Chiba meeting, it can only be regarded as a great success. Congratulations must go to the Local Organizing Committee and to all members of the Central Office Staff, who performed such an excellent organizational event for us.”

JADRの思い出

JADR 名誉会員(1999～2000年会長)

大阪大学名誉教授
岡田 宏



JADRの事務局長にとの依頼が東北大学の山田先生(JADR会長、1995～1996)から有り、一瞬「私が?」と自分の耳を疑いました。しかし私でも何かのお役に立つのであれば厭わずにお役を引き受ける歳にもなったと思い直し、覚悟を決めました。山田先生のお名前はよく存じてはおりましたが、それ迄先生とはほとんど面識がなく、ただ15年前の1980年に河村洋二郎先生(大阪大学名誉教授)が大阪で主催されましたIADR(International Association for Dental Research)総会で、私がある頃大阪大学に帰任した事もあって、専門外の領域のchairmanを仰せつかり、山田先生の教室からの演題をDr. W. Loescheと担当致したことがありました。先生とはその事だけが直接の接点でしたので不思議なご縁を感じたものでした。

事務局長を引き受けますや否や、山田先生から「作田 守先生(当時大阪大学教授)をIADRのVice-president候補として推挙したい。JADRで応援する」と言われてこられました。正直、大変な時に事務局を担当させられ、何かに嵌められた思いでした。当時私はIADRのNominating Committee(各国からのVice-president候補者を選考して数名に絞ってIADRの理事会に推挙する委員会)の委員を勤めていました。そんな事情からIADRは国際学会なのだから本部役員もいつも欧米からではなく、アジアを含む国際色豊かなものになってほしいという夢のような希望を抱いていました。しかしVice-presidentに当選する事は並大抵では無い実状もよく理解しておりましたので、作田先生に立候補願っても果たしてJADRが後押し、目的が果たせるのか?大変不安でした。

先の見通しが皆無でした。楽天的な山田先生、アバウトな私。その御神輿に乗られる作田先生には大変申しわけなく思いました。しかし作田先生を候補者として担げば、曲りなりにもJADRに一つの努力目標を設定する事になり、JADRの会員数の増加に繋げて行けるのではないかと。作田先生にはお叱りを受けるような発想が私の脳裏をかすめ、こうなった以上はただ我武者らに走るだけと決心いたしました。結果は先生のそれ迄のIADRでの御活躍(とりわけIADR Strategic PlanのTask Forceでのメンバーとしての御活躍が本部役員の注目を引いたものと思っています)があり、さらに会員皆様のご支援が有って見事にご選下さいましたので、それは単なる杞憂に過ぎず、私も切腹を免れました。

私がJADRのメンバーになったのは昭和48年の宝塚での第21回、JADRの総会でした(これも山田先生と時を同じくするようで、山田先生とは不思議なご縁を感じま

す)。当時の学会は貴族的、サロンのな雰囲気、閉ざされた学会との様相が強く、その上専門的な学術的興味は自分が所属する専門学会には及ばないという感じでした。そんな印象を持ったものですから、それ以降はJADRに参加する機会がほとんどなくなっていきました。しかし自分が所属するPerioの国際学会(International Conference for Periodontal Research, ICPR)は歴としたIADRの分科会であり、その為に1992年大阪で私がICPRを主催した時には、当時のJADRの事務局長の高江洲先生(東京歯科大学)にJADRを代表してご来臨頂き、歓迎のご挨拶を頂戴いたしました。そんな事も有り国際的な研究活動は歯科医学においてはJADRを基点としてIADRないしはその分科会で御活躍いただくものだと確信しておりました。

JADRはそのような位置に有りながら会員数が少ないのは皆さんにとってJADRやIADRについての情報不足だけではなく、学会自体に魅力が乏しいからだと感じておりました。JADRは歯科医学の総合学会で有りながら、それが魅力無く興味が湧かないのはJADRの運用に原因があるように思いました。たとえば総合学会でありながら専門領域の研究の単なる寄せ集めで参加者の知的興味をそそる様なプログラム構成でないことも原因の一つと思いました。JADRを歯科医学の研究者にとって専門を超えて学術的に魅力の有る学会にする事が引いては作田先生を後押しする事だと確信した次第です。山田先生以下、私が在任した期間、素晴らしい理事のメンバーに恵まれました。皆さんが目的を同じくして対処して下さい、この所期の目的の達成に向けてスタートが切れましたことは幸せでした。そして今日のJADRの発展がもたらされたものと自負しております。しかし私達JADRの歴史的発展過程の一時期に携わっただけでその成果の総てはこれまでJADRにかかわってこられました先生方に負う所が大で、深く感謝しなければならぬと思っています。

以下、JADRのターニング・ポイントとなった項目(我田引水的なものかもしれませんが)を記して簡単に思い出を綴ってみたいと思います。

1. Newsletter for JADRの発行

これはIADRが年4回発行しているIADReportsを真似て年2回発行致しました。単なる報告ではなく皆さんの知的刺激になるような内容を盛り沢山とし、事務的報告は簡単に止めました。JADRは国際学会、IADRやその分科会で活躍する起点の一つである事をお知らせするためにIADRやJADRの学会活動内容を会員の皆さんに衆知するよう勤めました。そしてその内容をより学術的に魅力溢れるようにと関連する国際学会の活動内容なども鋭意盛り込みました。又若い研究者の皆さんに関心を持っていただくようにと、IADRの学会活動報告を若い先生に依頼したり、若手研究者向けのIADRの学術奨励賞は漏らさず案内したりいたしました。そして時には科学する楽しさを提供したく、鈴木不二男先生(阪大名誉教授)に「硬組織形成機構に関する一断章」、久保木芳徳先生(北大教授)に「オランダ

科学の伝統と歯科医療改革—日本が学び残している国」と言ったタイトルでご執筆いただいたことも御座居ました。Newsletterを介して各大学の評議員の先生方にJADRの宣伝をお願いしました。とにかく会員増に繋げたいとの思いでした。

この思いはIADRの事務局長、Dr. J. Clarksonにも認められ、1996年Washington DCで開催されましたIADR後援の国際シンポジウムで彼にお逢いした時、私を彼のスタッフにJADRの傘上げに頑張っている事務局長と紹介してくれました。NewsletterはJADRの活動を知らせる目的でIADR本部にも送付致しており、彼が日本語が読める筈は無く、外交的賛辞とはいえJADRの運用に関心を持ってきていたことに感激しました。そこでNewsletterも目次だけでも英語で書かねばならないと反省した次第でした。現在目次は日本語と英語が併記している所以です。

2. 会則の改正、日本学術研究団体への登録など

JADRはIADRの日本部会としてIADR本部会則がそのまま適用されてきました。そして日本語版の会則はJADR付則として簡単なものが有ったに過ぎません。そこでJADRの発展のために本部の会則を準用しながらも独自の会則を作成する事に致しました。会が更に発展するためには学会運用の実情に即して会則は適宜改訂を行う必要があります。昨年改訂が行なわれた事は学会の発展の上からも大変嬉しい事でありませぬ。

JADRの基盤は各大学および研究所に有りますが、また専門分科会に所属する研究者グループも組織出来れば嬉しい限りです。前者は評議員制度を設けて組織化されていますが、後者は今後の課題かと思われませぬ。

JADRは学会独自の機関誌を持たない事から日本歯科医学会の専門分科会としても認知されてきませんでした。諸先輩のご努力が実り、日本歯科医学会の国際関係支援団体として認知され、財政的な支援を継続して受けて参りました。諸先輩のご努力に敬意と感謝を申し述べねばなりません。しかし、Newsletterの発行も有り、J. Dental ResearchがJADRの学会機関誌ですので、平成11年(1999)には日本学術会議の学術研究団体として認知され名実共に我が国における学術研究団体のなかに歯科医学の総合学会の地歩を築いたものと考えませぬ。

3. 若手研究者の奨励賞推薦基準の作成

例えばJADRからのHatton賞候補者の推挙に当たり、公平に審査できるよう、研究内容などの評価方法を基準化し、審査はこのマニュアルに従って理事全員が審査委員となって行われています。将来JADR独自にも若手研究者を育成奨励する制度が導入されればと願っています。

4. JADR総会を歯科医学発展のマイル・ストーンに

夫々の専門分野の研究者が他の専門分野の研究から知的に刺激され、自分の専門分野を多面的総合的に俯瞰する、そんな発想思考が構築できる魅力的な口腔科学会へと脱皮

歴代会長からの メッセージ

したいとの想いでした。私の卓上には今、第53回 JADR 総会の案内が広げられています。JADR の今日の発展を目の当たりにする想いです。

この様な JADR の発展は皆様のご努力の賜物と感謝すると共に今後も更なる発展を願う次第です。

そこで蛇足ですが、私が JADR の会長を辞した時、「感謝と期待」と題して Newsletter に投稿した文章の末尾を一部加筆修正して以下に再録させていただき、JADR の今後の更なる発展を期待したいと思います。

[顎顔面口腔領野の病気や生理現象が色々な他の専門分野の研究者にも興味を持たれ、それが科学する情熱と喜びの対象となり、本会(JADR)がそれらを熱っぽく、それぞれの専門の立場を超えて語り合える学問研究の場となれば、口腔科学が一段と飛躍発展することでしょう。その時にそれは間違いなく健康科学や生命科学の一翼を立派に担うものと期待されます。]

益々のご発展を祈念して擱筆します。



節目での思い出

2001～2002 年会長
東京歯科大学教授
奥田 克爾



1. IADR 日本部会報・Newsletter から

国際歯科研究学会日本部会の部会報は、1973 年からスタートしている。役員として下記の先生が担当されておられた。

President	河村洋二郎
Immediate past president	榎 恵
Vice-president	川原 春幸
Councilors	大西 正男 須賀 昭一
Executive secretary	船越 正也
Secretary treasurer	田熊庄三郎

このメンバーにおける第一回 Council Meeting では、具体的運営事項を規定する Bylaw 素案づくりを開始したと記載されている。IADR 日本部会発足から 21 年目にあたり、会費も 500 円から 1,000 円に値上げされている。会計報告から推察すると会員数約 100 名で、第 21 回日本部会は宝塚ホテルで開催されている。会計支出報告に拍子木 4,000 円とある。国際学会での発表終了合図が、拍子木であったのか、日本部会の歴史を感じる。

1975 年から 4 年間大西正男先生が会長になられ、会費も 2,000 円に値上げされている。会員数も 290 名と増え、1976 年日本歯科大学での 24 回総会での演題は 50 で参加者は 222 名であった。また、IADR の Science Award 受賞者に、河村洋二郎先生と田熊庄三郎先生が選ばれておら

れる。

1979 年から田熊庄三郎先生が会長を務められた。そして、1980 年にその数年前から河村洋二郎実行委員長をはじめとして準備してこられた第 58 回 IADR 大阪大会がローヤルホテルで、6 月 5 日から三日間開催された。出席者数 28 カ国から 321 名、日本人 1,021 名と記録されている。当時 IADR 日本人の会員数は、600 名でアメリカ合衆国、イギリスに次いで 3 番目となっている。

1981 年からは森 政和先生が会長を務められ、この年に IADR, Japanese Division が Japanese Association for Dental Research と改称された。そして、日本からの IADR への参加者も増加の一途であった。1982 年第 30 回 JADR 記念大会には、当時の IADR 会長 A.H.Melcher 博士の特別講演などがもたれた。また、この年から Newsletter の発行がスタートしている。

1983 年から須賀昭一先生が会長に就任され、正会員は 671 名になっている。第 31 回 JADR 大会は、出題も 100 題となり発表も 2 会場となっている。

1985 年からの詳細は、歴代 JADR 会長の依頼原稿で把握頂くことができます。JADR Newsletter は、それまでの事務局が、事務局長の先生の講座などに置かれていたためもあって、残念ながら発行されなかった時があった。そのような反省を踏まえて 1995 年から JADR 事務局は、学会センター内に置かれることとなった。それ以降の Newsletter は、きちんと発行され管理されている。現在は、〒532-0011 大阪市淀川区西中島 5-5-15 新大阪セ



写真 A. 幕張大会歓迎会では、黒田 LOC 会長の発声での鏡割り。大会を通しての盛り上がった IADR のスタートになった。



写真 B. 幕張大会 Japan Night 参加者を迎える GC 中尾 眞社長と JADR 奥田克爾会長ご夫妻。

ントラルタワー 8F (株)コネット アカデミック プラザに事務局がおかれ、JADR 役員を含むすべてが、多くのエネルギーを学会の活性化に繋がる運営と研究に使えるようになってきたと確信している。

2. 事務局長として

JADR は、1995 年の第 73 回 IADR Singapore 大会をコホストした際、日本からの発表演題数が部会単位で最も多かった。また、IADR の Vice President に作田 守先生が当選され IADR 会長を務められる事になった。そして、IADR 各種委員会に多くの JADR メンバーが加わり、さらに IADR の Award 受賞者も枚挙にいとまがないようになった。そのような中で、2001 年第 79 回 IADR 幕張大会開催が決まり、当時の JADR 会長黒田敬之先生が Local Organizing Committee を立ち上げられた。その気運の高いおりに、岡田 宏 JADR 会長の下で事務局長をやらせていただき、Newsletter などを担当していた。岡田会長は、「歯科医学は、口腔、顎顔面に基盤を置く健康科学であり、この領域における生命現象や生物現象を考究する学問であり、その研究成果が生命科学や健康科学に貢献するものでなくてはならない領域科学である。高齢化社会での生き甲斐を創造する科学としての位置も付加される。」などと、当時の Newsletter に JADR への熱い思いを書かれておられる。私は編集に際し、多くの会員に原稿を依頼し、IADR 大会の報告などを受けた。類似した記載を避けるために、勝手に省いた。そのため、報告者の告げたい意図がぼやけるという批判をうけた。あらかじめ、その旨を伝えていなかった自分の勇み足として反省すると共にお詫びを申し上げたい。

3. 第 79 回 IADR 幕張大会

「幕張大会を成功させよう」が JADR の合い言葉の 2001 年、2002 年会長をやらせていただいた。自分の人生で JADR 会長のときが最も自分が成長したと考えています。学ぶことばかりの 2 年間でした。IT 時代となり海外との交流や情報収集などは、想像を遙かに超えるスピードで簡単になされるようになった。しかしながら、研究者同士が直接討論することの意義は高く、学術大会のサポートに努めました。

IADR 幕張大会は、Local Organizing Committee 委員長の黒田先生はじめ献身的な働きで大成功でした。このことは、多くの先生が書かれ、記録もありますので、ホストであった会長として成功裡に終えたことの感謝でいっぱいであるとだけ書かせていただくこととした。

IADR 大会においては、Japan Night が開催される。スポンサーは GC 株式会社である。IADR メンバーには、Japan Night は格別料理が素晴らしいという評価がなされている。来場者には GC 社長中尾 眞ご夫妻が笑顔で迎えてくださる。

4. さらなる IADR との連携強化

JADR の IADR における役割に加えて、日本歯科医学会での立場などから、現在の会則に変更させていただいた。IADR は密接な連携を強化するなどの目的から、IADR だけでなく JADR の会計納入なども一括でなされることになった。また、Japan, Korea, China, South East Asia, Australia/New Zealand が Pan Asia-Pacific Federation (PAPF) の設立に向けた準備を進め、2003 年第 81 回 IADR Gothenburg 大会で承認され、会長に安孫子宜光先生が就任された。2006 年の第 86 回 IADR Brisbane 大会での第一回 PAPF 大会が開催されることになっている。

5. 第 50 回 JADR 総会、学術大会、記念式典

2001 年 Newsletter の第 2 号に、大会長をお願いした故古賀俊比古先生は、「2002 年 JADR 総会は 50 回目という記念すべき大会ですので、多くの会員の皆様ならびに関係者の方々のご参加をお願いいたします。」書かれた。ところが、次の Newsletter では「古賀俊比古理事の急逝の悼みを超えて」を JADR 会長として書くことになってしまった。今もって、痛恨の極みである。

急遽、第 50 回 JADR 大会長を渡辺 誠先生をお願いした。そして、古賀先生が播かれた種の芽を開花されている先生にスピーカーをお願いして、「古賀俊比古先生メモリアル・シンポジウム」を組んでいただいた。渡辺先生には、学部長のご多忙にもかかわらず、公開講座、シンポジウム、特別講演など盛り上がった記念すべき学術大会を成功させてもらい、いまもって感謝でいっぱいである。その招待特別講演者であった E.T.Lally 教授は、第 82 回 IADR Hawaii 大会で A Tribute to Toshihiko Koga シンポジウムを企画され、私も司会を務め Mutans 関連研究の将来などを討論し、PubMed などで古賀先生は不滅であり、いまだに私たちに語りかけておられることを実感した。

古賀俊比古先生のことに関しては、逝去される前に 2000 年の Journal of Dental Research, Vol. 79, 7-12 において DISCOVERY! 欄において、The Road to Preventive Dentistry —The Personal Scientific Experience of Japanese Dentist が掲載されている。う蝕細菌学の第一人者である古賀先生が歯周病原性細菌についても世界をリードする分子生物学者であることを知ることができる。



写真 C. 古賀俊比古理事。

歴代会長からの メッセージ

JADR50周年記念式典は、大浦 清 JADR 副会長の企画でなされた。大浦先生の司会で IADR 会長 John Clarkson のメッセージがあり、お招きした歴代の JADR 会長をなされ、今日の隆盛に尽力された名誉会員の河村洋二郎先生、三浦不二夫先生、作田 守先生、山田 正先生からエピソードを交えた感銘深い記念講演を戴いた。私たちは、さらなる JADR、IADR での活躍を願っておられる先人の期待を裏切らないように努力していかなければならない。そして、世界に羽ばたく若い歯科医学研究者の輩出を支援できるように頑張りたい。



想い出と感謝

2003～2004 年会長
日本大学松戸歯学部教授
安孫子宜光



想えば、1980年に恩師の滝口久先生から IADR、JADR に入会するように命じられて学会員にして戴きました。当時、IADR 学会会員の申請には、まず JADR に会員としての資格の評価を受ける必要がありました。今でもよく覚えています、具体的には論文発表が2つ以上あって、できれば国際論文、また学会発表も国際学会が望ましい、という内容だったと想います。また、学内で著明な学会員の教授の推薦もお願いする必要があつて、それらの書類を揃えて申請書を出しました。幸いに Journal of Dental Research にいくつか論文があつたのと、すでに IADR 総会で数回発表してましたので、無事に学会員になることができました。当時 IADR 会員登録に申請されたある臨床系の先生が、要求されている業績が不足で入会を却下された大変憤慨されていたので「していただいた」という表現はあながち大げさではなかったのです。学会員になってからは、JADR、IADR の総会、大会に毎回参加するようになり、また JDR の Editorial Board (1997-2000) としてお手伝いさせていただいてはりましたが、学会の会務運営には正直いってほとんど無関心でございました。その後、1996年に評議員になり、岡田 宏 JADR 元会長からお声をかけていただいて1999年に JADR 理事会の末席に加えていただきました。また、第48回の大会を松戸で開催する機会を与えていただきました。これを機に元 IADR 会長の作田 守先生、現 IADR 会長の黒田敬之先生、岡田宏先

生、前 JADR 会長の奥田克爾先生、理事会の諸先輩から IADR の実体、IADR Division としての JADR についての意義など多くのことを勉強させていただきました。その後、2001-2002年の間、事務局長、そして2003-2004年の間、会長を務めさせていただきました。

就任当初、事務能力に欠けている小生には余りの大役に重責を果せるか心配でございました。会長任期中の大きな出来事としては、IADR/JADR 会費の IADR central office での一括徴収の執行、Program book、CD-ROM Abstract 配付のみになり、従来の学会誌 Journal of Dental Research 通巻の Abstract book は廃止、Pan Asia-Pacific Federation (PAPF) の設立、そして日本学会事務センターの破産などがあり、目紛しく時が過ぎたというのが実感であります。なかでも学会事務センターの破産では、何度か破産管財人の会議に出席したりしてかなり苦労いたしました。財団法人日本学会事務センターが各学会からの預かり金を運用に流用していたことが発覚し、その後、民事再生法への申請を行いました。結局、却下されて事実上倒産ということになりました。何千万単位で損失した学会もありました。幸いなことに3年前に監査の亀山洋一郎先生が、学会運用に必要な金額を残して JADR の銀行口座に移す事を提案して下さい大きな損失から免れました。改めて亀山先生に感謝申し上げます。

任期中、正直申し上げて、IADR 総会での Council meeting、各種委員会行事の出席、JADR の事務処理を何とかこなすのが精一杯で、これまでの会長先生から引き継がれてきた想い、とくに総合歯科医学の国際学会 JADR のさらなる発展にどれだけ寄与できたか甚だ不安に感じています。

会長として、いろいろ経験させていただいて、今もつとも感じますことは、IADR Japanese division としての JADR の存在と国内における JADR に対する認識の余りに大きいギャップであります。IADR 総会の Council meeting、諸行事、委員会に出席いたしますと、紛れもなく JADR は日本の歯科研究界の代表であり、AADR とともに、歯学研究の国際社会のなかでリーダーシップをとらねばならない重い責任を感じます。国内的には、JADR は日本歯科医学会の専門分科会ですらないのが事実でありながら、一旦 IADR 総会で世界にでますと日本の代表としての重責を負わねばならない、という違和感があるのは否定できません。この違和感の解決は、短期的には困難であります。JADR 設立の50周年を迎え、JADR が歯科医学関連学会を統括する国代表として国際的に活動できるよう具体的に考えていかななくてはならないと感じます。

JADR への期待

IADR から JADR へ期待すること

IADR 会長、東京医科歯科大学名誉教授
黒田 敬之

大谷会長、奥田編集委員長お二方からのご依頼ということで、表記の題で原稿を書くことになりましたが、大変おそれ多いことだと思っております。

IADR が現在抱えているいくつかの悩みにつきましても、JADR ニュースレター 2005 年 2 号に書かせていただきましたが、とくに、JADR との間にある問題ということではありませんでした。

誰かに、何処かに、なにかを期待するといった類の原稿は、つい、口幅ったい表現になりがちで、JADR 会員の先生方に、響感を買う結果になるような気がして、正直に言って、気が重いところですよ。むしろ逆に、JADR から IADR に期待するものということで、先生方からの率直なご意見がいただけたらと思います。しかし、立場上、ご依頼を受けた以上は、何か書く義務がありますし、これまで長い間 JADR、IADR に関係して来た者として、自分が感じていたことを率直に書かせていただいて、将来、何年後か、何十年後か分かりませんが、この記念誌に目を通された方々が、2005 年頃にこんなことをいっていた男がいたんだとお笑いただければよいかという気持ちで責めを負うことにしたいと思っております。

ご存じのように、JADR が設立されたのは、1954 年で、IADR の Division としては、AADR、British Division について 3 番目の Division であり、現在は、AADR のつぎに会員数の多い Division になっております。しかし、JADR の会員数には、他の Division と一寸違った特徴が見られるように思います。それは、極めて、流動会員が多いことでしょうか。“国際学会”と名の付く学会が海外で行われるときにみられる共通の問題点かも知れません。海外に、学会を機会に出かけ、楽しい思い出を作ろうとする動機が国際学会参加のかなりの部分を占めているからでしょうか。北米大陸での IADR、2 年～3 年に一度の北米大陸以外の国で開催される IADR への日本からの参加者、発表者は、他の Division の人が驚くほど、多く見られます。主催者としては、常に日本からの参加者の数を気にし、期待するところです。JADR への参加者、発表者数と比べると、海外の方が多くはないかと思われることがあるほどです。とくに、大学院や、若手の研究者には、IADR での発表と海外旅行がセットになって、魅力のある学会になっているのかもしれない。問題は、発表が終われば次の年から会員の更新はしない方が大変多いことが、流動会員が多いということになるわけです。IADR は 1 年ごとに更新で、期限までに更新しないと自動的に退会と見なされ

てしまうので、つい忘れて、次の会員としての連絡の無いまま、自分でも会員のはずだけど、どうなっているのだろうと思っている方もいらっしゃるようではありますが、更新をしない会員が日本は圧倒的に多いことは驚くほどです。毎年の新入会員数の 70 % ぐらいは、(もったくもしれません)更新をされないのではないのでしょうか。それでも今のところ、1900 から 2200 名の間を増減しているというのが実状でしょう。2000 名という枠が、以外に大事なことでして、ご存じの Hatton Award の各 Division への割り当て人数が 4 名になるか、5 名になるかの境界線だからです。(1～100 のメンバーから 1 名、101～3000 のメンバーでは 500 名ごとに 1 名増、3000 名以上は、1000 名増ごとに 1 名増)できるだけ多くの若手の研究者が、世界に認められる場としては、絶好の機会だと思いますので、会員数の拡大は大事な課題ではないかと思えます。それには、29 大学の教官、少なくとも、歯学部長、歯科大学長、教授の方々には、会員になっていただかないことには、始まらないと思えます。恐らく、日本だけではないのでしょうか、研究機関のトップの会員数が少ないのは。他の Division では、それぞれの Division Meeting 時に相前後して学部長会議とか、歯科大学学長会議とか、いわゆる教育学会議が開催されています。2001 年には日本でも、はじめて、その試みがなされたわけですが、その後はまた元に戻ってしまっているようですね。日本では、それぞれの分野の学会が、重要視？されているからでしょうか。それとも、トップの先生方にとって、海外の研究者との接点を求めることの意義が少なくお考えになっているのか。実に海外の研究者にとっては誠に理解しがたい状況です。自分達の教え子や同僚の研究を、国際的に評価してもらう事への関心が薄いといわれても仕方がないでしょう。たしかに、硬組織分野での、米国の骨代謝学会とか、歯周病や、免疫学分野の国際歯周病学会？のようなその分野での評価の高い学会もありますが、他の多くの学会では、そのような対比する真の意味での国際学会が他にあるのでしょうか。歯科関係の雑誌でもっとも高い Impact factor をもつ、Journal of Dental Research の母体学会に対してもう少し積極的に目を向けていただけないものかと思えます。魅力がないということであれば、自分達で、会員となり、会の評議員会や理事会の構成員となって、新たな魅力ある学会への脱皮を企画していただければありがたいと思えますし、そのための役員選出規定も必要であれば改訂していくことを現 JADR 執行部も考えられたらいかでしょうか。確かに、日本部会誕生のいきさつや、その後、30 年近くのメンバーへの入会資格の厳しさへの反発が(現各研究機関のトップの方々から歯科大学卒業前後のころでしょうか)、尾を引いているのかも知れませんが、失礼な言い方ですが、“井の中の蛙”になる可能性が、あるような気がしてなりません。

もう一つ、お願いしたいと思えます。それは、ようやく、今年度の JADR の Unilever/Hatton Award Travel Award Competition から始められたことですが、英語での口頭発

表をするようにしていく必要があると思います。どこの Division でも、口頭発表を含め、Official language は英語ということで、みんな頑張って発表しています。若い先生方は、これまでの日本の研究者と違って、英語で話すことに対するアレルギーは、少なくなりつつあるように思いますし、上手、下手、流暢かどうかという次元ではなく、会話をする事ができるようになってきているのではないかと思います。これまで、JADR には多くの海外からの研究者が、参加されましたが、皆さんが異口同音にいわれて不思議がられたことは、「何故日本語で発表しているのか」ということでした。物事立ち止まっていたは、いつまでも変わらないと思います。Hatton Award の本大会で、せっかく素晴らしい仕事を出しているのに、審査員との間のコミュニケーションがちゃんと取れないばかりに涙を吞んでいることを目の当たりにするとき、悔しさとその改善を図ろうという気持ちで胸がいっぱいになっているのは、私ばかりではないと思います。とにかく、何とかしゃべれば、相手も何とか分かろうとしてくれているのですから、努力すれば道が開けると思います。JADR の現執行部の方が、今年から、英断を下されたことを、間を空けずに、全ての発表に拡大されたらいかがでしょう。昔から、日本では、第2外国語の教育が、会話を軽視していた結果が現在の姿を生んできているのですから、小学校低学年から第2外国語の教育を始め、その教育のねらいを変えていき、その教育方針で育てられた学生が、発表者になってくるときまで、後20年近くかかるのかもしれませんが、今からその下地づくりに挑戦して見るのはいかがでしょう。例が良くないかも知れないのですが、最近話題になりつつある臨床専門医の制度も、今、制度を作る人たちが、自分達のレベルで、また自分達もその試験にパスしようようなレベルの試験では、駄目なのであって、将来あるべき姿に則って、こんなに難しくしては、こんなに requirement がきつくてはと思うような専門医の資格試験を準備することが、将来の専門医制度を本当に誇れる姿にすることだと言われているが、まさに将来のあるべき姿を求めて、変革に向かって進むことが必要な時期にきているのではないのでしょうか。

歯学の研究も、すでに、歯科だけの範囲ではおさまらなくなってきました。いわゆる学際的研究が求められ、その outcome も、全身の健康づくりの礎石として受け止められ、かつその要求度も高いレベルになってきているような時代です。一方、広く世界に目を向ければ、人間としての Quality of Life を求めるレベルが、まだまだ、primitive な段階にある地域が沢山あるわけで、IADR が国際学会としての歩んで行くべき二つの方向性を抱えた学会であることを理解していただき、IADR のいろいろな事業の必要性に協力していただくことを最後にお願ひしておきたいと思います。

PAPF の設立と JADR への期待

PAPF 前会長、日本大学松戸歯学部生化学教室教授
安孫子宜光

2003-2004 年の間、Pan-Asia Pacific Federation の会長を務めさせていただきました。本稿では PAPF 設立の経緯について紹介させていただき、また、この紙面を借りて PAPF が JADR に期待していることの代弁をお許しいただければと存じます。

IADR 総会は2年続いて AADR で主催され、3年に1回米国以外の国で開催されてきました。IADR の歴史、巨大化した IADR 組織、AADR の実力、を考えたとき、IADR の運営が AADR 中心の運営になりがちであること否定できないと思います。しかし、米国から遠隔地にある国々、とくに発展途上国では学会参加の費用を捻出することは困難で、その不公平さを感じていた国、IADR 会員は決して少なくなかったと思います。そして、なりよりも各 Division, Section, Group とその会員の密接なコミュニケーションを図るための機関として地域性を考えた IADR Federation 設立の必要性が考えられたと聞いています。AADR の理解のもと、世界の5大陸をベースに、すなわち北米、南米、ヨーロッパ、アフリカ、アジア-環太平洋の5つの Federations を置く事が決められました。Pan European Federation (PEF) が先頭をきって設立され、イエテボリ IADR 総会は PEF と共催で行われ、いよいよ Federation の活動が具体的に始動しました。

PAPF は、Japan, Korea, China, Southeast Asia (SEA), Australia / New Zealand の各 Division で構成されております。2002年にSEA DivisionのTeo Choo Soo先生が多大なご尽力をされて、実質的な準備会議として2002年IADR San Diego総会でPAPF設立会議が開催され、当時のJADR奥田克爾会長とこの会議に出席しました。その際、現IADR会長の黒田も同席されてPAPF設立に向けて多大なご支援を頂戴しました。そして、2003年IADR Gothenburg総会で現会長の大谷先生と3回目の準備会議に参加したおり最終的なConstitution Confirmationが行われました。そしてIADR Council Meetingにおきまして、PAPFの正式な設立が認められました。このPAPF会議で初代PAPF会長としてTeo Choo Soo先生をPAPF理事会の全員一致で選出しました。2003年IADR Hawaii総会でのPAPF理事会では、PAPF共催の2006年IADR Brisbaneに向けてのPAPF各Divisionの協力体制について話し合われました。PAPFのなかでJADRがもっとも多い会員数を擁するという理由だけで、小生がPresident-Electに任命されました。この会議でも当時のIADR会長John Clarkson先生、Vice-Presidentの黒田先生が同席して下さり有意義なご意見をいただいて、最終的な運営規則の制定と運営組織について合意が得られました。この

会議では Korean Division から 2010 年に IADR 総会を主催したいとの申し入れがあり、PAPF を挙げて協力することが決まりました。そして、本年 2005 IADR Baltimore 総会で、小生が議長を務めさせていただいて PAPF 会議を行い、2006 年 IADR Brisbane では各 PAPF Division の独自の総会を行わず IADR Brisbane の co-host を行うことで参加者を増やし全面的に協力することが承認されました。しかし残念ながら IADR 総会を米国と 1 年おきに 5 Federations で順番に行う原則の理由で、2010 年の IADR 総会 Seoul は実現しませんでした。そして、改めて Korean Division/venue Seoul、Chinese Division/venue Wuhan、SEA Division/venue Bangkok から IADR 総会開催の立候補が提出され、今後の PAPF の重要な協議事項になります。そして、次期 PAPF 会長に Rod Marshall 先生 (Australia / New Zealand)、President-Elect に Im-Ho Cho 先生 (Korea) が選出されました。

さて、JADR における PAPF 傘下の Division との交流については、Korean Division 総会と JADR 総会で特別講演者を交換して友好関係を築いているものの、SEA Division の諸国との交流は、ほとんど進展していないといわざるを得ません。一年間 PAPF 会長を務めさせていただいた間に、Wuhan で行われた Chinese Division 総会、タイ Kosamui 島で行われた SEA Division 総会、SEA Division 台湾総会に招待を受け、多くの知己をえることができました。この経験を通じて、PAPF に所属している国々とくに発展途上国が JADR に大きな期待をもっている空気を察する事が多々ありました。PAPF の mission として、各国の研究協力態勢の確立は当然ながら、歯科医学関連団体、健康政策ならびに歯学教育面についても意見交換を充実させて密接で有意義な国際交流の推進が挙げられています。また、発展途上国の若い研究者への支援を通じて研究の bottom-up ができるようにするのも大切でありましょう。よく有識者が、日本は発展途上国に対して膨大な金銭で支援しているが、その国民にはほとんど理解されおらず感謝もさほどされていない、と指摘していますが、援助の在り方、方法に問題があるのだと思います。私見ですが、IADR 傘下のあらゆる団体は基本的には学術研究団体でありますから、開発途上国への支援で重要なのは安易に金銭的に補助するのではなく、開発途上国の優秀な若手研究者を育成する場をつくりだす援助を行うことがまず最優先であると思います。先ほど言及しました PAPF

の mission の有意義な国際交流の推進を実現するには、当然、互いの総会時での学術交流が必要ですが、SEA、Chinese Division 総会に招待いただいたときに感じましたのは、すでに共同研究の関係がある以外は JADR からの参加がほとんどないことであります。そして海外からの JADR 総会への参加もほとんどありません。PAPF の研究者が JADR に参加してくれたとしても日本語を中心にした発表に満足させられるでしょうか？ それでは JADR 総会での発表を全て英語で行うようにしたとき総会参加者数を確保できるでしょうか？ どれだけの JADR 会員が PAPF に所属する各 Division の年次総会が何時、何処で開催されているかをご存知でしょうか？ 現実には IADR の Website に入れば情報を得られるものの実はよく稼働していません。あるいは興味をもたれていない？ 難問は多いといわざるを得ませんが PAPF の有機的なつながりを何とか促進せねば PAPF 設立が無為になってしまいます。まず JADR ができることの一つに、PAPF 国際交流の使命を感じて積極的な PAPF 傘下の Division 年次総会に参加して、先端の歯科医学研究成果を直に伝えることがあります。その学会会場での学術交流から新しい門戸も開かれ JADR の PAPF での存在意義を發揮できるものと思います。

日本学術振興会は、外国人特別研究員事業を展開し、留学先の確保、研究費の援助を行い大きな成果を挙げますが、まだまだ充分ではないといわれています。優秀な PAPF 会員の明日の歯科医学研究を担う若手研究者による研究環境を用意することが PAPF の大きな目標でもあります。JADR を基盤として一人でも多くの PAPF 若手研究者の招聘を切にお願いいたします。

PAPF の大きな事業として、何年かごとに Scientific meeting を各 Division 国の持ち回りで、当該国の総会と共催することがあります。もちろん IADR との関係を密にしながらの Scientific meeting であります。この機会を生かして PAPF 会員の国際交流を実現できると期待しています。この実現には JADR の大きな支援が必要でありましょう。きたる 2006 IADR 総会 Brisbane, Australia では第 1 回の PAPF Scientific meeting が共催で行われます。この総会の成功は JADR からの多数の参加が鍵となります。多くの演題、学会参加を期待しております。

最後に JADR 会員の皆様には、PAPF 設立の意義をご理解戴き、国際学会としての PAPF の発展に多大なご協力を頂戴できますようお願い申し上げます。

記念式典報告

JADR 第 50 回大会記念式典報告

大阪歯科大学薬理学講座教授
大浦 清

JADR が 1953 年に発足して第 50 回目の大会が 2002 年 11 月 30 日～12 月 1 日に東北大学大学院歯学研究科加齢歯科学分野の渡辺 誠教授のもと、仙台市で開催されることになり、記念式典を開催することになりました。当時、副会長であり企画委員長でもありましたので、理事会で 50 周年に相応しい企画をするように依頼されました。

1953 年高橋新次郎先生が JADR 初代会長をされ、2002 年の奥田克爾会長まで会長 21 名、副会長 11 名、理事 60 名および評議員数十名の先生方が就任されておられますが、今回この 50 回大会を記念して、この時点で歴代会長である河村洋二郎、田熊庄三郎、三浦不二夫、佐々木 哲、作田 守、山田 正の 6 名の先生方が名誉会員としておられましたので、学会功労者として 6 名の先生方を表彰させていただくことにいたしました。それとともに、50 回記念でありますので今日までの JADR の歴史を振り返りながら当時の苦労話やエピソードを交えた記念講演をしていただきたく、基礎系から河村洋二郎先生、臨床系から三浦不二夫先生、IADR の会長をされた作田 守先生の 3 名の先生方にご講演を依頼いたしましたところ快くお引き受けいただきました。会場設定は渡辺 誠大会長にお願いいたしました。

学会初日の 11 月 30 日午後 5 時 15 分より小生が司会・進行役をさせていただきました。

まず、最初にこの 50 年間に物故されました JADR の会員ならびに貢献のあった方々に対し全員で黙祷をささげました。

次に開会の式辞を始める前に所用でご欠席の IADR の John Clarkson 会長からのお祝いのメッセージをテープで流させていただきました。記念式典は以下の次第で行ないました。



JADR 第 50 回大会記念式典次第

司会・進行 大浦 清 JADR 副会長(大阪歯科大学教授)
開会の辞 奥田克爾 JADR 会長(東京歯科大学教授)

記念講演

座長 奥田克爾

1. 「JADR 第 50 回大会に当たって

—過去の歩みと今後への期待—

河村洋二郎 JADR 名誉会員

(大阪大学名誉教授)

2. 「JADR “こぼれ話”」 三浦不二夫 JADR 名誉会員

(東京医科歯科大学名誉教授)

3. 「JADR に期待するもの」

作田 守 JADR 名誉会員・元 IADR 会長

(大阪大学名誉教授)

学会功労者表彰

代表挨拶 山田 正 JADR 名誉会員(東北大学名誉教授)

閉会の辞 渡辺 誠

第 50 回 JADR 大会長(東北大学大学院教授)

記念講演では 3 名の先生方に JADR 50 年の歩みを、貴重な、また歴史を感じさせる素晴らしいお話をエピソードを交えてしていただき、さらに、これからの JADR の歩むべき道についてもお話いただきました。

学会功労者表彰では当日出席された 4 名の先生方に奥田克爾会長より今日まで学会に貢献していただいた感謝のプラークと記念品のデジタルカメラを贈呈いたしました。贈呈後、功労者を代表して山田 正名誉会員がウイットに富んだお礼の挨拶をされました。なお、当日欠席された田熊庄三郎、佐々木 哲のお二人の名誉会員の先生方には渡辺 誠大会長からプラークおよび記念品をご自宅のほうに郵送していただきました。

記念式典の最後には閉会の辞を渡辺 誠大会長に締めくくっていただきました。

2005 年には黒田敬之先生が作田 守先生以来 2 人目の IADR 会長に就任されました。この機会に、アメリカに次ぐ 2 番目の会員数を持つ JADR 会員の皆様が今後益々いろいろな分野、委員会において活躍されることを祈念いたしまして、JADR 第 50 回大会記念式典報告といたします。

JADR 各種記録

総会・学術大会開催一覧

回(年)	開催日	大会長	会場	演題数	参加者数
第1回(1954)	11月6日(金)	高橋新次郎	東京医科歯科大学		
第2回(1955)	4月6日(火)	美濃口玄	京都大学医学部		
第3回(1955)	10月11日(火)		箱根青雲荘	5件	
第4回(1956)	10月13日(土)		日本大学歯学部		
第5回(1957)	12月8日(日)		東京医科歯科大学		
第6回(1958)	11月1日(土)		大阪大学医学部附属病院	11件	
第7回(1959)	10月26日(月)		東京歯科大学	16件	
第8回(1960)	11月14日(月)		山の上ホテル	17件	
第9回(1961)	12月9日(土)		古賀の井ホテル	22件	
第10回(1962)	11月23日(金)		大阪大学松下会館	16件	
第11回(1963)	12月7日(土)		日本大学歯学部	17件	
第12回(1964)	12月6日(日)		日本大学歯学部	18件	
第13回(1965)	12月5日(日)		東京医科歯科大学	23件	
第14回(1966)	12月4日(日)		東京医科歯科大学	23件	
第15回(1967)	12月3日(日)		大阪大学歯学部	26件	
第16回(1968)	11月16・17日(土・日)		大阪大学歯学部	30件	
第17回(1969)	11月22日(土)	松宮 誠一	東京歯科大学	21件	
第18回(1970)	11月28・29日(土・日)	松宮 誠一	東京歯科大学	23件	
第19回(1971)	12月4・5日(土・日)		東京医科歯科大学	35件	
第20回(1972)	12月9・10日(土・日)		アジアセンター	26件	
第21回(1973)	12月6・7日(土・日)	船越 正也	宝塚ホテル	38件・シンポジウム1題	
第22回(1974)	11月22・23日(土・日)	川原 春幸	大阪歯科大学	38件・シンポジウム1題9件	184名
第23回(1976)	1月17・18日(土・日)	大西 正男	東京医科歯科大学	41件・シンポジウム1題6件	185名
第24回(1976)	12月4・5日(土・日)	須賀 昭一	日本歯科大学	50件	222名
第25回(1977)	12月2・3日(金・土)	大西 正男	東京医科歯科大学	63件・シンポジウム1題6件	254名
第26回(1978)	12月2・3日(土・日)	須賀 昭一	アジアセンター	65件・討論会1件	204名
第27回(1979)	12月7・8日(金・土)	田熊庄三郎	野口英世記念館	54件・特別講演1件	242名
第28回(1980)	12月5・6日(金・土)	高添 一郎	野口英世記念館	62件	260名
第29回(1981)	12月3・4日(木・金)	小西 浩二	大阪科学技術センター	73件	263名
第30回(1982)	12月2・3日(木・金)	三浦不二夫	東京医科歯科大学	79件・特別講演2件	325名
第31回(1983)	12月2・3日(金・土)	小林 義典	日本歯科大学	100件	344名
第32回(1984)	11月16・17日(金・土)	小沢 英浩	新潟郵便貯金会館	102件	350名
第33回(1985)	11月29・30日(金・土)	吉田 定宏	朝日大学歯学部	141件(O110・P31)	400名
第34回(1986)	12月4・5日(木・金)	三浦不二夫	東京医科歯科大学	123件(O90・P32・SL1)	485名
第35回(1987)	12月5・6日(土・日)	清水 正春	鶴見大学歯学部	126件(O100・P26)	375名
第36回(1988)	12月2・3日(金・土)	二階 宏昌	広島県民文化センター	160件(O107・P51・SL2)	519名
第37回(1989)	12月7・8日(木・金)	池田 正	アルカディア市ヶ谷	153件(O96・P55・SL2)	645名
第38回(1990)	11月29・30日(木・金)	堀内 博	仙台市戦災復興記念館	161件(O99・P60・SL2)	381名
第39回(1991)	12月5・6日(木・金)	太田 義邦	大阪国際交流センター	173件(O108・P62・SL3)	429名
第40回(1992)	11月30日・12月1日(月・火)	佐々木 哲	日本都市センター	122件(O74・P44・SL4)	404名
第41回(1993)	12月2・3日(木・金)	村山 洋二	岡山衛生会館・三光荘	157件(O94・P53・H3・SL2・S5(1))	543名
第42回(1994)	12月9・10日(金・土)	作田 守	千里ライフサイエンスセンター	142件(O74・P58・H3・SL2・S5(1))	504名
第43回(1995)	6月30日(金)	山田 正	Westin Plaza and Stamford Hotels, Singapore		
第44回(1996)	11月26・27日(火・水)	山田 正	裏磐梯猫魔ホテル	126件(O48・P58・H4・SL2・S5(1)・F7(1)・L2)	259名
第45回(1997)	12月6・7日(土・日)	中村 亮	徳島大学歯学部	129件(O62・P54・H5・SL2・L1・F5(1))	281名
第46回(1998)	11月28・29日(土・日)	高江洲義矩	幕張メッセ	172件(O48・P104・H5・SL2・S13(3))	389名
第47回(1999)	11月27・28日(土・日)	大浦 清	神戸国際会議場	186件(O54・P97・H5・SL2・S27(5)・L1(1))	525名
第48回(2000)	12月2・3日(土・日)	安孫子宜光	日本大学松戸歯学部	174件(O72・P73・H5・SL2・S22(5))	460名
第49回(2001)	6月29日(金)	奥田 克爾	千葉幕張プリンスホテル	774件	1794名
第50回(2002)	11月30日・12月1日(土・日)	渡辺 誠	仙台市情報産業プラザネットU	157件(O42・P82・H5・SL2・S15(3)・L4(1)・PS4(1)・ML3(1))	383名
第51回(2003)	12月1・2日(月・火)	雫石 聰	千里ライフサイエンスセンター	137件(O30・P77・H5・SL3・S13(3)・L5(1)・PS4(1))	349名
第52回(2004)	11月27・28日(土・日)	大谷 啓一	学術総合センター	118件(O41・P54・H5・SL3・S13(3)・L2(2))	306名
第53回(2005)	11月26・27日(土・日)	山本 照子	岡山大学創立50周年記念館	139件(O35・P71・H5・SL3・S12(3)・L7(2)・PS5(1)・W1)	429名

O：口頭発表，P：ポスター発表，H：Hatton Award，SL：特別講演・招待講演等，F：フォーラム，S：シンポジウム，セミナー等(カッコ内はテーマ数)，PS：市民公開シンポジウム等(カッコ内はテーマ数)，L：ランチョンシンポジウム(カッコ内はテーマ数)，W：ワークショップ，ML：50周年記念講演

歴代学術奨励賞受賞者

回(年)	受賞者
第 52 回(2004)	Bobby John Varghese (東京医科歯科大学)
	伊藤 祥作 (大阪大学)
	伊藤理恵子 (東京歯科大学)
	庄子 幹郎 (長崎大学)
第 53 回(2005)	泰江 章博 (徳島大学)
	出口 徹 (岡山大学)
	林 達秀 (愛知学院大学)
	別所 央城 (東京歯科大学)

歴代役員

年	会 長	副 会 長	事務局長 / 会計担当理事	理 事				
1954-1958	高橋新次郎		榎 恵	美濃口 玄				
1959-1960	松宮 誠一		榎 恵	美濃口 玄				
1961-1962	永井 巖		榎 恵	美濃口 玄				
1963-1964	栖原 六郎		新国 俊彦	河村洋二郎				
1965-1966	中沢 勇		大西 正男	河村洋二郎				
1967-1968	山本 巖		大西 正男	河村洋二郎				
1969-1970	松宮 誠一		大西 正男	河村洋二郎				
1971-1972	榎 恵		大西 正男	河村洋二郎				
1973-1974	河村洋二郎		田熊庄三郎	大西 正男	須賀 昭一			
1975-1976	大西 正男	須賀 昭一	田熊庄三郎	川原 春幸	船越 正也			
1977-1978	大西 正男	須賀 昭一	田熊庄三郎	川原 春幸	船越 正也			
1979-1980	田熊庄三郎	森 政和	須賀 昭一	河村洋二郎	三浦不二夫	高添 一郎		
1981	森 政和	三浦不二夫	須賀 昭一	河村洋二郎	常光 旭	小西 浩二		
1982	森 政和	三浦不二夫	須賀 昭一	河村洋二郎	常光 旭	小西 浩二	小椋 秀亮	
1983-1984	須賀 昭一	小椋 秀亮	常光 旭	田熊庄三郎 小林 義典	三浦不二夫	吉田 定宏	小沢 英浩	
1985-1986	三浦不二夫	大橋 正敬	常光 旭	吉田 定宏 亀山洋一郎	小沢 英浩	木下善之介	清水 正春	
1987-1988	常光 旭	大橋 正敬	佐々木 哲 長尾 正憲	木下善之介 見明 清	清水 正春 堀内 博	亀山洋一郎 二階 宏昌	作田 守	
1989-1990	大橋 正敬	見明 清	佐々木 哲 長尾 正憲	堀内 博 太田 義邦	二階 宏昌 岡田 宏	池田 正 小林 義典	石川 烈	
1991-1992	佐々木 哲	作田 守	高江洲義矩 柳澤 孝彰	池田 正 丸山 剛郎	太田 義邦 茂呂 周	黒田 敬之 山田 正	小林 義典	
1993-1994	作田 守	山田 正	高江洲義矩 柳澤 孝彰	黒田 敬之 中村 亮	丸山 剛郎 村山 洋二	茂呂 周 森脇 豊	川添 堯彬	
1995-1996	山田 正	黒田 敬之	岡田 宏 伊集院直邦	川添 堯彬 齊藤 毅	中村 亮 奥田 克爾	村山 洋二 須田 英明	森脇 豊	
1997-1998	黒田 敬之	中村 亮	岡田 宏 伊集院直邦	奥田 克爾 南雲 正男	須田 英明 坂東 永一	大浦 清 森本 俊文	中林 宣男	
1999-2000	岡田 宏	大浦 清	奥田 克爾 南雲 正男	栗栖浩二郎 古賀敏比古	中林 宣男 柴 芳樹	安孫子宜光 渡辺 誠	亀山洋一郎	
2001-2002	奥田 克爾	大浦 清	安孫子宜光 零石 聰	古賀敏比古 高野 吉郎	渡辺 誠 恵比須繁之	柴 芳樹 山本 照子	大谷 啓一 小田 豊	
2003-2004	安孫子宜光	大谷 啓一	零石 聰	高野 吉郎 根本 君也	恵比須繁之 高橋 信博	山本 照子 今井 奨	小田 豊 中田 稔	
2005-2006	大谷 啓一	小田 豊	村上 伸也	高野 吉郎 今井 奨 前田 伸子	山本 照子 大東 道治	根本 君也 田上 順次	高橋 信博 飯田順一郎	

歴代会長



1954-1958
高橋新次郎



1959-1960
松宮 誠一



1961-1962
永井 巖



1963-1964
栖原 六郎



1965-1966
中沢 勇



1967-1968
山本 巖



1969-1970
松宮 誠一



1971-1972
榎 恵



1973-1974
河村洋二郎



1975-1976
1977-1978
大西 正男



1979-1980
田熊庄三郎



1981-1982
森 政和



1983-1984
須賀 昭一



1985-1986
三浦不二夫



1987-1988
常光 旭



1989-1990
大橋正敬



1991-1992
佐々木 哲



1993-1994
作田 守



1995-1996
山田 正



1997-1998
黒田 敬之



1999-2000
岡田 宏



2001-2002
奥田 克爾



2003-2004
安孫子宜光



2005-2006
大谷 啓一

歴代評議員

大学名	1997-1998	1999-2000	2001-2002	2003-2004	2005-2006
北海道医療大学	大野 弘機	大野 弘機	東城 庸介	東城 庸介	柴田 考典
北海道大学	久保木 芳徳	久保木 芳徳	亘理 文夫	亘理 文夫	亘理 文夫
岩手医科大学	石橋 寛二	石橋 寛二	久保田 稔	加藤 裕久	加藤 裕久
東北大学	渡辺 誠	笹野 高嗣	笹野 高嗣	笹野 泰之	笹野 泰之
奥羽大学	堀内 登	堀内 登	堀内 登	堀内 登	堀内 登
明海大学	上羽 隆夫	上羽 隆夫	加藤 節子	藤澤盛一郎	渡部 茂
日本大学松戸歯学部	安孫子 宜光	古山 俊介	山崎 宗与	前田 隆秀	前田 隆秀
東京医科歯科大学	大谷 啓一	大谷 啓一	田上 順次	田上 順次	三浦 宏之
東京歯科大学	柳澤 孝彰	柳澤 孝彰	内山 健志	井上 孝	井上 孝
日本歯科大学	丹羽 源男	丹羽 源男	相山 誉夫	筒井 健機	筒井 健機
日本大学	茂呂 周	大塚 吉兵衛	大塚 吉兵衛	松村 英雄	松村 英雄
昭和大学	山田 庄司	玉置 幸道	玉置 幸道	佐藤 裕二	佐藤 裕二
神奈川歯科大学	梅本 俊夫	梅本 俊夫	梅本 俊夫	久保田 英朗	久保田 英朗
鶴見大学	千葉 元丞	川崎 堅三	深江 允	深江 允	朝田 芳信
新潟大学	岩久 正明	岩久 正明	岩久 正明	前田 健康	前田 健康
日本歯科大学新潟歯学部	小倉 英夫	加藤 喜郎	加藤 喜郎	加藤 喜郎	加藤 喜郎
松本歯科大学	原田 實	五十嵐 順正	伊藤 充雄	藤村 節夫	上松 節子
朝日大学	山本 宏治	山本 宏治	山本 宏治	山本 宏治	山本 宏治
愛知学院大学	亀山 洋一郎	中垣 晴男	中垣 晴男	中垣 晴男	中垣 晴男
大阪歯科大学	川本 達雄	諏訪 文彦	諏訪 文彦	大東 道治	西川 泰央
大阪大学	高田 健治	前田 芳信	前田 芳信	高田 健治	高田 健治
岡山大学	渡邊 達夫	渡邊 達夫	渡邊 達夫	渡邊 達夫	窪木 拓男
広島大学	濱田 泰三	濱田 泰三	濱田 泰三	濱田 泰三	濱田 泰三
徳島大学	浅岡 憲三	浅岡 憲三	浅岡 憲三	森山 啓司	森山 啓司
九州歯科大学	小園 凱夫	小園 凱夫	小園 凱夫	小園 凱夫	福山 宏
九州大学	中田 稔	中田 稔	中田 稔	花澤 重正	山下 喜久
福岡歯科大学	阿部 公生	阿部 公生	阿部 公生	阿部 公生	本川 渉
長崎大学	加藤 伊八	加藤 有三	熱田 充	熱田 充	熱田 充
鹿児島大学	井上 昌一	井上 昌一	鳥居 光男	鳥居 光男	和泉 雄一
国立感染症研究所	西原 達次	今井 奨			
山形大学	柴田 考典	柴田 考典	柴田 考典		
国立保健医療科学院			今井 奨		
京都大学				村上賢一郎	
慈恵医科大学					杉崎 正志

歴代名誉会員

歴代終身会員

歴代 KADR 派遣者

名誉会員	
岡田 宏	河村洋二郎
黒田 敬之	作田 守
佐々木 哲	田熊庄三郎
三浦不二夫	山田 正
(以下物故)	
榎 恵	大西 正男
須賀 昭一	常光 旭
松宮 誠一	森 政和

終身会員		
相田 英孝	青野 正男	雨宮 璋
池田 正	石田 甫	一色 泰成
伊藤 学而	井上 清	井上 直彦
井上 昌一	猪木 令三	岩久 正明
上羽 隆夫	大森 郁朗	奥野 善彦
小椋 秀亮	小澤 英浩	覚道 幸男
桂 暢彦	川原 春幸	神澤 康夫
菅野 義信	桐野 忠大	窪田金次郎
栗栖浩二郎	坂田 三弥	佐川 寛典
末田 武	鈴木 文雄	須田 立雄
高江洲義矩	高添 一郎	高橋 純造
竹内 光春	谷 明	谷 嘉明
千野 武廣	中井 宏之	中沢 勇
中村 武	中村 嘉男	中村 亮
西田 健	荷宮 文夫	花田 晃治
原 耕二	松江 一郎	松本 光生
南 直臣	森 昌彦	森本 俊文
森本 基	森脇 豊	山上 哲賢
吉岡 濟	吉木 周作	吉田 定宏
吉田 穰	吉田 洋	渡辺 継男
渡辺 義男		
(以下物故)		
秋吉 正豊	荒谷 真平	石川 梧朗
石川 純	今川 与曹	上野 正
神沢 康夫	菊池 進	鈴木 賢策
永井 巖	新国 俊彦	総山 孝雄
松下 義雄	山下 浩	山田 守
山本 巖	横田 成三	

回(年)	開催日	派遣者	
第1回(1983)			
第2回(1984)			
第3回(1985)			
第4回(1986)			
第5回(1987)			
第6回(1988)			
第7回(1989)	1月	大橋 正敬	佐々木 哲
第8回(1990)	1月19日・20日	三階 宏昌	長尾 正憲
第9回(1991)	1月18日・19日	太田 義邦	堀内 博
第10回(1992)	1月17日・18日	山田 正	小林 義典
第11回(1993)	1月15日・16日	柳澤 孝彰	
第12回(1994)	1月21日・22日	黒田 敬之	
第13回(1995)	1月20日・21日	高江洲義矩	
第14回(1996)	1月26日・27日	中林 宣男	
第15回(1997)	1月22日・23日	岡田 宏	
第16回(1998)	1月23日・24日	栗栖浩二郎	作田 守
第17回(1999)	1月22日・23日	高田 隆	
第18回(2000)	1月21日・22日	大隅 典子	黒田 敬之
第19回(2000)	12月15日・16日	安孫子宜光	
第20回(2001)	12月14日・15日	永井 教之	
第21回(2002)	12月13日・14日	大浦 清	
第22回(2003)	12月12日	雫石 聰	
第23回(2004)	12月10日	大谷 啓一	
第24回(2005)	11月29日・30日	小田 豊	

IADR 各種記録

Past IADR Unilever Division Travel Awards Recipients

1988	飯田順一郎	東京医科歯科大学
1989	田上 順次	東京医科歯科大学
1994	宮脇 正一	大阪大学
	高橋 信博	東北大学
	山口 康昭	東京歯科大学
1995	松本 芳郎	東京医科歯科大学
	松本啓次郎	東京医科歯科大学
	林 丈一朗	東京医科歯科大学
1997	石橋 浩晃	九州大学
	野崎 剛徳	大阪大学
	高柴 正悟	岡山大学
	山本 寛	東京医科歯科大学
	小野 卓史	東京医科歯科大学
1998	本間 聖進	東京歯科大学
	横関 雅彦	東京医科歯科大学
	近藤 尚知	東京医科歯科大学
	何 涛	東京医科歯科大学
	安細 敏弘	九州歯科大学
1999	飯村 忠浩	東京医科歯科大学
	明貝 文夫	岡山大学
	船戸 紀子	東京医科歯科大学
	W. R. Duarte	東京医科歯科大学
	斉藤 隆史	北海道医療大学
2000	牧平 清超	広島大学
	檜山 成寿	東京医科歯科大学
	米澤 英雄	東京歯科大学
	橋川 智子	大阪大学
	大山 秀樹	岡山大学
2001	福本 敏	長崎大学
	今谷 哲也	東京歯科大学
	B. Linsuwanont	東京医科歯科大学
	岩崎 剣吾	東京医科歯科大学
	高山 真一	大阪大学
2003	西 真寿美	徳島大学
	吉田 明弘	九州大学
	加来 真人	広島大学
	半田 慶介	神奈川歯科
	金子 友厚	東京医科歯科大学
2004	土井 健義	広島大学
	品川 英朗	東京医科歯科大学
	堤 聡	徳島大学
	管崎 弘幸	東北大学
	小出 雅則	愛知学院大学
2005	前田 恵子	東京医科歯科大学
	西田 伸子	大阪大学
	上原亜希子	東北大学
	山城 圭介	岡山大学
	米野 潔	広島大学
2006	谷川 千尋	大阪大学
	郡司掛香織	九州歯科大学
	横井 隆政	神奈川歯科大学
	坂上 直子	新潟大学
	宮本 順	東京医科歯科大学

Past IADR Science Awards Recipients

IADR Distinguished Science Awards Recipients		
• Basic Research in Periodontal Disease Award		
1998	Hiroshi Okada	
2002	Yoji Murayama	
• Basic Research in Biological Mineralization Award		
1972	Shosaburo Takuma	
1990	Shoichi Suga	
1992	Satoshi Sasaki	
2004	Yoshiro Takano	
• Research in Prosthodontics & Implants Award		
1976	Yojiro Kawamura	
1999	Taizo Hamada	
2004	I. Nishimura	
• Wilmer Souder Award		
1982	Takao Fusayama	
1994	Nobuo Nakabayashi	
1999	T. Okabe	
• Young Investigator Award		
2002	Sumie Yoneda	Implantology Research Group
2005	Takafumi Kato	
David B. Scott Student Research Fellowship		
1995	Sachiko Takikita	
IADR/Colgate Research in Prevention Award		
1999	Shoji Horiguchi	
2003	Towako Wakui	
2004	Akihisa Fukuda	
2005	Rahena Akther	
IADR/Lion Dental Research Award for Young Investigators		
2001	Y. Kitasako	Cariology
2002	Towako Wakui	Oral Health Research
2003	Hiroyuki Tada	Microbiology/Immunology
2005	Salunya Tancharoen	
Norton M. Ross Fellowship		
2004	Aiko Nakasone	
IADR/AADR William J. Gies Award		
1996	Yutaka Matsuki <i>et al.</i>	
2004	K. Kohama <i>et al.</i>	
2004	Minoru Onozuka <i>et al.</i>	
IADR/Unilever Hatton Awards Competition		
1978	Makoto Sato	1st Prize, Post-Doctoral
1988	Junichiro Iida	1st Prize, Post-Doctoral
2002	Hiroshi Egusa	1st Prize, Senior
2003	Keisuke Handa	2nd Prize, Senior
Arthur R. Frechette Research Award Competition		
2004	V. Rutkunas <i>et al.</i>	1st Prize
2004	Hiroshi Egusa <i>et al.</i>	1st Prize

Past IADR Board of Directors & Committees Members

1963-1964	Seiichi Matsumiya (1969)	International Relationship Committee
1967-1968	F. Shibata	Local Arrangements Committee
1969-1970	Masao Onisi (1978)	International Relations Committee
	Masao Onisi	IADR History Ad Hoc Committee
1970-1971	Masao Onisi	IADR History Ad Hoc Committee
1979-1980	Yojiro Kawamura	Member-at-Large
	Kinichi Horii	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Koji Konishi	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Motoi Morimoto	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Toshio Morioka	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Yoshinori Takaesu	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Shosaburo Takuma	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Akira Tsunemitsu	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Masao Onisi	Eighth ICOB Program Committee
	Yojiro Kawamura	Ad Hoc Committee on International Meetings
	Yojiro Kawamura	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Zennosuke Kinoshita	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Masahiko Mori	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Masakazu Mori	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Mamoru Sakuta	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Shoichi Suga	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Akira Tsunemitsu	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Shosaburo Takuma	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Yojiro Kawamura	Prosthodontics Research Award Committee
1981-1982	Yojiro Kawamura	Prosthodontics Research Award Committee
1984-1985	Ichiro Takazoe (1985)	Hatton Awards Committee
	Hideo Onose (1987)	International Relations Committee
	Shoichi Suga (1986)	Nominating Committee
	Shoichi Suga (1985)	Progress in Research Committee
	Goro Hirai (1987)	Progress in Research Committee
	Yoshinori Takaesu	Science Information Transfer (Japanese)
1985-1986	Fujio Miura (1988)	Member-at-Large
	Fujio Miura (1986)	Information Resources Committee (Japanese)
	Takao Fusayama (1987)	Wilmer Souder Award Committee
1987-1988	Hiroshi Okada (1990)	Nominating Committee
	Akira Tsunemitsu	Information Resources Committee (Japanese)
	Eiko Sairenji (1989)	Young Investigator Awards Committee
1989-1990	Satoshi Sasaki (1991)	Member-at-Large
	Isao Ishikawa (1990)	Constitution Committee
	Tadashi Yamada (1992)	Young Investigator Awards Committee
1990-1991	Ichiro Takazoe (1993)	FDI Programs Advisory Committee
	Takao Maruyama (1993)	Nominating Committee
	Shoichi Suga (1995)	Basic Research in Biological Mineralization Award Committee
	Takao Fusayama (1992)	Research in Oral Biology Award Committee
1992-1993	Yoshinori Takaesu (1995)	Ethics in Dental Research Committee
	Masayoshi Ohashi (1994)	Membership and Recruitment
	Toru Okabe (1994)	Visiting Lecture Program Committee, Chair
	Satoshi Sasaki (1995)	Young Investigator Award Committee
	Shoichi Suga (1993)	Joint IA/AA Publications Committee
	Hiroshi Horiuchi	ad hoc Long-range Planning Committee
	Toru Okabe (1993)	ICOB Planning Committee
	Shoichi Suga (1995)	Basic Research in Biological Mineralization Award Committee
1993-1994	Satoshi Sasaki (1997)	Basic Research in Biological Mineralization Award Committee
1994-1995	Tadashi Yamada (1997)	Edward H. Hatton Awards Committee
	Yoshinori Takaesu (1995)	Ethics in Dental Research Committee
	Minoru Nakata (1996)	FDI Liaison Committee
	Takao Maruyama (1996)	IADR/AADR Joint Exhibits Committee
	Ryo Nakamura (1996)	Membership and Recruitment Committee
	Hiroshi Okada (1997)	Nominating Committee
	Nobuo Nakabayashi (1999)	Wilmer Souder Award Committee
1995-1996	Ryo Nakamura (1996)	Membership and Recruitment Committee
	Hiroshi Okada (1997)	Nominating Committee, Chair
1996-1997	Mamoru Sakuda	Vice-president
	Mamoru Sakuda (1999)	Annual Session Committee
	Takayoshi Kawazoe (1999)	Constitution Committee
	Kiyoshi Ohura (1999)	Ethics in Dental Research Committee
	Mamoru Sakuda (1999)	Finance Committee

1997-1998	Mamoru Sakuda Mamoru Sakuda (1999) Takaaki Yanagisawa (2000) Shigeyuki Ebisu (2000) Yoshinori Kobayashi (2000) Kojiro Kurisu (2000) Nobuo Nakabayashi (2000) Hideaki Suda (2000)	President-elect Annual Session Committee, Chair IADR/AADR Joint Exhibits Committee ICOB Planning Committee Membership and Recruitment Committee Nominating Committee Young Investigator Award Committee Fellowships Committee
1998-1999	Mamoru Sakuda Takayuki Kuroda Masaki Yanagishita (2001) Masao Nagumo (2000) Hideaki Suda (2000) Sadami Tsutsumi (2001)	President Member-at-Large Edward H. Hatton Awards Committee IADR/AADR Joint Publication Committee Fellowships Committee Joint Technology & Communications Committee
1999-2000	Takayuki Kuroda (2001) Mamoru Sakuda Katsuji Okuda (2002) Hiroshi Okada (2002) Mamoru Sakuda (2002) Kazuo Hirota (2002) Masaaki Iwaku (2002) Mamoru Sakuda (2000) Nobuo Nakabayashi (2000) Takashi Hanioka	Member-at-Large Immediate Past President Constitution Committee Ethics in Dental Research Committee Honorary Membership Committee IADR/AADR Joint Exhibits Committee IADR/AADR Joint Exhibits Committee Nominating Committee Young Investigator Award Committee, Chair ad hoc Tobacco Committee
2000-2001	Takayuki Kuroda (2001) Yoshio Kozono (2003) Kiyoshi Ohura (2003) Satoshi Shizukuishi (2003) Toshihiko Koga (2003) Haruo Ishikawa (2003) Takashi Hanioka	Member-at-Large IADR/AADR Joint Exhibits Committee IADR/AADR Joint Exhibits Committee Nominating Committee Young Investigator Award Committee Fellowships Committee ad hoc Tobacco Committee
2001-2002	Mamoru Sakuda (2002) Takashi Takata (2004) Takashi Hanioka Yoshimitsu Abiko (2004)	Honorary Membership Committee, Chair IADR/AADR Joint Publication Committee ad hoc Tobacco Committee Joint Technology & Communications Committee
2002-2003	Teruko Takano-Yamamoto (2005) Yoji Murayama (2005) Keiichi Ohya (2005) Hiroshi Okada (2004) Takashi Hanioka	Constitution Committee IADR/AADR Publication Committee Membership and Recruitment Research in Periodontal Disease Award Committee ad hoc Tobacco Committee
2003-2004	Takayuki Kuroda Takayuki Kuroda (2006) Yukata Oda (2006) Takayuki Kuroda (2006) Takashi Takata (2006) Takayuki Kuroda (2004) Takashi Hanioka Shigeyuki Ebisu (2006)	Vice-president Annual Session Committee Ethics in Dental Research Committee Finance Committee IADR/AADR Publications Committee William J. Gies Award Committee ad hoc Tobacco Committee Young Investigator Award Committee
2004-2005	Takayuki Kuroda Takayuki Kuroda (2006) Nobuhiro Takahashi (2007) Yoshiro Takano (2007) Keiichi Ohya (2005) Kiyoshi Ohura (2007) Katsuji Okuda (2007) Takashi Hanioka	President-elect Annual Session Committee, Chair Fellowships Committee Unilever/Edward H. Hatton Awards Committee Membership and Recruitment Committee, Chair Nominating Committee Regional Development Program Committee ad hoc Tobacco Committee
2005-2006	Takayuki Kuroda Satoshi Shizukuishi (2008) Yoshiro Takano (2007) Shinya Murakami (2008) Junji Tagami (2008) Takashi Hanioka Yoshiro Takano (2009) Yoji Murayama (2008) Ichiro Nishimura (2009) Toru Okabe (2006)	President Constitution Committee Unilever/Edward H. Hatton Awards Committee, Chair William J. Gies Award Committee Membership and Recruitment Committee ad hoc Tobacco Committee Basic Research in Biological Mineralization Award Committee Basic Research in Periodontal Disease Award Committee Research in Prosthodontics & Implants Award Committee Wilmer Souder Award Committee

Past IADR Scientific Group Officers

1975-1976	Yojiro Kawamura	Neuroscience Group	Director
1986-1987	Yukio Kakudo	Prosthodontics Research Group	Director
1987-1988	Fujio Miura	Craniofacial Biology Group	Director
	Masayoshi Ohashi	Dental Materials Group	Secretary
	Eiko Sairenji	Implantology Research Group	Director (Japanese)
	Yukio Kakudo	Prosthodontics Research Group	Director
1988-1989	Yukio Kakudo	Prosthodontics Research Group	Director
1989-1990	Eiko Sairenji	Implantology Research Group	Director (Japanese)
1990-1991	Masayoshi Ohashi	Dental Materials Group	President-Elect
1991-1992	Masayoshi Ohashi	Dental Materials Group	President
1992-1993	Takayuki Kuroda	Craniofacial Biology Group	Director
	Masayoshi Ohashi	Dental Materials Group	Immediate Past President
1995-1996	Yoshiaki Tani	Dental Materials Group	President
1996-1997	I. Nishimura	Prosthodontics Research Group	Secretary/Treasurer
1997-1998	Hiroshi Okada	Periodontal Research Group	Treasurer
	I. Nishimura	Prosthodontics Research Group	Secretary/Treasurer
1998-1999	Hiroshi Okada	Periodontal Research Group	Vice-president
	I. Nishimura	Prosthodontics Research Group	Secretary/Treasurer
	Masaki Shimono	Pulp Biology Group	Vice-president
1999-2000	Hiroshi Okada	Periodontal Research Group	President-Elect
	I. Nishimura	Prosthodontics Research Group	Secretary
	M. Shimono	Pulp Biology Group	President-Elect
2000-2001	Yuzuru Kaneko	Dental Anesthesiology Research Group	President
	Hideki Furuya	Dental Anesthesiology Research Group	Secretary/Treasurer
	Hiroshi Okada	Periodontal Research Group	President
	I. Nishimura	Prosthodontics Research Group	President-Elect
2001-2002	Hideki Furuya	Dental Anesthesiology Research Group	Secretary/Treasurer
	Hiroshi Nakajima	Dental Materials Group	Secretary
	I. Nishimura	Prosthodontics Research Group	President
2002-2003	Masaki Kambara	Cariology Research Group	President-Elect
	Mikiko Yamashiro	Dental Anesthesiology Research Group	Vice-president
	Hideki Furuya	Dental Anesthesiology Research Group	Secretary/Treasurer
	Hiroshi Nakajima	Dental Materials Group	Secretary
	Y. Matsuda	Diagnostic Systems Group	Councilor
2003-2004	Masaki Kambara	Cariology Research Group	President
	Mikiko Yamashiro	Dental Anesthesiology Research Group	President-Elect
	Hideki Furuya	Dental Anesthesiology Research Group	Secretary/Treasurer
	Hiroshi Nakajima	Dental Materials Group	Secretary
	Y. Matsuda	Diagnostic Systems Group	Councilor
2004-2005	Masaki Kambara	Cariology Research Group	Immediate Past President
	Mikiko Yamashiro	Dental Anesthesiology Research Group	President
	Hideki Furuya	Dental Anesthesiology Research Group	Secretary/Treasurer
	Hiroshi Nakajima	Dental Materials Group	President-Elect
	Satoshi Imazato	Dental Materials Group	Secretary
	Ryuji Hosokawa	Implantology Research Group	Director-at-Large

JADR 年表

1954年	11月	IADR 本部より IADR の Japanese Division として承認を受け日本支部結成式を開催。設立当初会員数は 16 名。初代会長高橋新次郎教授(東京医科歯科大学)。
1955年	4月	京都大学にて初めて学術大会を開催。
1960年	11月	このころ会員数は 22 名。
1970年	11月	このころ会員数は 112 名。
1972年	12月	年会費を 500 円から 1,000 円に値上げ。
1973年	1月	このころニュースレターの発行を開始。 事務局を東京歯科大学病理学教室第一講座に移転。
	12月	具体的運営事項を定めた Bylaws (細則)を承認。
1974年	11月	初めて名誉会員を推戴。 年会費を 1,000 円から 2,000 円に値上げ。
1978年	3月	第 56 回 IADR 総会(Washington)にて第 58 回 IADR 総会を大阪にて開催することが決定。
	12月	終身会員を新設。
1979年	1月	事務局を日本歯科大学病理学教室に移転。
1980年	10月	このころ会員数は正会員 617 名、名誉会員 4 名、賛助会員 7 社。
	6月	第 58 回 IADR 総会を大阪にて盛大に開催。
	12月	The Japanese Division of the IADR から Japanese Association of Dental Research への名称変更を決議。
1981年	3月	第 59 回 IADR 総会にて Japanese Association of Dental Research への名称変更が決定。
	12月	名称変更にもない会則を改定。初めて終身会員を推戴。
1982年	12月	30 周年記念式典を盛大に開催。
1983年	1月	事務局を大阪大学歯学部予防歯科学講座に移転。
	4月	過去の会長経験者で構成する President Committee 運営規定を承認。
	12月	初めて President Committee を開催。
1984年	11月	年会費を 2,000 円から 3,000 円に値上げ。
1985年	11月	第 33 回学術大会・総会にて業者展示を開始。
1987年	1月	事務局を東京医科歯科大学歯学部生化学講座に移転。これまで一人が担っていた事務局長と会計担当理事の職務を分担。理事数を 5 名から 7 名に増員。
1988年	7月	JADR 役員と KADR 役員が東京にて会談。両部会総会時に互いに役員を招待するなど友好的関係を築いていくことを確認。
	12月	第 36 回学術大会・総会に KADR より役員を招待。
1989年	1月	第 7 回 KADR 総会へ招待を受け JADR 役員を派遣。
1990年	10月	このころ会員数は正会員 1,129 名、名誉会員 3 名、終身会員 20 名、賛助会員 7 社。
1991年	1月	事務局を東京歯科大学口腔衛生学講座に移転。
1992年	7月	第 70 回 IADR 総会(Glasgow)にて第 79 回 IADR 総会を千葉幕張にて開催することが決定。
1995年	1月	事務局を財団法人日本学会事務センター大阪事務所に移転。
	4月	Newsletter をこれまでの B5 判から現行の A4 判にリニューアル。
1996年	11月	会則を大幅に改定。評議員を新設。理事数を 7 名から 8 名内外に増員。年会費を 3,000 円から 5,000 円に値上げ。
1997年	12月	初めて評議員会を開催。
1998年	6月	作田守名誉教授(大阪大学)が日本人初の IADR 会長に就任。
2000年	9月	このころ会員数は正会員 2,122 名、名誉会員 4 名、終身会員 41 名、賛助会員 16 社。
2001年	6月	第 79 回 IADR 総会を千葉幕張にて盛大に開催。2002 年度より IADR/JADR 会員の年会費を IADR 本部が徴収することが決定し年会費は 5,000 円から 50 ドルへ。IADR には所属せず JADR のみに所属する部会員を新設。
2002年	12月	50 周年記念式典を盛大に開催。 学生会員を新設。事務局長を廃し副会長に一本化。
2003年	6月	第 81 回 IADR 総会にて Pan-Pacific Asia Federation (PAPF) の設立が決定。
	12月	第 51 回総会より評議員会を同時開催。
2004年	3月	安孫子宜光教授(日本大学松戸歯学部)が PAPF 会長に就任。
	11月	事務局を株式会社コネットに移転。第 52 回学術大会・総会にて学術奨励賞の授与ならびに Hatton Awards 候補者の英語による発表を開始。
2005年	3月	黒田敬之名誉教授(東京医科歯科大学)日本人 2 人目の IADR 会長に就任。

50周年記念誌「JADRのあゆみ」編集後記

JADRは2002年に50周年をむかえました、当時JADR会長(2001-2002年)であった私が記念誌を発行すべき責任がありました。安孫子宜光会長(2003-2004)の理事会で、50周年の記録を作ることが決定し、私が編集委員長として下記の内容を提案させて頂き、原稿依頼を致しました。「JADRのあゆみ」とした記念誌になりました。編集に不慣れでしたが、集まった原稿は素晴らしいもので、発行まで自分がいろいろのことを学ぶことができました。

1. 現会長挨拶
2. 名誉会員ならびに元会長のメッセージ
3. JADR関連する事柄として1) 総会、学術大会リスト、2) 歴代理事会メンバーリスト、
3) 韓国への派遣者リスト、4) 名誉会員、終身会員リスト、5) JADR学術奨励賞受賞者リスト、
6) ニュースレター発行記録、7) 50周年記念式典記録について
4. IADR関連する事柄として1) IADR各賞受賞者(Hatton Awards Travel受賞者含む)、
2) 歴代JADRからのIADR Committees参加者リスト、3) 歴代JADRからのScientific Group役員リスト、4) IADR General Session in Osaka(1980) and Chiba(2001)、
5) Pan-Asian-Pacific FederationとIADRの関係について

集まった原稿には、どんどん引きつけられ今までない感銘を受けました。河村洋二郎先生、田熊庄三郎先生、三浦不二夫先生、佐々木哲先生、作田守先生、山田正先生、黒田敬之先生、岡田宏先生の原稿を読んで、本誌発行の意義はあったと確信しました。名誉会員8名の先生のJADR、IADRへの熱い思いと人脈をひしひしと感じています。次世代へのメッセージにもみられる研究者としての「夢」に溢れた原稿にJADR、IADRに関われたことに幸福感さえ持ちました。特に、JADRからの初代IADR会長作田先生の全貌を捉えての緻密な原稿から、人の交流が世界をリードすることを教えられています。

記録を中心とした内容からは、IADRにおいてJADRが歯科医学研究のリードしていることを読み取って頂けると思う。名誉会員を中心とした諸先輩の高邁で熱い思い入れがあったからこそ胸に刻み込んでいます。学術大会での世界各国研究者との連携などは、これからのJADRの発展におおいに参考になる記念誌になったと思っています。JADR発足時や一時期の議事録などがなかったことから、年表づくりに名誉会員に電話などをかけながら調べてまとめました。間違いなどがありましたら、ぜひご連絡ください。本記念誌は、JADRのホームページ(<http://www.soc.nii.ac.jp/jadr/>)にも掲載しますので、訂正について随時掲載させていただきます。

最後に、崇高な原稿を送って頂いた諸先生に感謝の意を表します。また、JADR記念誌編纂事務局とりわけ木村雄一郎さんの資料の収集と整理があつて発行できたことを付記しておきます。

50周年記念誌「JADRのあゆみ」編集委員長 奥田克爾

50周年記念誌「JADRのあゆみ」

発行日 平成18年2月20日

発行 国際歯科研究学会日本部会(JADR)

〒532-0011 大阪市淀川区西中島5-5-15 新大阪セントラルタワー8F

(株)コネット アカデミックプラザ内

Tel.06-4806-5656 Fax.06-4806-5658

編集 奥田克爾

制作 (株)コネット 制作部